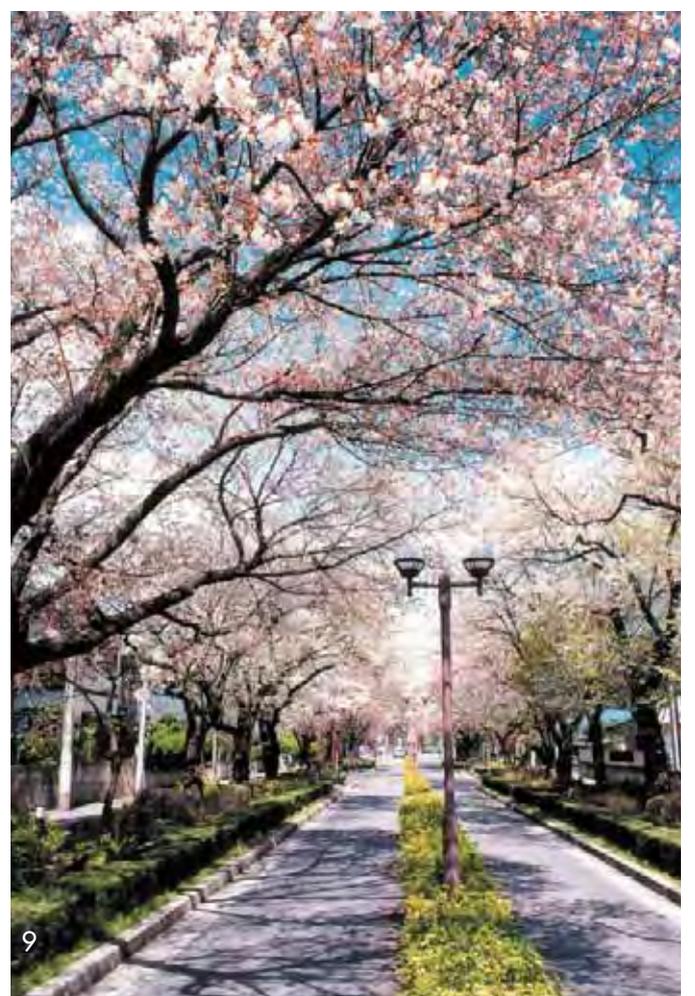
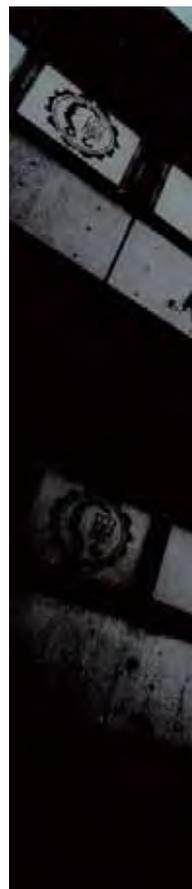


いま、キャンパスは	02
あいさつ1 同窓会にして同窓会にあらず 「辟雍会」なり	会長 荒尾 順秀 04
あいさつ2 体験そして追体験	学長 鷲山 恭彦 06
オリンピック特集	
特集1 800m座談会 陸上女子800mは東京学芸大学の伝統種目	梶原洋子 杉森美保 西村美樹 08
特集2 初の代表は自転車で それはトライアスロンから始まった	森本朱美 14
特集3 7年越しの夢 小金井キャンパスが作ったアテネへの道	楠原千秋 16
特集4 スタンドからの報告 アテネは感動の「るつぼ」だった	栗山英樹 18
座談会 同窓会が歴史を変える	鷲山恭彦学長 早川信夫氏 荒尾 順秀会長 20
いま教育は・・・母校は・・・	
・同窓会は後輩たちのために存在するー吉野尚也氏に聞く 26
・「學藝」から 30
・日本、インドネシア、ブラジルで教えて	井内幹雄 36
対談 私たちが教職をあきらめたとき	藤田典子 藤原奈緒 40
写真構成 新聞記者35年	遠藤満雄 44
教育とテレビ デジタル・モバイル時代	永尾和樹 48
時空を超えて	
・こぐれの素・東京学芸大学	こぐれひでこ 50
・女性が仕事を持つということ	井口保子 52
・東京学芸大学で学んだこと	平井信行 54
いま、母校は・・・・・・	
・国際交流～学芸大は世界へ 56
・芸術一世界へ 「美術科」、「音楽科」、書道分野 61
・国立大学法人・東京学芸大学へ 74
就職状況 76
部・サークル活動 78
55年ー6万人が学んだキャンパス「学芸の森」=その緑はこうして出来上がった 66
OB、OG=同窓生 北から南から	
・「マスコミOB会」のOBとは	西村康朗 80
・青森県支部の歩み	葛西守人 81
理事会・幹事会	
・「辟雍」に託された夢の実現を目指して	幹事長・池田義人 84
設立総会 86
会 則 89
役員一覧 90
入会案内 91
写真構成 あの日 あの頃 92
編集後記 96





- 1 今どきの女子学生は…
- 2 構義棟には「獅子の星座」を掲げて
- 3 吹き抜けの講義棟ビロティ
- 4 キャンパスのシンボル・人文科学系研究棟1号館
(旧図書館)
- 5 通学の足は自転車で
- 6 今どきの若者は…
- 7 北講義棟の一階には学生が憩うラウンジが
- 8 雪の日の正門への道
- 9 今も変わらぬ正門前通り
- 10 太陽光発電で資源景境に配慮



同窓会にして同窓会にあらず、 「辟雍会」なり

我らが母校である東京学芸大学の創立50周年記念事業を進める中の、一番大きな仕事は「全国同窓会」を作ることでした。当時、学生部長そして教育担当の副学長の任にあった私は、学生の就職状況の好転には卒業生と大学との強いパイプがどうしても必要だと考えていました。就職活動という実利的な面だけでなく、卒業生の社会活動での快挙を知るとき、そもそも卒業生に関する情報収集力の弱さに愕然としました。制度的に卒業生の顕彰がしにくい国立大学にあっても、しかるべき組織があれば、もっとお互いに祝福し励ましあうことができるのに、とも思ったものでした。

卒業生の中に、マスコミなどでもよく知られた方がかなりたくさんいらっしゃいます。母校の裏ホームページとも密かに言われていた某氏製作の「ガクゲイマニア」にもそういう欄がありました。しかしまた、身近な意外なところで、あるいは周辺で、同窓生が大活躍をしているのを知ることがあります。あの人も学芸大の卒業生だったのか、と知って驚いた経験は誰にでもあると思います。

私の場合、たとえば父が亡くなったときに墓を買ったのですが、そこのご住職は偶然にも本学卒業生でした。助手のころ学科が出す研究雑誌の出版でいろいろお世話になっていた表現社という出版社の社長さんも卒業生だということはかなり後で知りました。母校の事務職員の中にも卒業生が何人かいます。近頃の新聞では小学校教諭をやめて手作りヨーグルトで活躍している方や、中学で理科を教えながら東京の昆虫の標本を60年にわたって作り続けた方の記事が目にとまりました。ベトナムのストリートチルドレン支援などで外務大臣表彰を受けた

方もいます。98年冬季長野パラリンピックのスケート競技でのメダリスト松江美季さんや今年のアテネパラリンピックにも連続出場した要田美樹さん、本年度のホームカミングデーでのパネルディスカッション「オリンピックへの道—シドニーからアテネ、そして北京へ」に出席される3人のオリンピック出場者、この方々もわれらが誇りの同窓生です。

私たちの周りには多くの同窓生がさまざまな形で活躍しているのだと思い知ります。そのことをお互いに実感できれば、すいぶん楽しくもあり、励みにもなるだろうと思うのです。こんなところでも、全国同窓会の設立は期待されました。

外部からの大学評価が言われる中で、卒業生が母校をどうみているか、卒業後どういう期待と要望を持っているか、そういうことを外部評価者から尋ねられても、データを十分にそろえる基盤さえもない辛さを、いやというほど知ったこともありました。もちろん、東京都の教員を中心に組織された「社団法人 東京学芸大学同窓会」は早くから活動をしており、その輝かしい伝統は十分承知しておりましたし、各地に県人会のような役割をもった卒業生の組織があることも聞いていました。しかし、この間、目的・志を同じくする卒業生が集う、地域・職域を超えた単一同窓会があればいいのと思うことは多々ありました。

その組織は大学時代を懐かしむだけのものではなく、大学がもっともっとよくなること、そこに学ぶ学生が東京学芸大学に入ってきてよかったな、と心底思えるように、大学の手伝いをする、そのために汗を流すということ、これを目的とする同窓会です。



辟雍会会長 荒尾 禎秀

幸い、このことはすでに、私の前の学生部長であった小林志郎先生がレールを敷いてくださっていました。私は多くの仲間とともに50周年事業の終了する年までに、何とかその実際の立ち上げをするのが任務でありました。設立の手立てとして「ホームカミングデー」（卒業生集いの日）という企画を大学として毎年実施することにしました。蓮見元学長、岡本前学長のご理解ご賛同も得、また学内外の多くの方々のご共通理解を得ながら、「全国同窓会」の設立への準備は少しずつ進捗していきました。

大きく予定が狂ったこと、それは降って湧いたような「国立大学法人化」問題でした。これが方針の大転換になりました。

法案の内容や行方が分明ならざるなかで、「全国同窓会」設立を準備してきた私たちは、法人化後のわが母校には、単なる同窓会組織ではなく、もっと「新しい組織」の必要性を考えるようになっていきました。「東京学芸大学出版会」が、岡本前学長以下多くの人々の力でスタートしたことも関係していたと思います。これからの大学は、文化の受容と継承と創造とにおいて、卒業生を包括している社会と豊かな相互関係を構築することが求められる。その実現には卒業生と大学とが双方向で成果や要望を共有することが期待される。とすれば、作ろうとする組織は、単に卒業生だけの組織より、附属学校を含めた大学の教員も事務職員も、OB・OGの教職員も、そして在校生も加わった組織、これが一番いい形ではないか。この四者、卒業生・在校生・教員・事務職員がそれぞれのポジションでの特有の役割を発揮しつつ相互関係をつくる。卒業生と大学とが双方向で、力をもらい支

援をする、そのような組織を作ろう。このように考えたのでした。こうして設立されたのが「辟雍会」（東京学芸大学全国同窓会）です。

「辟雍会」はもちろん「同窓会」でもありますが、従来型のそれではなく、母校を応援する、大学と卒業生を結ぶキーステーションであります。

組織は立ち上がりましたが、まだ極めて脆弱です。このような組織の必要性の認識においては確たるものがありますが、実際上の行動のありようなどは歩きながら考えているところも多々あるといわざるを得ません。しかし、歴史はいつも未来を照らし出す鏡です。必要なものは興り、不要なものは廃れる。必要なことは為され、不要なことは打ちやられる。

この機関誌「辟雍」が、今後辟雍会会員の中核となり、多くの同窓生をつなぎ、大学とつながるツールとなることを、そして日本の教育や文化の新しい情報発信源となることを期待し、また確信しています。

（東京学芸大学教授：学部1968年卒業・修士1972年修了）



体験、そして追体験

小学校から中学校にかけてアオバズクの観察をしたことがある。家の椎の木の洞穴に毎年来て雛を育てたからである。雛は「ホッホッ」とは鳴かないで、「ヒリヒリヒリー」と鳴く。観察していると毎年こうした何か新しい発見があった。「あの鳥は蚊吹き鳥というんだ」と父が教えてくれた。「ホッホッ」と鳴き出す丁度その頃、蚊が出て来て、まるで蚊を吹き出しているようだからだという。昔の人は自然と一体になって生きて、自然をよく見ていて、鳥の特徴と季節感をうまく捉えた、実に味のある命名をするものだと感心した。

昭和30年代のことで、日本は高度経済成長期に入り始めていた。100年に1回の大雨にも耐えられるなどの名目で川の護岸工事が始まり、川沿いの大木は次々に切り倒され、コンクリート詰め of 堤防に変わっていった。風をまともに受けるようになった洞穴のある椎の木は、そのあおりで折れてしまった。営巣出来なくなってアオバズクも来なくなった。ひどく落胆した。



東京学芸大学学長 鷺山 恭彦

生態系の破壊と、その後起こってきた非行、暴力、自殺など、子どもたちを蝕む病理とは、無関係ではないだろう。自然の破壊が人間的自然をも破壊しているのである。魚とりをした川が醜く変貌し、アオバズクが来なくなった無念の思いは、自然と人間の関係を考える梃子を私に与えてくれた。

最近の学生諸君と接して思うことは、やはり生の体験から学ぶことの少なさである。そうなると、知識まであやふやになり、いわんや自然・人間・社会についての生き生きした見識などは生れようがない。知識も情報も、自分の切実な体験や傷心の観点から整序されて初めて、その人にとっての価値となり知恵となり、それを通じて初めて真に相互に共有される知となるのである。このダイナミズムを豊かに復権したい。ドイツ語を教えていたからドイツ旅行をして体験を積みといるにどまっているが、これは私の切なる願いである。体験出来なくても、追体験の深さで可能にはなる。



活動を開始した辟雍会は、まさにこうした様々な経験と知恵の宝庫であろう。卒業生の皆さんの経験を、学生諸君のより豊かな勉学のためにどうしたら共有できるだろうか。著作として学芸大出版会を出して頂くのもいいし、生きた経験の学としてカリキュラム上に載せてキャリア教育の一環としてお話し頂けるのもいい。その方途を考えていくのは、これからの大きな喜びであり楽しみである。

現在、生物の真山先生を中心に「学芸の森計画」を立案中である。本学は自然に恵まれた素晴らしいキャンパスを持っているが、これを「教育的、研究的、学術的に見て更に奥の深い自然にしていきたい」と言う計画である。春の七草、秋の七草は言うに及ばず、ガンピ、コウゾ、ミツマタなど和紙の材料の木があって教材に使えるとか、日本の蝶の食草、ウマノスズクサ、カンアオイ、ギジョランなど全部揃っていると、実のなる木、蜜のある花もあって、いろいろな種類の野鳥や蝶が飛んでい

るとか、多様な切り口の自然が豊かにあるキャンパスにしたいというもので、これには是非とも辟雍会の皆さんからの提案や助言を頂きたいと思っている。

この大学に赴任した4半世紀前、5月6月になると、夕方、「ホッホッ、ホッホッ」と懐かしい鳴き声が聞え、「あっアオバズクだ」と小さく叫んで、実に豊かな気持ちになったものである。だがしばらくして聞かれなくなってしまった。アオバズク用の巣箱を掛ければ、戻ってきてくれるのだろうか。



巻頭特別企画

—アテネオリンピック代表・杉森美保選手を囲んで—

陸上女子800mは 東京学芸大学の伝統種目

出席

梶原 洋子 (1966年保健体育卒 文教大学教授)

杉森 美保 (2002年生涯スポーツ科卒 京セラ)

西村 美樹 (生涯スポーツ科4年)

司会

遠藤 満雄 (1968年社会科卒)

2004年、発祥の地に戻って開催されたアテネオリンピックはオリンピック史に新しいページを切り開いた。日本選手の大活躍は特筆ものであったが、人類の歴史の中でもエポックメイキングな出来事であったと思う。21世紀最初のオリンピックにふさわしい内容であった。また東京学芸大学にとっても歴史的な出来事となった。同時に2人のオリンピック選手が生まれたからだ。師範学校時代の卒業生がヘルシンキ五輪(1952年)に出場したという記録はあるが、東京学芸大学となってからは、前回のシドニー大会に自転車競技で参加した森本朱美さん(1990年保健体育科卒)を嚆矢として、3人のオリンピック選手を輩出したことになる。

なかでも陸上女子800mに出場した杉森美保さんは、東京学芸大学の新しく、ゆるぎない伝統をしっかりと築かれた。陸上女子800mは、今から76年前、1928年のアムステルダムオリンピックで人見絹枝さんが日本女性として初めて銀メダルを獲得した種目である。ところがオリンピックではその後長くこの種目は採用されなかった。女子には過酷過ぎるという理由からだった。復活したのは東京オリンピックの前のローマ大会(1960年)から。そして日本は

次の東京大会で人見絹枝以来の代表を送った。それからまた長い沈黙があって、今回のアテネでの杉森選手が日本選手としては40年ぶりの出場となったのである。

ところでご存知であろうか。東京オリンピックのころ、東京学芸大学に日本を代表する800m走者がいたことを…。東京オリンピックの翌年(1965年)に2分11秒0という日本記録を打ち立てた宮本洋子さんである。現在の梶原洋子文教大教授である。そしてもう一人、現在、生涯スポーツ科4年の西村美樹さんがいる。西村さんもまた800mのスペシャリストとしてインカレで4年間負け知らず、つまり4連覇の偉業を成し遂げている。今年の日本選手権では杉森さんと最後までアテネの切符を争った。この日本選手権で杉森さんに破られるまで日本記録保持者だった。今でも二人はどちらが先に日本人初の1分台の記録を出すかを争っているのである。

ここに奇しくも日本記録保持者が3人いる。「東京学芸大学の誇るべき伝統」といわずしてなんであろう。

「辟雍」創刊にあたり、この日本記録保持者3人に集まっていたいただき、オリンピックとは何か、800m競技の難しさ、魅力などについて語ってもらった。



日本選手が大活躍したアテネ五輪開会式の日本選手団 (提供・毎日新聞社)

司会：まず、杉森さんに伺います。ここではあなただけがオリンピックの舞台に立たれたのですからね。実際のオリンピックはどんなものでしたか。

杉森：他のどの大会と比べても全く違う雰囲気でした。最高の舞台だと感じました。スタジアムに入った瞬間の歓声や雰囲気が今まで行ったことのあるどの競技場ともぜんぜん違うものを肌で感じました。

梶原：よくわかります。私も学芸大学からアジア大会に出たのは初めてでしたが、他の競技場とは全然違うと感じました。フワーツという緊張感のようなものがありましたので、その緊張感のすごさからかペースが崩れたのを覚えています。

司会：開会式はどうでしたか。

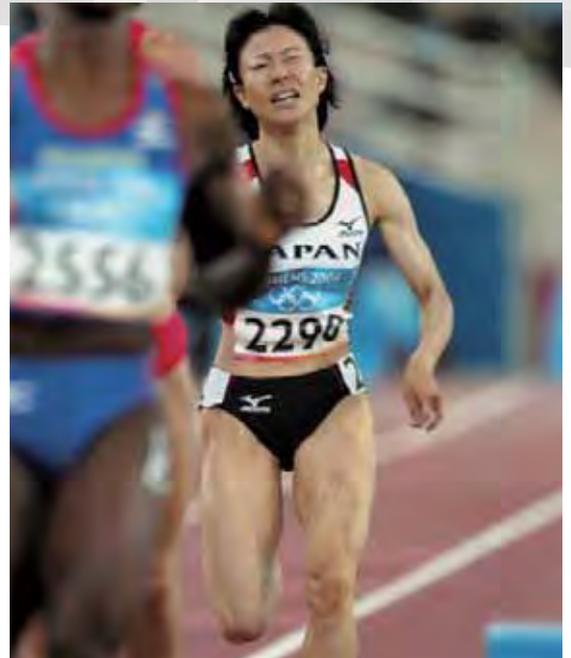
杉森：残念ながら開会式には参加できなかったのですが、でもアテネに着いて、スタジアムに入った瞬間に「あー来たんだなあ〜」という実感がジワジワ湧いてきました。そして、ついにオリンピックの舞台に立った、という嬉しさにも変わりました。

司会：レースではあなたは最初トップに立ちましたよね。

杉森：あれは緊張感からだったと思います。周囲がとても速く見え、無理やりにも前に出なくてはいけないと感じたのです。結局最後まで力を持続することができなくなって、自分の力を出しきれませんでした。とりあえずの目標にしていた予選突破もできず、自己ベストにも遠く及ばない2分2秒82という結果に終わりました。

司会：ところでオリンピックを意識したのはいつごろですか。大学時代から夢に描いていたのでしょうか。

他のどの大会と比べても全く違う雰囲気でした。最高の舞台だと感じました。



アテネ五輪女子800m予選で力走する杉森美保さん（提供・毎日新聞社）

杉森：大学までは短距離選手だったので、オリンピック選手になれるとは思っていませんでした。アジアレベルで活躍できたらいいな、と願うくらいでした。京セラに入って大森（国男）監督に出会ってからです。実は大学時代、400mでどうしても54秒が切れなかったのです。それを大森監督の指導で53秒台が出せ、監督からそのスピードを生かして800mをやってみないかと勧められたのです。エドモントンの世界陸上で400×4リレーの1走を走らせてもらったのですが、初めて世界の舞台で400mのスタートに立ち、今度は一人で走りたいと思ったのです。もっとも自分の400mでは世界が遠い、監督の言われるように800mがいいかな、と思ったのです。そして世界陸上より上のオリンピックを意識するようになったのです。

司会：梶原さんが800mを始めたきっかけは何ですか。

梶原：大学に入ってからです。高校（都立駒場）時代は、200mでインターハイに行きました、また、幅跳びや跳躍をやっていました。インターバルトレーニングをすると、1、2本では負けるのですが本数が多くなると他の人より強かったのです。もしかすると私は長い距離の方がむいているのかなと感じてました。高校3年の秋に高校生活の思い出として400mで東京女子選手権に出場したら、オリンピック候補選手に勝ったんです。それで大学では400mと800mを始めました。でも800m

は特に練習はせずに、1回走っただけで大会に出ました。なんでもいいからついていこうと思ったところ、600mまではついていけたので、この種目ならいけるかなと感じました。

司会：西村さんは800mをいつから始めたのですか。

西村：高校（東京）からです。陸上部に入ったとき3000mを走ってみましたが、長距離はあまり好きではなかったので、400と800に切り替えました。

司会：子供のころから走ることが好きだったのですか。

西村：中学時代はバスケット部でした。でも子供のころから走ることが得意で、高校では得意な走りをいかしたいと陸上競技を選びました。

司会：杉森さんも陸上を中心に考えて高校（埼玉・星野女子）を選んだのですか。

杉森：いいえ、わたしは英語を勉強したくて英語科のある高校にいきたかったのです。陸上の推薦の話もきていましたが先生に断ってもらっていたくらいです。それで見学に行った星野女子高の雰囲気が気に入って決めました。でも、陸上を中心の高校生活になってしまったところがありますね（笑）。

梶原：私の場合は、陸上も勉強もしたいと思ったため、駒場高校に入りました。最初は勉強に興味はなかったのですが、クラブで活動するのであればある程度の勉強もできなくてはだめだといわれ、かなり勉強も頑張ったのを記憶しています。卒業時には成果も出ていました。高校3年までは運動していましたので、勉強と運動の切り替えはしっかりできる方だと思っていました。

子供のころから走ることが得意で、高校では得意な走りをいかしたいと陸上競技を選びました。

司会：東京学芸大学での競技生活はhowでしたか。問題はなかったのでしょうか。

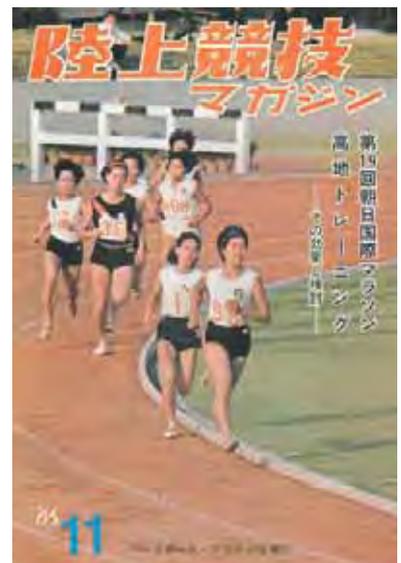
梶原：大学では、週2回の練習でしたので、他の日は創意工夫で練習できるありがたい環境だと思いました。

西村：現在は、大学での練習は少なくなっています。高校時代からの指導者に一貫して指導してもらいたいということもあって、そちらの練習量が多くなっています。

杉森：私も自由な雰囲気練習できました。

司会：梶原さんは東京オリンピックの直前に大学に入れたわけだから、当然オリンピックを意識したのでしょうか。

梶原：もう1年時間があれば出場できたのではないかと思いますけどね。残念ではありません。間に合わなかったんですよ。今思うとオリンピックというのは素晴らしい



宮本(梶原) 洋子さんが日本記録を出した時の走りは「陸上競技マガジン」(1965年11月号)の表紙になった。先頭を走るのが宮本さん(野口純正氏提供)

素晴らしい勲章だと思います。もしオリンピックに出場できていれば自分の人生も多少変わったと思っています。また出場できなかった悔しさもありますので、他の面でチャレンジしなくては、という考えにもつながりましたけどね。

司会：梶原さんが日本記録を出したのは東京オリンピックの翌年だったのですよね。

梶原：はい、そうです。そのときはオリンピック選手よりも強かったです。

司会：次のメキシコに出ようとは思わなかったのですか。

梶原：私の記録では世界には通用しないということはわかっていましたし、東京オリンピックは開催国として出場資格も緩やかだったのですが、メキシコとなるとそうは行きません。強化選手の中に入ることができれば、出場も可能だったかもしれませんがね。

司会：西村さんはオリンピックについてどう思っていますか。

西村：はい、出場したいと思っています。ただ、本格的にオリンピックにいきたく思ったのは昨年くらいです。大学に入学して4年生のときアテネオリンピックがある

とわかっていましたから、大学生活の思い出にオリンピックに出て、そこを陸上競技人生の頂点としたいと思っていました。

司会：それを先輩の杉森さんに阻まれた。杉森さんに日本記録を破られるまでは、「行ける」と思っていたのではないですか。

西村：はい、それまではそう意識していました。

梶原：私の後、37年ぶりに800mで学芸大学がチャンピオンを取ったと新聞に出ていたときは感激しました。それが西村さんでした。西村さんが私の果たせなかったオリンピック出場をしてくれるかなと思ったものです。

司会：アテネは杉森さんでしたが、次は西村さんの番ですね。もちろん杉森さんも簡単には負けないでしょうが。

西村：オリンピックは、そう簡単に出られるものではないと思います。もっとスピードをつけないと通用しないということも感じています。

司会：あの入見絹枝さん以来、800mは日本の因縁の種

世界に通用するためには1分台の記録を出すことの方が大切だと感じています。

目です。その歴史を学芸大が守り続けているというのは本当に誇らしく思います。杉森さん、後輩の西村さんをどう思いますか。

杉森：西村さんのことは私がまだ短距離を走っていたころから、800mの有名な選手として知っていました。その後輩と一緒に走ることになる



とは思っていませんでした。一緒に走ることになっても、800mでは私の方が後輩。すごい選手だと思っていました。

司会：西村さんは杉森先輩をどう思っていますか。

西村：実は誕生日が同じなのですよ。血液型も一緒です。非常に近いものを感じています。(笑)

司会：次のオリンピックに出るには杉森さんを負かし、杉森さんの記録を破らなくてはなりませんね。

西村：杉森さんも同じように考えていると思いますが、日本記録も大切かもしれませんが、世界に通用するためには1分台の記録を出すことの方が大切だと感じています。日本記録よりも世界のタイムを意識していきたいです。また、標準記録があるから、それを突破する必要があります。世界を視野においていきたいと思います。

梶原：西村さんは高校のときからずっとトップを走ってきて、大学では4連覇。それを維持していく強さはなかなかのもので。心理的な強さを維持していくのは素晴らしいと思いますね。

司会：高校のときは優秀な成績だったのに、大学に入るとその成績が落ちていく、という燃え尽き症候群のようなものに襲われる人も多いのに、皆さんはそういうことはなかったのですか。

西村：私は東京出身ですし、大学に進学したからといって大きな変化はありませんでした。ですから、陸上競技への熱意が落ちるということはありません。

梶原：私の時代と違って、今は周りにはレジャー的な要素が増えてきていますが、もしそこに夢中になってしまうと、強くもなれないでしょうし、スポーツ界のトップにはなれないと思いますね。お二人はそこをうまくコントロールされているので結果にもつながっていると思いますね。

司会：ところで800mの魅力は何ですか。

西村：走っていておもしろいです。かなり苦しいし、練習は更につらいですけどね。

杉森：短距離は自分のレーンを走りますが、800mはすぐにオープンになって駆け引きが始まります。短距離は、大体持ちタイムどおりの結果がでることが多いのですが、800mの場合、短距離的な部分と長距離的な部分があるわけです。だから持ちタイム以外の要素も結果につながる人が多いと思います。自分にも勝てる可能性があると思える種目で、魅力的な種目だと感じています。

梶原：駆け引きということとは同感です。800mは格闘技的なんです。どう戦っていくかなど、メンタルな部分も影響するし、戦術も重要な競技だと思っています。また、大変つらい競技です。走った後はまともに歩けないほどなのです。外見ではニコニコしていますがね(笑)。だから精神的に強くなくては出来ない種目だと思っています。

司会：学芸大学を進学先に選んだ理由は何ですか。

西村：自分のペースで練習できるということが一番大き

800mはすぐにオープンになって駆け引きが始まります。

かったです。大学での練習以外の日には、高校で引き続き指導してもらえということが選択の理由にはありました。他の大学だと自分自身の個性が出せないかもしれないという心配がありました。



梶原：国立大学というのは、自分のペースでもいいよ！という許容範囲を広くして迎えてくれるところがあり、それが良さでもありますね。

司会：教員になるという目的はなかったんですか。

西村：はい、ありました。現役を離れてもずっと陸上に関われる環境にいたいと思ってますから教員なのは視野に入っています。教員免許が取れるというのは大きな魅力です。

司会：杉森さんはどうですか。

杉森：やはり、教員志望だったので、教員免許が取れることが大きかったです。陸上がすごく強い名門校にはあまり魅力を感じませんでした。学芸大学には、陸上で強い選手が数名いて、更に雰囲気もいいと聞いていたので、私はそういう中で一緒に楽しみながらやっていきたいと思って、選びました。

梶原：私の場合は、たまたま高校の先輩に学芸大学出身の方がいました。その方は、中学校教員だったのですが、合宿のときによく来てくれていたので、大学そのものが印象に残っていました。あと、国立大学なので、私学に入るよりも親孝行できるかな、ということもありましたね(笑)。

大学で教えていただいたのが、亡くなった押切先生です。先生は知らないことがあれば一緒に調べていこうとか、考えていこうとおっしゃって、自分で考えさせるという指導をしてくださいました。そのときの指導は今も自分の中では大きく、生きています。

その後、マラソンなど競技の解説の仕事させ

ていただけてますが、自分は教育系の大学の出身だということを強く意識します。つまり、この選手が伸びて行くために必要な言葉、教育的な視点での言葉が自然に出てくるよう培われてきたのは、学芸大学出身だからだと思います。一つのことをみるのにも、バランス感覚のある捉え方ができたのは、学芸大学にいたからだと思います。この点は、周囲の人にもよく褒められます。学芸大学にいたことが本当に私の財産になりました。

司会：他のお二人はいかがですか。

杉森：陸上を続けながらアルバイトをしていました。大学やアルバイトで学んだ様々な経験は、現在のチームの中で一番年上である自分にとって、大変役に立っていると感じます。学芸大学を出たということが今のチームの自分の立場を築いているといっても過言ではないと思います。

西村：私の場合、大学生活はまだ現役なので勉強も大変ですが、競技を続けることができている、両立できる環境にさせていただいているということは大学のおかげだと思っています。

司会：今、大学に期待すること、こうなってほしいということはあるですか。

梶原：全国同窓会「辟雍会」が発足したのは素晴らしいと思います。これから卒業生の支援、在校生の支援を丸となって行っていただきたいと思います。ぜひ多くの方を支援できる会にして欲しいです。

杉森：私は、このような座談会を開催していただいたり、先輩後輩などの多くのつながりを持たせてくれていることが大変嬉しいです。今日の会でも、皆さんのお話を聞くことができ多くのことを学べる機会になりました。ぜひ、これからもこのよう

に学べる機会を作っていただきたいと思います。

西村：学生は勉強、練習と試合などで忙しいこともあるので、ぜひ両立できる基盤を作っていただきたいと思います。もちろん、自分達も努力の必要はあると思っていますので、よろしく願います。

司会：最後にそれぞれの皆さんのこれからの予定を教えてください。

西村：来年フィンランドで開催される世界選手権を目指します。

杉森：この後すぐ、国体(さいたま)への参加、そして、全日本女子実業団駅伝も走りたいと思っています。来年は世界選手権出場が目標です。

梶原：解説をしていても後輩が出ているというのは嬉しいものです。解説中は声に出せませんので心の中で強く応援しています。個人の予定としては、私は大学の教官であり、研究者です。それで専門分野(運動生理学)で国際学会など、海外で活躍することも視野に入れて努力してまいります。11月にトルコ、来年はスウェーデンでの学会参加も決まっていますので、チャレンジしながら頑張っ

司会：皆さんの活躍をお祈りし、期待もしております。本日はありがとうございました。

全国同窓会「辟雍会」が発足したのは素晴らしいと思います。

それはトライアスロンから始まった。 教員との二足のわらじ



シドニー五輪・自転車代表
森本 朱美

東京学芸大学の初のオリンピック代表は、2000年シドニー大会の自転車競技に出場した森本朱美さん（1990年A類保健体育科卒）である。オリンピック出場当時は鳥取県若桜中学校の体育教師だったが、現在は鳥取空港のすぐ近くにある鳥取県立湖陵高校に勤務している。大学時代はバスケット部に所属していたが、当時の学芸大学は1部リーグから2部に転落していたため「ほとんど自分が活躍した記憶はない」（本人）というほどの目立たない存在だった。その森本さんがどのような経緯でオリンピック出場を果たしたのか、勤務先の湖陵高校を訪ね、聞いてみた。

—— 自転車選手になった経緯を聞かせてください。

森本：大学を卒業して故郷の鳥取に帰りまして、小学校に勤めたんです。実はまだ採用試験に合格していなかったので「講師」という身分でした。鳥取県米子市の近くに皆生（かいけ）温泉というのがあるのですが、ここでトライアスロンが行なわれています（皆生温泉は日本のトライアスロンの発祥地。1981年、地元旅館組合青年部の企画で町おこしの一つとして始まった。最初の出場者はわずか女子2人を含む53人。今年で24回の歴史を刻んでいる）。このトライアスロンに出てみないかという話があり、91年に初めて参加しました。それまで自転車などやったことはなかったのですが、走って見ると結構おもしろいし、成績も悪くない。それで自転車競技の専門家が「本格的にやってみないか」と誘ってくださったのです。

—— トライアスロンから入ったのですか。ということ

は皆生温泉がなければ、オリンピックはなかったのですね。

森本：その通りです。そのころはまさかオリンピックに行くなんて夢にも思っていませんでしたからね。トライアスロンに出るのではじめて自転車を買ったのですから。

—— それからどのようにして日本のトップになったのですか。

森本：仕事の方は4年後に県の採用試験に合格して、正式に小学校教員になりました。一方趣味の自転車の方はますますおもしろくなってきて…。94年に広島でアジア大会が行なわれましたね。実はそのアジア大会に向けて、広島で全日本選手権が開かれたんです。鳥取から近いですし、その広島で全日本に向けての鳥取予選が開かれるというので出てみないか、という話になったのです。そうしたらその予選を通り、さらに全日本に行ったら、そこでも勝ってしまったんですね。あれよあれよという間に、アジア大会の代表です。

—— 自転車競技にはたくさん種目がありますが、あなたの種目は何ですか。

森本：ロードレースです。マラソンのように公道を走る競技です。

—— なるほど、トライアスロンから入ったのですものね。でもオリンピックはロードレースではなかったように思いますが…。

森本：はい。「ポイントレース」という種目でした。アジア大会にはロードレースで出たのですが、シドニーの出場権は日本には1つしかなかったのですね。つまり日本からは一人しか出場できない。私

の上に大変に強い選手がいて、どうしてもその人に勝てない。つまりロードレースでは出場できないのです。それでポイントレースなら枠がある、というので、そっちで出場を狙ったのです。

— 「ポイントレース」とはどんな種目なのですか。

森本：トラック競技です。大会によって少し違いますが、シドニーの場合は1周250mのトラックを96周、つまり24km走りました。それで2kmごと（8周ごと）にチェックポイントがもうけられ、そこを何位で通過したかでポイントが与えられるのです。1位5点、2位3点、3位2点、4位1点とね。つまり2kmごとに4位以内で通過しないとポイントがもらえないのです。アトランタオリンピックで橋本聖子さんが出場した種目ですよ。

— それであなたは16位という成績でしたね。

森本：はい。結局12回のチェックポイントで1度も4位以内に入れませんでした。5位は何度かあったんですがね。ゴールは後ろから3番目でした。

— あれから4年、今年のアテネオリンピックでした。

森本：シドニーに出てみてね、世界とそれほど力の差はないと感じたのです。自転車競技は日本ではまだマイナーです。特に女子は選手も少なく、基盤がありません。それに比べてヨーロッパはとても盛んでプロ選手もたくさんいます。でもポイントレースならちょっとがんばれば上にいけるかもしれないと思って、アテネも目指しました。

— 連続出場はならなかったのですね。

森本：はい。悔しい思いをしました。ほんのわずかの差ですが全日本選手権で3位に終わってしまったの

です。日本の出場枠は2人だったので、もれてしまいました。

— では、次の北京を目指して…

森本：まだそこまでは考えていませんが…。次は40歳を超えますからね。でも年齢は関係ないという気持ちもあります。女子の自転車競技は国体種目にもありませんし、女子自転車部のある高校も日本にはありません。私は高校教師ですからそんな底辺を広げる仕事もしてみたいとも思っています。

— 東京学芸大学の学生時代には想像もしなかった人生の展開ですね。振り返って母校にはどんな思いがありますか。

森本：本当についこの間まで自分がオリンピックに行くなんて夢にも思っていなかったのですが、本当に何が起るかわかりません。自分は教師になりたいくて、東京の大学に行きたくて、学芸大に行きました。あのキャンパスで過ごした4年間があるから、今の自分があると心から思っています。

森本さんは^{とつとつ}訥々とした話し方で、その表情からも生真面目な高校教師という人柄が伝わってくる。オリンピック出場をことさら誇るわけでもない。むしろ教師として何をするか、女性として何をするかを真剣に考えているように思えた。そして故郷の鳥取をこよなく愛していることも、卒業後、まっすぐ鳥取に帰り、小学校講師から始めて、県立高校教師になった経緯からも伺えた。

(インタビュー・遠藤 満雄)



森本さんが出場したシドニー五輪の開会式 (提供・毎日新聞社)

小金井キャンパスが作ったアテネへの道 ビーチバレーで世界を駆け巡る



アテネ五輪・ビーチバレーボール代表
楠原千秋

アテネオリンピック・ビーチバレーボール代表の楠原千秋さん（1998年生涯スポーツ科卒）は、メダルが期待されていた。98年、愛媛県松山市のダイキ・ヒメッツに入団以来、バンコク、プサンの2つのアジア大会でそれぞれ銅メダルを獲得、また世界でもトップレベルの活躍を続けていたからだ。しかしながら、アテネでは組み合わせにも恵まれず、予選敗退という結果に終わった。それでも本人はますます元気。アテネから帰るとすぐ、イタリア、ブラジルと世界ツアーに飛び回る生活を続けている。その合間、故郷の松山に戻ったところを訪ね、「世界の楠原」を育んだヒメッツのコートでインタビューした。

— アテネは残念な結果でしたね。

楠原：はい。ご期待に応えられなかったのですが、実は当然の結果でもあるのです。

— どういう意味ですか。

楠原：メダルもあれば予選敗退もあり、ということです。予選リーグで第1戦にアメリカと当たることがわかったとき、そう思いました。アメリカチーム（ウォルシュ・メイ組）は予想通り圧倒的な強さで優勝しましたよね。アテネでの最初のゲームがこ



(写真提供・ダイキ)

のアメリカ戦だったのです。アメリカに負けるのは当然なんです。実はオリンピック前のギリシア・ロードス島というところでワールドツアーがあって、私たちは初めてアメリカと対戦したんです。そのとき「とても勝てる相手ではな

いな」と感じました。問題は第2戦のチェコ戦でした。世界ランキングでは私たちよりずっと上の10位ですが、直前のワールドツアーギリシア大会ではストレート勝ちしていたし、勝てる自信はあったのです。しかし悔しい逆転負けで、決勝トーナメントが遠くなりました。3戦目のオランダにストレート勝ちすればまだ可能性はあったのですが、結果は2-1。でもオリンピックという最高の舞台上で1勝できたのはものすごい感激でした。

— ビーチバレーはアテネが3回目の公式競技ですよ。1996年のアトランタ大会から採用された若い競技です。あなたが日本代表になるまでのいきさつを話してください。

楠原：ビーチバレーはアメリカで大変に盛んな競技です。日本もアトランタ以来男女1組ずつ出場してきたのですが、今回は私たちだけです。オリンピックに出場するにはワールドツアーでランキング20位以内という条件があります。このランキングは世界各地を巡って年間7戦から8戦行なわれるツアーでポイントを稼いで決定されます。過去2年間のトータルの成績とっていいものです。私たちはアテネの直前に20位のランキングを獲得して出場権を得ました。まあ、最下位当選みたいなものです。それで予選リーグではランキング1位のウォルシュ・メイ組と当たることになったのです。

— ということは日本代表ではあるが、日本国内で選考されたのではない、ということですね。世界の中の楠原なんだ。

楠原：そういうことですが、ちゃんと日の丸のついた日本のユニフォームを着て出場しましたからね。

— ビーチバレーはいつから始めたのですか。

楠原：最初にビーチバレーの大会に出場したのは大学時代です。大学では、いや小学校時代からずっとインドアのバレーボールをやっていて、大学でもバレーボール部でした。私の時代は結構強くて、ずっと1部リーグでしたよ。4年のときはキャプテ

ンやらせてもらって、春と秋の関東インカレで優勝し、MVPに選ばれました。ビーチバレーはそんなバレーボール部時代に、本当に遊び半分です。3年のとき、チームメイトが話を持ってきて、おもしろそうだから、とその友達と二人で出てみたんです。そうしたら関東大会で勝ってしまい、兵庫県で行なわれた全国大会に行く羽目になっちゃった。そこでも勝ち進んでとうとう、優勝しちゃったんです。そのときの決勝の相手が今回のオリンピックでペアを組んだ徳野涼子でした。彼女は筑波大の4年生でしたが、小学校時代からのライバルです。ずっと四国の松山でバレーボールやってました。高校から別れて彼女は筑波大、私は学芸大に進みましたが、ずっと交流は続いていました。彼女は1年上ですけどね。そのライバルの徳野に勝ってしまったんです。それでもビーチバレーをやるなんて思ってもいませんでした。

——それが徳野さんと二人で世界を転戦し、オリンピックに出るまでになったのは…。

楠原：徳野が卒業するとき、松山でビーチバレーのチームに入ると聞いたことがきっかけでした。わたしは大学出たら教師になりたいと思っていましたからね。生涯スポーツ科でしたけど、ちゃんと教職課程も取っていたんです。教育実習だって行きました。2単位足りなくて免許もらえませんでしたけどね。徳野の話では松山のダイキという企業がビーチバレーのチームを作ってそこで選手を採用する。その第1号に徳野がなる、ということでした。そのときは「へえー、そんな道もあるのか」と思ったものです。それが1年後、今度は私が就職する番になって、徳野から来ないか、と誘われたのです。それで「地元に戻るんだから」とお世話になることにしたんです。

——「ダイキ」というのは浄化槽など住宅関連の販売業ですよ。大変な優良企業だ。あなたはそのダイキが運営する「ヒメッツ」というクラブに所属するのです。ダイキはビーチバレーだけではなく、ボート競技にも力を入れていて、今回のアテネにもボートで出場し、6位入賞を果たした選手もいますね。

楠原：はい。軽量級ダブルスカルの武田大作選手です。

——ヒメッツに入ったということはオリンピックを目指すということですね。

楠原：はい、最終的にはそうです。入ったその年にバン

予選リーグでの奮闘ぶり (写真提供・ダイキ)



コクでアジア大会がありましたからそこに出場し(銅メダル)、さらにワールドツアーに参戦するようになりました。

——シドニーは夢を果たせなかったわけですね。

楠原：ええ。だから今回は7年越しの夢の実現でした。

——それほど世界を駆け回っていても、オリンピックはやはり違いますか。

楠原：まったく違いますね。開会式の入場を待っている間に、もう体が震えてきましたもの。何から何まで最高の舞台でした。

——あなたにとって学芸大学はどんなところでしたか。

楠原：わたしは4年間正門のすぐそばに下宿していて、バレーボール部員の中でも、学校に一番近かった。4年間その下宿と体育館の往復でしたから、小金井キャンパスは私の大学生活のすべてでした。ビーチバレーに出会ったのも大学時代だし、オリンピックの夢も小金井から始まったといえますね。

楠原・徳野のコンビが育ったダイキ・ヒメッツ朝生田(あそだ)コートは、松山城から5kmほど離れた住宅街の中にある。そのコートで楠原は2時間ほど試合形式の練習を続けていた。175cmの長身は瞬間に汗にまみれた。小学校3年でバレーボールを始め、中学校時代は全国大会愛媛県代表に選ばれている。高校は豊後水道を渡った大分県の私立扇城高校(現・東龍谷高)に進学。1,2年生時は春の全国大会ベスト8、2年のときの山形国体では優勝の経験もあるという。学芸大には高校時代の先輩に学芸大に進んだ人がいて、その先輩を頼っての進学だったとも言う。いまや、世界の楠原になり、次の北京を目指して、新しいパートナーとスターと切ったばかりである。そのさわやかな表情から、いつしか教壇に立つ彼女を想像してしまった。

(インタビュー・遠藤 満雄)

● アテネは感動の「るつぼ」だった



野球評論家
栗山 英樹
(1984年保健体育科卒)

アテネオリンピックをつぶさに観戦する機会に恵まれた。野球、ソフトボールという僕の「専門分野」はもちろんのこと柔道、水泳、陸上、レスリングなども見ることができた。その感想を一言で言うと、言い古された表現かもしれないが「世界最高の舞台だ」ということにつきる。

たとえば、開会式。僕は聖火台のすぐ横の辺りで見ただけけれど、もうずうっと体中に鳥肌が立っていた。今までに経験したことのないような興奮状態だった。観客席にいる僕がそうなのだから、あのグラウンドに立って行進をした選手はいかばかりであったか想像するのは難しくない。あの「狭い」空間に世界の200カ国以上の人々が集まっているのだ。しかもみんな仲良くである。こんなことってオリンピック以外にはありえない。スポーツの意味を改めて考えさせられた。

そもそもスポーツは人間の「生きる」という営みの中ではなくてもいいものである。絶対に必要なものではないのだ。先輩からこんな話を聞いたことがある。「僕らの時代はスポーツをやっているというだけで何か悪いことをしていると見られたものだ。罪悪視されていたんだよ」と。そんなことを思い浮かべながら、今、時代はオリンピックを必要としている。紀元前に戦争に明け暮れていたこの地でオリンピックが始まったのだということを感じ合わせながら、不思議な感覚に襲われていた。

オリンピックは「競争」が原点である。どちらが強いのか、どちらが速いかを競うのである。その争いはわずか10秒で決着のつくものもある。100m競走を目の前で見たが、同時にゴールに駆け込んだ4人は一体誰が勝ったのか、僕の目では判断がつかなかった。その瞬間に4年間の人生をかけた争いもあれば、球技のように何時間

もかけて決着をつける競技もある。それらが最高の舞台で展開されている。これはもう単なるスポーツの試合ではない。スポーツではくれない広がりがあると感じたものだ。

僕の専門である野球について報告しよう。結果は銅メダル。「残念」と思った人が多かったかもしれないが、僕はこんな辛い気持ちで野球を見たのは初めての経験だった。確かに日本チームは金メダルを取りに行った。そのために万全の体制を敷いた。選ばれた選手が日本のトップばかりだったどうかは別にして、あのチームは最高のチームだった。選手は全員が死に物狂いだった。みんな切羽詰った気持ちでいた。それが痛いように伝わってくるので見ているこっちが息苦しくなってくるほどだった。日本に帰ってプロ野球を見たら、正直ほっとした気持ちになった。

選手がどれほどの気持ちで望んでいたのかを、僕が目撃した一つのシーンを例に挙げてみたい。キューバ戦のことだ。この試合の帰趨がメダルの行方を決定付けるといっている。マウンドには日本のエース・松坂がいる。ランナーを背負い、ピンチである。打者がファールを打った。審判は新しいボールを松坂に投げ渡した。すると捕手の城島が、そのボールをこっちによこせと松坂に要求した。ふだんならありえないことだ。松坂は渡されたボールを打者に向かって投げればいいのか。しかし、城島は松坂からボールを受け取ると、そのまま、また投げ

銅メダルを獲得した日本野球チーム（提供：毎日新聞社）



返した。多分城島は、このときそのボールに日本チームの魂を吹き込んだのだと思う。この城島の「入魂」が功を奏して、このシーン、松坂は投げ勝ち、そして大事なこの試合をものにした。

これほど一つ一つの細かいシーンにも気を配って日本は戦った。それでも強いチームが常に勝つのが野球ではない、ということを実証する結果となったのだ。

日本の金メダル第1号になった谷亮子選手には本当に感動した。よくぞやってくれた、日本のスポーツ界が歴史的に変わる瞬間を作ってくれたと思ったものだ。

谷選手は野球の谷佳知外野手（オリックス）の奥さんである。夫婦してのオリンピック出場で話題をさらっていた。奥さんは「やわらちゃん」の名で世界を制覇した日本のエースである。確かに亮子選手が築いてきた実績はすごいものだ。しかしプロ野球選手と結婚して、家庭を築き、そしてオリンピックで戦うというのは、今までの試合とはまったく別のものだったはずだ。世間が華やかに取りざたするのは違って、プロ野球選手の奥さんというのは大変な立場である。夫の健康管理の責任は奥さんにある。それをこなし、そして自分は世界のトップ

に立ち続ける、これは並大抵のことではない。亮子選手はオリンピック直前に怪我をした。金メダル獲得後のインタビューで「あの怪我を言い訳にオリンピックに出られなくなったら楽だろうな、と思った」と話していた。その気持ちが痛いほどわかる。

世界を見れば結婚した選手や子供のいるトップ選手も数多くいる。ところが日本にはほとんどいない。女性は結婚したら競技はやめるもの、と

というのが常識のようでもある。それを谷亮子選手は見事に覆した。日本の女性スポーツのあり方が革命的に変わるきっかけを作ってくれたと思うのだ。

東京学芸大学のOGが二人、このオリンピックに出場した。同窓生としてこんなにうれしいことはない。これもまた日本のスポーツ環境が変わるきっかけになるのだと思う。日本の競技スポーツは、いわゆるスポーツ学校にまかされてきた。体育大学があるし、スポーツを呼び物にする私立大学も数多い。しかし学芸大学は教員養成を中心にした国立大学だ。まさに文武両道を目指す大学である。オリンピック選手の誕生で、東京学芸大学が文字通り学問とスポーツを両立させ、調和させている大学であることを世間に誇れるし、だいいち子供たちに話してやれる。すばらしいことだ。僕は長い間、東京学芸大学出身の初のプロ野球選手として話題にされてきた。でもそんなことではダメなのだ。ごく当然のこととして学芸大学出身が認知される時代を作らなくてはならないと思う。その時代がようやく始まったと、アテネで確信したものである。

（聞き書き・遠藤 満雄）

法人化によって大学はどう変わる？ 変わらなければならないか？ そして評議会の役割は？

出席

鷺山 恭彦 学長

早川 信夫 氏

(NHK解説委員・東京学芸大学経営評議会外部委員)

荒尾 禎秀 評議会会長

荒尾 本日は評議会がこれから何を行い、何をめざしていったらよいかを考えるヒントのようなものを授けていただけたらと思っております。まず自己紹介から。

鷺山 昨年の11月以来、学長を務めておりますが、それまでは国際理解教育課程の欧米研究専攻でドイツの語学・文学・思想、ヨーロッパ文化や国際関係的な授業を担当してきました。



法人化という転換期で今は当面のことで精一杯ですが、これからは評議会のことも含め本学の在り方や将来構想など、大いに研究したり議論したりしなければならないと思っています。

早川 私はNHKに入社し、最初に教育の取材に入ったのが1987年の臨教審の最終答申の日で、以来、文部省記者クラブの担当になりまして、教育関係の取材をしてきました。教育との関わりは時間的にいってもそんなに長くないですが、見てきたこと、感じてきたこととお話出来ればと思います。

荒尾 今年4月から全国の国立大学が法人化されましたが、何がどう変わったのでしょうか。

鷺山 これまで教授会が審議決定する形できたのが、法人の役員会や学長の権限が強まり、決定権が学長にあって強いリーダーシップを発揮出来る形になりました。しかし実際は教授会や教育研究評議会の議論や決定が尊重されて運営されていますし、学長としてぎりぎりの判断を迫られた局面はまだありません。ただ競争的資金の獲得や広報戦略など、いろいろな局面でのリーダーシップを発揮していかなければならないと思っています。新しい

組織としては経営評議会が出来ました。早川さんのようなジャーナリズム界や経済界、教育界など各界の識者に加わっていただき大学の経営について提言を頂いています。あと中期目標・中期計画が求められ、6年後に達成度が評価されます。目的意識性が強まりました。

荒尾 早川さんは、この法人化をどうご覧になってますか。

早川 きちんと意識を持ってやっているところはこれから変わって行くと思います。結果が出るのは数年先でしょうね。教育を受ける側は、教育を受けた事で自分たちにどういう利益とかメリットがあって、将来的にどう役に立つのかということを知りたいわけですよね。そのことについての目標なり方針をまず知らしめてほしい。そして目標どおりに運営されているのか知りたい。自分たちも関わってサポートできるのだったら力を出そうではないかと思っています。このたび東京学芸大学に全国同窓会ができた、ということをお聞きして、これまで国立大学はいかに同窓生を大事にしてこなかったかという感じがしています。多くの国立大学で学部ごとの同窓会はあっても全学的な同窓会を持っている所はおそらくほとんどないのではないのでしょうか。今度法人化された各大学を見ますと、同窓会担当理事というのを作って、その理事が同窓会名簿作りに本気で取り組み始めています。卒業生のネットワークというのは大学にとって大変な財産なんですけれども、その財産を活かしきってない。



荒尾 私立大学は同窓会組織がしっかりしていて活発なようですけれど、国立のそれと違いはあるでしょうか。

早川 国立大学は、安いお金で学生に教育を「してあげている」という意識が強くあって、無事に卒業「させてあげて」、その人達が活躍すればいい、という程度だったのだと思うのです。

鷺山 そうですね。これから大学は卒業生に対してもっと役に立つものでなければならない。「生涯に渡ってその力量形成を支える学習と研究の機関」になっていけたらと強く思っています。同窓会の役割が決定的に重要になってきます。

早川 実は国立大学の法人化の議論が出始めた頃から、私立大学が相当な危機感を持って引き締まった、とても経営的になったのです。たとえばいくつかの大学が金融機関、もしくは金融機関のシンクタンクと手を組んでこの大学の強みは何だろうかということを検証し始めました。その金融機関を通して外部資金をうまく呼びこむにはどうしたらよいか、あるいは大学が持っている知的財産をどう有効に活用したらよいか、というようなことも含めてのことです。たとえば卒業生に社長さんが一番多い大学があります。その社長さん方が自分たちのネットワークだけで母校の大学ブランドの特許を自由に使えるようにする。そこがネットワークにぶらさがる一番のメリットになるわけです。そうするとしっかりと大学に協力するし、大学からも有益なものを得ようとするわけです。

荒尾 企業関係の卒業生が多い学校は同窓会を持つ利点が見えやすいように思えますが、東京学芸大学のような教育学部の大学では、分かりにくいと思うのですが。



早川 東京学芸大学の場合の強みというのは、教育界にたくさん人を送り出しているということですよ。そこに蓄積されたものは大きい。実は日本の先生は、ものすごくレベルが高い存在なのです。途上国などにいってみるとよくわかるのですが、

高いレベルのスキルを持った先生はほとんどいない。学校教育にあまりお金をまわせないという事情もあります。しかし日本は違います。明治以来積み上げてきたものがあるわけです。これは海外に輸出できる一大産業になる可能性だってある。人を育てる営みとか、あるいは研修とか、そうした広い意味での教育にはいろんな可能性があるという気がしています。

鷺山 本学のミッションステートメントは「有為の教育者」です。教育者の意味を広く考えることは大切です。学校教員の養成はもちろん大きな第一の柱です。それに加えて生涯学習社会に対応して美術館や博物館などの学芸員、各種芸術スポーツ施設のリーダー、公共団体の文化的アドミニストレーターなどの人材の養成が二番目の柱といえますし、三番目の柱として、国際化の進む高度情報産業社会において専門的能力に優れると同時に、教育の観点を持つ人材の養成です。

教員養成大学といっても半数近くの方たちは、教職以外のあらゆる分野で活躍しています。そういう方でも教育学部で学んだことの意味は大きいと思います。教育の観点が自然とにじみ出てくる。人間を生成と発展から見る眼差しですね。「戦争と革命の世紀」の20世紀に対して、21世紀は「教育と文化の世紀」にしようということだったので、9・11以来、世界は混迷を深めています。しかし最終的に物事を解決するのは教育の力です。教育の持つ多様な在り方と力をもっと研究し追求する必要があります。

早川 「携帯空間」という言葉があります。携帯電話と同じように移動することができるという車のテレビコマーシャルです。コンビニなんかもまったくそうです、そこにいけば何でもあるので、人と接しなくても「携帯空間」の中で生きられる社会になってきている。家族も孤立しているし、学校も孤立した存在になっているのですよ。人と人とが協力し合って社会を構成していくというシステムではなくなってきている時代です。だとすると、人と人とが力をあわせて社会を築きあげていくという原点に立ち返ったところを意識的にやっていかないと環境は変わってこないだろうという気がします。

鷺山 今日の社会の論理では、ほっておくとどんどん人

間の紐帯はなくなり、アトム化しますね。「市民社会の人間は自由である。しかし個人として孤独である」と言ったのはマルクスでうまい表現だと思いますが、だから個人で解決できないから社会性をそして共同性をとった訳で、どのように人々の結びつきを作っていくかは、人間回復の大きな課題ですね。その際に具体的課題と結びついた形でないと。

早川 やれることは結構あるのではないですか。私は注目していることがあります。NPO的な教育、地域社会の教育です。10年前の阪神大震災の時の学生たちのことです。震災で大人たち協力し合って復興に一生懸命になったわけです。しかし、その時におきざりにされたのは子どもだった。周りが全部被災地になっている中で子どもたちの遊び場がなかった。そのとき学生たちが子どもたちといっしょに遊んであげよう、というような活動をしたのです。このように地域社会が足りない部分であるとか、あるいは学校が足りない部分、あるいは家庭が面倒見きれない部分、つなぎの部分をおおおうとする人たちが出てきている。これは、これからの新しい流れになってくのではないかと思うのです。

鷺山 ご指摘の「外からの補いやつなぎ」の観点はすごく重要で、位相は違いますが大学の授業についても、科目等履修生でいろんな年齢層の参加があると、違う見方がどんどん提起されていいですね。ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』をやったときですが、最近の女子学生は「ヴェルテルはストーカー的で嫌いだ。アルベルトがいい」と言います。既成の価値観をもった男なのですが、それに対して年配の履修生の方から、「なぜあんなつまらない男がいいの」と、ヴェルテルの新しさを自分の時代体験と重ねて話したりして、授業は確実に活性化します。

早川 世の中では価値観が多様だよ、ということが判るだけで随分違うと思います。この前の佐世保の事件もそうでした。審判の決定で、事件を起こした子は「人との



共感性に乏しい」とありましたが、人が考えていることはいろいろあるのに、自分と違う考えを持つことが許せないという感覚を持っているわけです。しかし世の中はいろいろな価値観を持った人が寄り集まって社会を構成しているわけです。小さい時からそういう経験を積み上げることで人は社会化していく訳です。その経験が乏しいと言われると、その部分は教育で補うしかない。教育の問題に帰着します。

鷺山 「携帯空間」というのは新しいノーマンズランド、人間のいない空間ですね。この新しい状況にどう対応するか。いろいろな方策の提示が必要です。

早川 だから、学生が途上国なんかに行って、「携帯空間」ではない農村集落的な社会を経験して来たりして自分たちの価値観を見なおしてみる、そういう一時期があってもいいのかなと思います。

鷺山 大切ですね。私はドイツ語の時間に学生諸君に必ずドイツに行くようにいいました。でも衝撃は東南アジアの方が大きいようですけど。昔の日本の生活そのものですから。東南アジアを旅行してきた学生が言っていました。本当に貧しくて明日の飯にも困るような人が、遠来のお客さんだということで食べ物や飲み物を少しずつ持ち寄ってもてなしてくれた。あの感激は忘れられない。だからこれからは福祉の仕事やって人の役に立ちたいと。旅行すると旅先の国のよさも判る、日本のよさも悪さもわかる。国を愛するということがそういう相対化の中で理解しあうことが重要です。

荒尾 外国へ行くことについては、さまざまな議論があると思うのですが、出ないよりは出た方がよいのでしょうかね。

早川 ぼくは観光でもいいと思いますよ。それはそれで何がしか感じるわけですよ。感じたことから始まるわけで、そこは入り口なわけです。自分たちの足元についてもっと知りたくなるわけです。ひとつの総合学習ですよ。

鷺山 そうなんです。生活で感じたことを出発点にし、だんだんとこれを抽象化して行って、最後に知識として蓄えていく。それが知恵にもなる。それが昔の日本の生活にはありました。この間、附属小学校で授業をしたのですが、「働くことは知恵を生みます。だから家の仕事を沢山手伝いなさい」

と言いましたら、「やることがない」と言われました。今はまず先生が知識として教える。だから記号を覚えるように暗記する。これでは勉強からの逃避がおきますよ。しかしそうではなくて、児童生徒が具体的に対象に働きかけ、感じたものの因果関係を考えていくということが大事で、その意味で「総合的学習の時間」の方向性は大切ですね。

荒尾 ここで「辟雍」という言葉から受けた印象をお伺いしたのですが。

早川 「明るくむつむ」ということですよ。さっきのネットワークの話になりますが、教育は人なりとよくいわれるけれど、やはり人と人との結びつきが大事です。「辟雍」にこめられた思いというのは、理解できる気がします。

荒尾 同窓会というと、お金集めとか、飲み会とか、そういう印象だけが強いのですが、何かそれも変わりつつあるのではないかな、あるいは変えていかなければならないのかなという気がしているのです。同窓会の考え方、日本人の同窓会に対するイメージを変えたいという思いがあります。

早川 同窓生からすると50周年だからお金を出してくださいとか、大学がいまこうだから協力してくださいとか、大学にとって都合の良い時だけに案内が来るわけです。だけど同窓会から得られるものは何ですかという、そこは相当意識的にやらないといけないうらなと思うのです。

鷺山 たとえば東南アジアの国で先生を求めている。そんな時、辟雍会でお世話をして、1年、2年の派遣をする。教員経験者のシニアがこういう要請に応えられるシステムがあるといいですね。理科教育の下條先生はインドネシアの理科教育向上のプログラムに取り組んでおられますが、これからはそうした要請に応えられる、いろいろな形態のものがなければいけないと思います。本学は教員経験者だけでなく、いろいろな職種の経験者の宝庫なので、新しい生き方をこのようにいろいろな構想できるといいですね。

早川 それについては2つやりようがあると思います。ひとつは海外における先生の先生です。先生の指導者という役割です。そのスキルを持った先生がこれから先生としてスキルを身につけなくてはいけない人たちに指導する。もうひとつは実験名人の先生がリタイアして、シニアになって生きがい

を求めている。そういう人たちは、喜んでくれる人がいると聞けば、喜んで行くと思います。そういう人たちのシステムを作ることです。

鷺山 大学ではやりきれないですよ。いろいろなノウハウやパワーを持った方たちがたくさん入会していてすごいのが辟雍会ですから、知恵を出し合いたいですね。学芸大学出版会と提携していろいろな職業経験、人生経験を本にして頂くとか、現在教育現場で起きていることとそれに対応する最先端の考え方や方法を大学の教員と協力して本にするとか。そうすると組織が生きていきますよね。大学に利用されるというのではなくて、自分たちの生きた軌跡、自分たちの物語を皆に聞いてもらい、読んでもらって経験の蓄積を共有することは大切です。

早川 ハーバードビジネススクールの同窓生の話聞いたことがあるのですが、ここは世界各国から人が集まってくるわけです。将来それぞれの地域で活躍する人たちです。この人たちが大学院を修了すると生涯メールアドレスをもらえるのです。名誉としてもらえるのですが、いかにメリットがあるか。アメリカは転職社会ですが、生涯どこに転職しようが同窓生のネットワークで必要な情報交換がいつでもできる。これはとってとても大事なことだと思うのです。もう一つすごいと思ったのは、修了生のいる国に大学がどんどん出かけて行く。同窓会組織として学長以下全部の役員が出向いて行く。たとえば中国・北京で同窓会をやりますというアジアに散らばっている同窓生が集まってくるのです。学長以下勢ぞろいしていますから、そこでまたお互いのビジネスの話がなされる。誰か面白い人にあえるのではないか、という期待もあるわけです。ホームカミングの逆バージョンですよ。

鷺山 セッティングの仕方がうまいですね。「出会い・ふれあい・ホットなニュース」というでしょう。それなんですよ。出会って、ふれあって、そこでいろんな情報を交換出来て、ああそうかという考えるヒントをいただけるわけでしょう。

早川 辟雍会なら各地に支部が立ち上がっていけば、今度は東北地方でやります。そこに近在の人たちが皆集まってきて、そこでいま教育行政の世界ではこんな動きがありますというような最新情報を持

参して情報交換をする。それをまた大学にフィードバックする。そうしたことも大事なことはないのかな。

荒尾 それは大学と同窓会がうまくタイアップしないと出来ないことですね。

早川 寄付をつのる大学の側だけがおいしいめを見るのではなくて、両方が得するという、パートナーシップ的な関係と同窓生と大学との間につくるといふことも必要じゃないかなと思うのですけど。

荒尾 今までになかったような同窓会として、今までなかったようなことを社会に提案してみたいという野心もあるのです。たとえば日本ユニセフ協会との連携などです。同協会は1万8千校位の小中学校と連携しているのだそうです。連携している学校では父兄や子どもたちがいろいろ工夫して途上国に古着を送ったりする。大学だって何かできる、と思います。世界には学校に行けない子供が1億数千万人もいて、10億人ほどの人が字を読むことができないでいるんですからね。

早川 減ってないですよ。世界の人口が増えていることもあって学校教育に辿りつけな子どもたちがたくさんいる。これは大変な課題なのです。国際機関と連携しながらサポートしていくというのは、教育と関わりのある東京学芸大学としてはできうることでないですか。フィリピンの教育関係者と話したとき、彼らが日本に期待することの一つは教員の教員、先生の研修ということへの期待でした。もう一つは教材開発です。日本から立派な顕微鏡をいただくけれど、ほしいのはそんな立派な顕微鏡ではなくて、ごく日常的に使う教材がほしいといっておられた。しかし、いざ名乗りをあげるとなるとなかなか難しいのですね。

鷺山 求められてもそれを媒介していく力が極めて弱いですね。辟雍会はその辺のところをうまく目配りしていけると交流と貢献の内実がステップアップします。コーディネートしていく力、ふれあいの場をつくっていくセンスですね。人生の本質は出会いでしょう。人と人の関わり合いをどうやって行くかということだと思いますね。それは教育の場でも社会のあらゆる局面で必要とされていることで、21世紀の思想というのは「共同の作法をどのように国際的、国内的にやって行くか」ということだと思います。それには同窓会のような、

まさに共同を本質とするところがかねめになります。

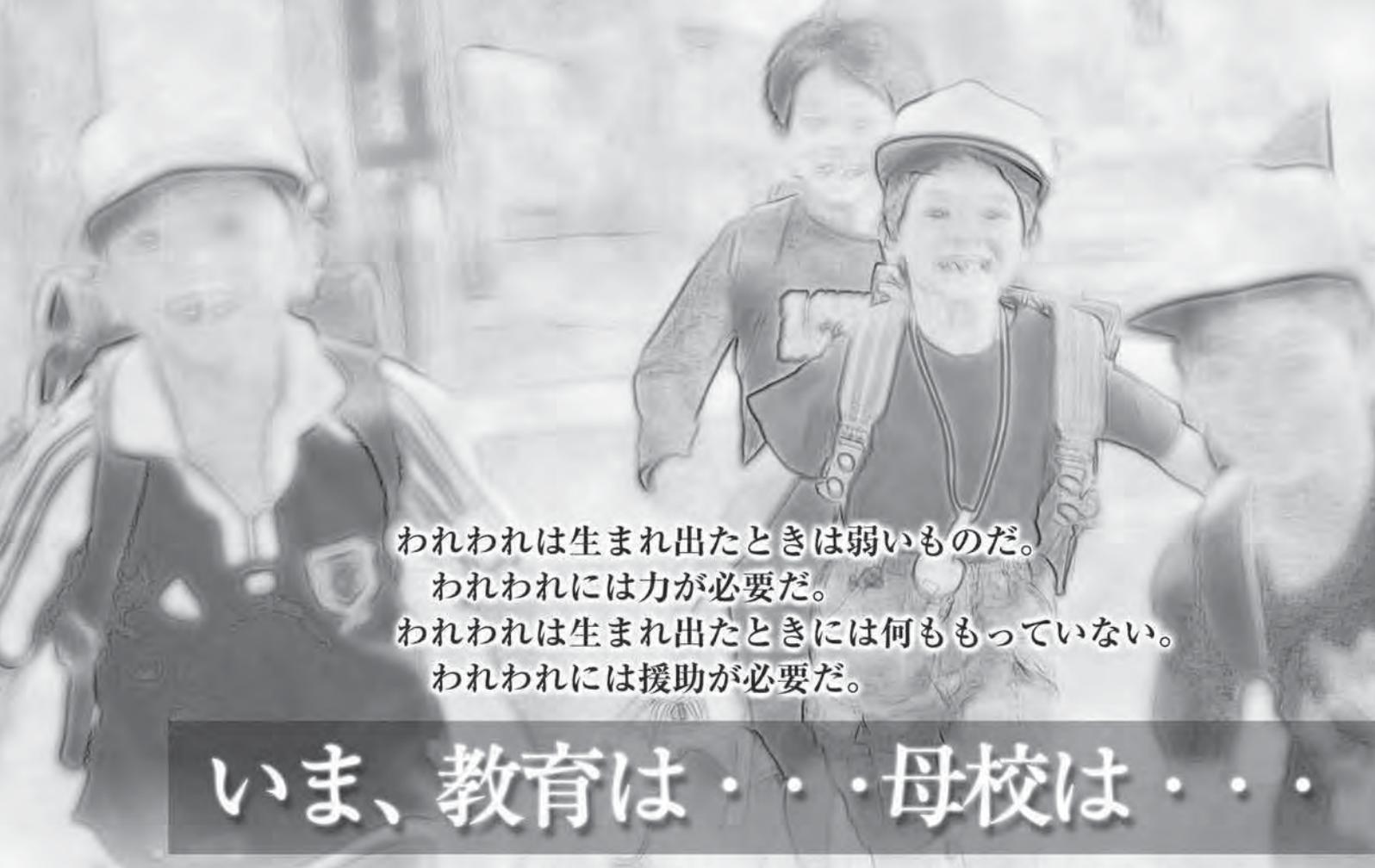
荒尾 仲間ができて個がやっと連携したのに卒業とともにまたバラバラに帰って、個に帰ったまま何時の間にか孤独に陥っちゃう、という場合がありますね。ただ個に帰った人間が再びまた連携しあうことで、別の力、学生時代とは違った別の面が発揮できるかもしれない。その可能性が素晴らしいのではないのでしょうか。

早川 同窓会という組織では、社会的に中枢を占める世代があって、その世代の人が役員を全部を占めてしまうことが多いのですが、同窓生は世代ごとにいろんなつながりや悩みを有しているわけですよ。その悩みを聞いてもらいたいとか、あるいは自分たちの世代としてこんなことをいいたいという欲求もある。だとすると役員もある世代が全てを占めるのではなくて、若い世代も発言できる機会を作ってあげる、いろんな意見が出てくるような組織になっていくと活性化する気がします。

鷺山 同窓会は、それぞれの人生を大事にして、思いやあって、そしてお互いの思い出や友情をもう一段高い次元で共有できる形になると素晴らしいと思います。辟雍会はそう実感させる組織になっていたきたいと思います。

荒尾 本日は有益なお話をいただきました。多くの卒業生がこの辟雍会に集い、力強いネットワークができればうれしいことです。どうもありがとうございました。





われわれは生まれ出たときは弱いものだ。
われわれには力が必要だ。
われわれは生まれ出たときには何ももっていない。
われわれには援助が必要だ。

いま、教育は・・・母校は・・・

われわれは生まれ出たときには何もわからない。
われわれには判断が必要だ。
われわれが生まれ出たときにはもっていない、
しかも大きくなってから必要とするものは、
すべて教育によって与えられる。

(ジャン=ジャック・ルソー「エミール」から。
戸部松実訳「世界の名著」=中央公論社)



同窓会は、後輩たちのために存在する

～「社団法人・東京学芸大学同窓会」副理事長・吉野尚也氏に聞く～



「社団法人・東京学芸大学同窓会」という組織があります。「辞雅会」とは別の組織です。それどころか生まれた後の辞雅会とは違って、設立は1953（昭和28）年。半世紀を超える歴史を刻んでいます。いえ、さかのぼればそのルーツは1886（明治19）年に始まるというのだから、日本の近代教育の歴史そのものです。

この「社団法人・東京学芸大学同窓会」とはどのような組織なのか、同会の副理事長で辞雅会副会長でもある吉野尚也氏に聞いてみました。インタビューの前に同氏の筆による「東京学芸大学同窓会の沿革」を紹介します。

明治19年、「東京七杉会」の発足

わが母校は、明治6年（1873）4月、小学校教則講習所の創設に始まり、明治9年東京府師範学校、明治19年東京府尋常師範学校、明治30年東京府師範学校～昭和24年（1949）東京学芸大学へと変遷する。

一方、同窓会は、明治19年（1886）、東京府教則講習所卒業生有志10数名によって「東京七杉（ななすぎ）会」が結成されたことに始まる。「七杉」とはわが身（三）と世（四）のために、杉の樹の如くすくすくと伸びようとの願いを込めた命名という。会の趣旨を「毎回教育上ニ裨益アル討議・演説又ハ談話ヲナスモノトス」と定め、教育に関する相互研究を主軸として展開することを活動の中心にすえている。

明治23年、「東京府師範学校同窓会」と改名

明治23年（1890）年、七杉会を「東京府師範学校同窓会」と会名を変更する。

それより4年前の明治19年、時の文部大臣・森有礼は諸学校令の一つとして「師範学校令」を制定し、公立師範学校を「尋常師範学校」と改めている。そして明治22年に東京師範学校が小石川区竹早町に新築された。

明治33年女子部分離により「東京師範学校」と「東京府女子師範学校」がそれぞれ同窓会を持つ。

明治33年（1900）年、東京府師範学校は赤坂区青山北町に移転、その跡地にはこの年創設された東京女子師範が開校し、それぞれの同窓会を持つこととなった。

明治41年（1908）、東京府豊島師範学校の創設に伴い、東京師範学校同窓会は「東京府青山師範学校同窓会」と改名された。この年、月刊「初等教育」誌が発行されるなど教育研究活動を介して会員の啓発、親睦を図ろうとする伝統が着実に築かれていった。

明治45年「東京府立師範学校同窓会」と改名

明治45年（1912）、東京府豊島師範学校卒業を迎え、「東京府立師範学校同窓会」と加盟される。

大正9年7月24日、社団法人として文部省から認可され、会名を「社団法人東京府立師範学校同窓会」とする

定款第4条では「本会は、わが国の教育の発展特に東京都教育の振興を図り、併せて会員をはじめとする学校教育教員の資質を高めることを目的とする」と定め、公

益的な事業として「夏休み帖」や「白地図」の作成販売を全国的に展開したとのことである。

その後、昭和13年東京府大泉師範の創立、昭和18年東京第一（青山）、第二（豊島）、第三（大泉）師範学校、そして、昭和19年東京府立青年学校教員養成所から青年師範学校となり、それぞれの同窓会ができるが、いずれも合流する。

昭和28年（1953）年3月、東京学芸大学第1回卒業生を迎えるにあたり、定款変更を申請、同年6月30日文部大臣より再認可となり、会名を「社団法人東京学芸大学同窓会」と改める。

戦後の学制改革により、東京の3師範、青年師範が統合して、昭和24年に東京学芸大学が発足。昭和28年に第1回卒業生を輩出したのを機に「東京学芸大学同窓会」と改め、社団法人として再認可され、今日に至る。



—— 吉野さんが書かれた「沿革」を拝見すると「社団法人同窓会」はすばらしい歴史と伝統を持っておられます。現在、どれぐらいの会員がおられるのですか。

吉野：機関誌「學藝」の発行部数が1万部です。資格会員は2万人いると思います。

—— 東京都の教員だけが会員なのですよ。東京学芸大学の卒業生、同窓生はざっと6万人といわれますからその3分の1に相当する人たちが会員の巨大組織なわけですね。ところが東京都の教員以外にはその実態はほとんど知られていないと思いますが。

吉野：その通りです。沿革でも書いたのですが、設立の経緯が東京の師範学校の卒業生を対象にしたものということで、それ以外の分野に進まれた同窓生には門戸が閉じられてきたのです。ですから教員以外の職業につかれた方、東京都以外の道府県で教員になられた方には、その存在もよく知られていないと思います。

—— それを全国規模、教員以外の分野の人たちにも広げるといえることはできないのですか。

吉野：定款上はそういうことになります。戦後、大学同窓会として再認可されたときにそのように組織変更しておけばよかったのではないかと個人的には思うのですが、なかなか難しいものがあります。

—— それが「辟雍会」設立の背景でもあり、存在理由にもなるのですね。



キャンパスでもっとも広い「サンシャイン」

吉野：そういうことです。

—— われわれの母校は師範学校を母体として生まれたわけですし、その設立目的は「教員養成」が大きな柱でありました。そのことを抜きにしては母校を語ることはできないし、また教育を常に重大なテーマとして捕らえなければならないと思います。そこでご自身も長く教育の現場に立ち続けられ、今も大学で教えておられる。そのお立場から、母校の役割と教育の現状、今後についてのご意見を伺いたいと思います。

まず、教育界において、東京学芸大学はどんな位置を占めているのでしょうか。

吉野：これはもう大変に大きな存在だと思います。東京都に限らず、日本全国の教育現場に同窓生はたくさんいて、しかも教育の重要な役割を果たしています。小・中学校の全国校長会などのリーダーもずっと東京学芸大学の卒業生が占めてきました。日本の教育は東京学芸大学を抜きにしては考えられないと思います。

—— その役割に変化はないのでしょうか。

吉野：もちろん長い間ですから様々な変化がありました。私は中学校の体育教師を振り出しに、高校の校長も通算9年やりましたし、行政に関わったこともあります。そのように教育現場を一貫して見てきましたが、一時、学芸大学出身の新採教員が激減したことがあります。採用試験に合格しないのです。そんな時、母校は一体何をしているのか、とやきもきしたこともありました。しかし、最近はまだ大変に良くなってきた。優秀な学生がわれわれの仲間に加わってきてくれています。

—— そんな中で「同窓会」の役割は何なのでしょう。

吉野：これははっきりしています。今、東京学芸大学に学んでいる学生たちの応援団です。常に現役の学生のために……という視点を大事にしていかなければいけないと思います。

私は高校の校長をしているときも「PTAと同窓会

は生徒の応援団」と常に言ってきました。つまり同窓会などの組織は「生徒のために何をするか」を最優先に考えるべきなのです。卒業生の親睦、交流というのもいいでしょう。「母校のために」というのもきれいな言葉です。しかし「母校」とは具体的に何ですか。建物やキャンパスのことではないでしょう。今現在、そこで学んでいる後輩たちのことではないですか。その後輩たちのことを第一義に考えなくてはダメです。

—— そういわれると、現在母校がどうなっているのか、後輩たちはどうしているかなど、まったくといっていいほど関心を持ってきませんでした。どうなっているのでしょうか。現在の東京学芸大学の後輩たちは。

吉野：数年前に小金井祭に招かれたことがあるのです。小金井祭実行委員会から「君たちはこのままで教師になれるのか」というテーマで話していただけないか、という招聘があったのです。なかなか激しいタイトルですが、後輩たちはそれだけ真剣に考えているのだと思い、招きに応じることにしました。このときの小金井祭実行委員会の学生は見事でした。私への遇し方が立派なのです。礼儀作法もしっかりしている。それで鄭重に会場に案内され、時間が来たら、会場のドアを全部閉め始めたのです。外にはまだ入場しきれない学生がたくさんいます。でも時間だからと、その学生たちを入れなかったのですね。「少々開始時間が遅れても私は構わない。聞きたい人は入れてあげなさい」というと「それではお許しをいただいて」ともう一度ドアを開いて学生を入れました。私の話を聞く学生たちの態度も立派でした。誰も真剣なまなざしで、ノートを取るものもたくさんいます。実行委員会の学生の態度も立派だったし、私の話を聞く学生の姿勢もすばらしかった。私は感動しました。わが後輩たちはすばらしい、とね……。このような学生たちが「このままで教師になれるか」

と真剣に考え、教育の世界に入ってきてくれるのなら、将来は安心だ、と思ったものです。

—— うわあー、それは頼もしいですね。そういう後輩をいずれ同窓会に迎えるわけですね。

吉野：私が肝に銘じている言葉があります。学生時代、教育哲学の神蔵先生という方が教えてくれた言葉なのですが「教育とは、次代に生きる人間を教え、育てることによって次代を創造する、人間としての基本的な営みである」。その通りだと思います。教育は次の世代のためにあるのです。私は「社団法人同窓会」の活動もそのためにあると信じてやっています。直接現役の学生と接することは多くありませんが、教員の世界に入ってきた人たちにも、単なる親睦組織ではなくて、次の世代を育てるためのお手伝い、と言う観念でやっています。管理職試験をうけるための講習会などはその一つです。

—— 辟雍会は教員以外の卒業生、大学職員、それに現役の学生も含めた新しい形の組織です。この組織をどう育てていったらいいのでしょうか。

吉野：大変な可能性を持った組織だと思います。今や学芸大学は教員養成だけを目的とした大学ではない。教員以外の世界でたくさんの卒業生が活躍している。そのエネルギーをうまく組織して、後輩たちのために役立てるというのは、大きな意味での「教育」です。まさに「次代を育てる」という意味だね。これからの大きな成長を期待するし、そうした組織にしていかななくてはいけないと思います。 （インタビュー・遠藤 満雄）

■ 吉野 尚也 氏プロフィール

1962（昭和37）年保健体育科卒 東京都内の中学校、高校で保健体育の教師をしたあと、東京都世田谷区教育委員会指導主事、都立教育研究所指導主事、品川区教育委員会指導室長として指導・人事行政を担当。1991（平成3）年から都立大森東高校校長、1995（平成7）年から都立大泉高校校長。2000（平成12）年退職。この間、文部省「大学入試選抜方法の改善に関する会議」協力者、大学入試センター評価委員、文部省「大学審議会」専門委員などを歴任。現在、東京女子体育大学、東京女子体育短期大学教授。高校校長時代の講話などを中心にまとめた著書「君は世界に一人一校長として語ったこと、書いたこと」（学事出版）がある。



南講義棟（S棟）



「学芸」最新号表紙

社団法人・東京学芸大学同窓会は「学芸」という機関誌を年に3回ほど発行しています。2004年7月に発行されたもので通巻93号を数えます。教員になった同窓生が教育の現場でどんな活躍をしているか、何に悩み、格闘しているのかが、つぶさに伝わってきます。現在の日本の教育の現状が把握できるし、問題の所在も明らかになります。しかし、東京都の教員以外にはほとんど目に触れることはありません。そこで、全国同窓会「辟雍会」のために、特別のお許しをいただいて、その一部を引用させていただくことにしました。以下に掲げるのは、2003年12月に発行された第91号に「支部だより」と題して掲載されたものです。教育の現場を垣間見ながら、同窓生の活躍ぶりを見るよすがとしていただきたいと思います。

「常に学ぶ姿勢で」

1 港・麻布小 長谷 徹

港区には、幼稚園15園、小学校20校、中学校10校があります。幼児・児童・生徒数の減少が、あるときは統廃合、あるときは廃園、廃校といったように、様々な形をとって学校に課題となって押し寄せて来ます。都心部の学校・園の共通の課題であるとの認識に立ちつつも、自らの眼前に事実が迫ってくると胸が締め付けられる思いになります。

ここ3年間を見ても、幼稚園の廃園が5園、小学校2校が統廃合により1校になり、中学校も小学校同様に2校が1校になりました。小規模化した学校・園が辿る道とは理解しても、なかなか心が落ち着く状況ではありません。今年度も小学校1校が対象になっています。

そんな状況の中ではありますが、学大同窓会の面々は、こうした課題に真摯に対応しつつも、どんな状況であれ校長も含めて「教育の資質の向上」は一番の課題として研修活動に意欲的に取り組んでいます。学大同窓会以外の組織と連携した研修会も年に一度は必ず実施し、互いに切磋琢磨する姿勢で臨んでいます。5月の総会には、毎年OBの先生方も多数参加され、私たちに檄を飛ばされています。今後も課題に正対しながら、さらに資質の向上に努めていきたいと考えております。

「新宿支部の活動」

1 新宿・落合第5小 石原 稔

本区の会員数は、幼・小・中・養護・区教委を合わせて187名で、ここ数年間大きな変動はない。

各会員とも激動する教育界の中で、それぞれの能力・持ち味を十分に発揮し、校内では勿論、区の教育研究会などで活躍している。

年間を通して、会員に呼びかけて実施している定例会・研修会等は、例年、以下のようになっている。

- 5月上旬
定期総会・懇親会
- 6月～7月
教育課題等に関する講演会
管理職試験受験者対象研究会 I
- 9月～10月
管理職試験受験者対象研究会 II
- 1月

新年研修会・懇親会

この会には、多くの顧問（退職校長）も出席されている。また、2月には、管理職研修旅行が別途計画実施されている。時代の変化とともに、各会への参加者数は、わずかながらも年々減少しつつある。しかし年に数回の同窓生としての集まりである。今後とも大切にし、継続していきたい。

「研修と親睦を深める江東支部」

江東・第3砂町小 大塚 恭一

江東区には、小学校が43校、中学校が22校、幼稚園が20園あります。児童生徒数の減少による統廃合が進んでまいりましたが、現在のところ適正配置は一段落といったところです。また臨海都市部ではマンション急増により、新たに平成19年度新設小学校が誕生する予定です。

支部は、庶務部、研修部、厚生部、会計部で組織し、それぞれ仕事を分担しながら年間を通して積極的に進んでおります。

5月に支部総会・歓送迎会を開催し、OBの方々の多数の参加のもと、腕を組んでの「若草もゆる」の大合唱で一段と結束を固めています。

6月には講演会を実施し、今年度は副理事長の富田澄江先生に「これからの学校教育のあり方」の演題で貴重なお話を伺いました。

また、管理職養成のための研修会も実施していますが、参加者が少なくなりつつある点が悩みとなっています。

恒例となった1月のボーリング大会では、OB会員や若い教員が参加し、親睦を深めるとてもよい機会となっています。今後も多くの会員に呼びかけて、研修と親睦を中心に魅力ある活動を工夫しながら、支部の活性化を図っていきたくと考えています。

「やる気溢れる同窓の士へ」

品川・宮前小 春日井 八千代

品川区には、幼稚園8園、小学校40校、中学校18校があります。会員数は224名。庶務部、研修部、会計部、青年部があり、それぞれの組織が、年間計画に基づいて活動しています。

5月半ばに行われた支部総会後の懇親会には、本部より吉野尚也副理事長を、品川区教育委員会からは、若槻秀夫教育長と中島豊指導課長をお招きし、先輩や現会員と共に和やかな雰囲気の中で、楽しいひと時を過ごすことができました。

ところで、品川区は、現在「品川の教育改革プラン21」を策定し、4年目を迎えております。学校選択制をはじめとし、外部評価者制度や独自の学力定着調査など、様々な試みに挑戦しながら、特色ある学校作りに励んでいるところです。改革は、痛みも伴いますが、やりがいもあり、充実感もあります。

しかしながら、毎年異動の時期を迎えますと、皮肉にも「品流し」なる言葉がささやかれ、大変さを回避する傾向もあるやに聞いております。少々残念でもあります。

どうか、やる気のある同窓の仲間たちよ、品川に参集されたい。厳しさの中にも、温かさや楽しさに溢れた品川区で、更なる教育改革を推進して行こうではありませんか。

「魅力ある活動をめざして」

世田谷・八幡小 和田 浄美

世田谷支部で力を入れていた活動の一つが管理職選考の研修会でした。しかし、「もう、どこの学校を卒業したか?の時代ではない」という考えの方々が全体的に増えてきて「学芸大学」単独の研修会が姿を消し、校長会顧問会主催の研修会一本に絞られて2年目を迎えました。この考えが定着するに伴い、「学芸大学世田谷支部総会・懇親会」に管理職以外の会員の参加者が年々少なくなってきて淋しい気がしています。が、こんな時だからこそ更に、支部会員の力を結集して「東京の教育は学芸大学から」の気概で創意工夫、魅力ある活動をめざしていきたいと思っています。

世田谷支部の年間活動は各部を中心に「名簿作り」「支部総会・懇親会」「ボーリング大会」「新年会」「支部広報発行」「激励会・報告会」「支部校長会」を行っています。どの活動も「例年通り」ではなく、創意工夫、改善を目指しています。特に、本年度「激励会・報告会」は会員全体の資質向上のための会にしようとして、2つとも講演会にしました。

“今日の教育課題について”、「報告会」では研修部長の堀木邦男先生に“教育の動向について”2時間ご講演頂き、会員の力量アップにつながったと思っています。

「教育の実践を進める杉並支部」

■ 杉並・杉並第6小 大高 富太郎

杉並区には、幼稚園6園、小学校44校、中学校23校、養護学校1校と健康学園があります。杉並区も都心部の学校の共通の悩みである少子化による単学級学校が出てきました。統廃合の話は出ていませんが、「学校適正規模検討委員会」が発足されていて、先日中間報告が出たところです。

会員は好調が小学校で25人と多くいます。中学校では4名で、幼・小・中の会員数は、合わせて324人います。

支部の活動は、安藤理事長にご出席頂いた支部総会をはじめ、講演会を2回、支部便りを年度内3号発行、ポウリング大会と箱根研修親睦旅行等を計画・実行しています。特に研修旅行では、新規採用の教員やOB会員を含めて、56名と多くの参加者があり、楽しさの中に親睦や研修が深められました。

昨年度まで2年間理事長をなされた佐藤倫則先生には、支部を支えて頂きました。紙面をお借りしてお礼申し上げますとともに、これからもご指導をいただきたいと思っております。

新規採用の教員は近年多いのですが、同窓生が少ないのが現状です。新規採用の教員をはじめ、支部の研修会や活動を通して、教育の実践を進めていきたいと考えております。

「磨き磨かれ、頼り頼られる支部を」

■ 荒川・尾久西小 川上 昇一

荒川区には、小学校23校、中学校10校、幼稚園8園あります。会員数は、104名です。

支部活動は、支部総会・歓送迎会から始まります。役員、庶務部が中心となってその準備をし、教育長及び指導室長と同窓会本部役員並びに支部顧問をお招きして開催します。庶務部は、この他に名簿の作成が大仕事になります。研修部は、本部研修の案内や研究冊子の紹介を中心に活動しています。この他に渉外・福利厚生部、会計部があり、支部活動を支えています。支部活動の悩みはご多分に漏れず、若い人の活動参加をどのように活性化するかにあります。

さて、荒川区は、学校選択の自由化が実施されています。また、個性ある教育の推進に努め各校の企画書に沿って予算が加配されます。基礎となる学力をしっかりと身につけさせるよう習熟度別学習を小中学校全校で実施しています。学力向上のための調査を実施し、教育課程の改善や指導法の改善、

児童の自己診断に活用しています。平成16年度からは英語を小学校の教科として実施します。

先進的な教育施策を行っている荒川区にあって、東京学芸大学同窓会荒川支部は、温かみが溢れると共に、教育専門家の集う会として磨き磨かれ、頼り頼られる、支部でありたいと思っています。

「板橋区の教育の振興を図る」

■ 板橋・高島第7小 駒村 紘三

板橋区には、幼稚園2園、小学校56校、中学校24校があり、約260名の会員が所属しています。少子化による学級数減により年々会員数が減少しているのが残念です。

今年度の支部の活動は、4月15日佐藤倫則理事長のご臨席を賜り開催された支部総会よりスタートしました。庶務、会計、厚生連絡、調査、研修の5部が組織されています。

主な活動内容は、庶務部が「支部だより」を年2回発行しています。厚生連絡部は、総会後の懇親会をはじめ新年祝賀会、勇退会員を囲む会の計画・準備・進行にあたります。調査部は、支部会員の名簿の作成作業を進めています。研修部は、支部研修会の企画・進行を担当しています。6月12日に本区に着任された同窓の松本武志指導室長先生に「教育管理職に期待すること」の演題でご講演いただきました。いずれの研修会も一水会と合同の事業といたしました。さらに管理職選考に向けての特別研修も、論文指導を4月から、面接指導を9月から計画、実施しています。

先輩方の築き上げた板橋区の教育を振興させるため、会員相互の研修と親睦を一層図ってまいります。

「同窓の絆を大切に」

■ 足立・大谷田小 川和 誠一

「教育立区」を掲げる足立区は、今急速に教育改革が進んでいます。「開かれた学校づくり協議会」「学校選択の自由化」が実施され、16年度より小中学校全校で、2学期制が実施されます。大きな教育改革であり、実施するためにはより綿密な計画が必要となります。各学校の特色をどう出していくか、現在各校でその準備を進めています。

さて足立区には、小学校73校、中学校38校あり、都内最大規模を誇ります。同窓会員は381名（昨年度より12名減）で、日々の教育活動はもちろん、様々な立場、場面で活動しております。

本支部の活動は、5月30日の支部総会・懇親会からスタートしました。当日は、本支部顧問をはじめとして40名ほどが集い、小池前支部長のご勇退を心よりお祝いするとともに、同窓の絆を更に強めることができました。最後に「若草燃ゆる」を全員で歌い、全員が爽快な気持ちの中、閉会しました。

その他の活動として、管理職・幹部対象の研修、スポーツ（ゴルフ等）を通じた親睦の会を持ちます。また、新年会、会報の発行等の活動を通して、会員の交流を深めています。今、会員が減少する中、新しく、若い会員が活動できる事業も模索中です。

「若草燃ゆる」

町田・鶴川第4小 中村 洋子

町田市は今年市制施工45周年を迎え、人口も9月に40万人を突破しました。現在、小学校39校、中学校が20校あります。

3年前までは小学校44校ありましたが、児童数の減少に伴って統廃合が行われ、5校が無くなってしまいました。

支部の活動は、去る5月に本部より安藤駿英先生をお迎えして総会を開催したのが始まりです。研修部、庶務部、会計部等が組織され、同窓会の仕事を分担しています。

主な活動は、研修部が行う管理職養成のための「夏季研修会」や、庶務部が中心になって若い会員にも広く声をかけ、親睦を深め合う「ボーリング大会」、先輩諸氏をお招きして開かれる「新春放談会」などがあります。

昨年のボーリング代会には、フレッシュな新採会員も数名参加し、大変盛況でした。

会員数は小学校226名、中学校50名、合計276名ですが、同窓会の活動に参加する会員が少ないことが悩みのタネです。

しかし、同窓会に出席するとホッとするという会員も多く、毎回、校歌「若草燃ゆる」を超え高らかに全員で歌って散会しています。

今後多くの方の力を結集して、研修と親睦を中心に様々な事業に取り組んでいきたいと考えております。

「新たな一歩を」

東村山・萩山小 石川 要一

東村山市には、小学校15校、中学校7校に加えて、自動自立支援施設内に中学校の分校が一つあります。会員数は110名です。

東村山市は、平成15年度から3年間、文部科学省の「人権教育総合推進地域」指定を受けて、各学校では、これまで進めてきた「いのちの教育推進プラン」の具現化と合わせて、各学校の特色を生かしながら、人権教育の推進に努めています。

同窓会活動としては、春には、支部総会とご勇退された先輩の皆様にご講師をお願いして「受け継ぐものは創るもの」と題した講演会及び懇親会を開催し、冬には、ボーリング大会を実施して親睦を深めてきました。かつては、土曜日の午後、市内外の施設見学会を実施したりもしていましたが、近年では、残念ながら、同窓会活動の活性化が課題となっています。

そこで、本年度は、若手からベテランまで現役で児童・生徒の指導にあたっている同窓会員を主な対象として、教育研修会を行うこととしました。市内中学校に勤務するスクールカウンセラーを講師に、児童・生徒の理解について研修するとともに、小・中学校の絆を越えて、会員相互の親睦をさらに深めるべく、新たな一歩を踏み出すことにしました。

「緑と歴史の国分寺をになって」

国分寺・第二小 萩原 由久

国分寺には、小学校10校、中学校5校あります。会員数は88名です。全教員の約28%を占めていますが、最近では会員数の割合は減少しております。

本市は、東京都の中央部に位置し、人口11万、児童・生徒数は約7千名です。市名のとおり、緑と歴史の町です。明治6年には、第86番小学最勝学舎、翌年には、里仁学舎、断機学舎（一小、二小、三小の母体）が創設されており、昔から、教育に力を入れていたことがうかがえます。

さて、当面の支部の課題は、会員にとって魅力ある活動を持ち上げ、「同窓会」としての組織の活性化を図ることです。

年一回の支部総会は、管理職と主幹の出席が大半なので、若い会員が気軽に参加できる雰囲気になりたいと考えております。

本市の目標である「互いの人格を尊重し、思いやりのある

心豊かな市民」「自ら学び、考え、行動する、個性と相続力豊かな市民」「健康でたくましく、共に生きる市民」の目標の実現を目指し、「緑あふれる武蔵野の天平の史跡国分寺」にふさわしい、子どもたちを、その駆動力となるよう、同窓会員の力を結集していきたいと考えております。

「八丈も元気です」

大賀郷小 図師田 襄

八丈島には、ほとんどの小学校は明治4,5年に創立し、5校とも100年以上経っています。八丈でも都心部の学校と同じように少子化が進んでいます。学校の統廃合には島の人々の学校に対する思いが深く難しいようです。

支部の活動は会員が少ないこともあり、また、本土より離れている島でもあるので、一水会と学大と区別なく研修会等を行っています。島の特性として新規採用者がなく、異動は校目という人の希望者も少ないので高齢化が進んでいます。しかし、管理職は昇任の人が多いため若く、学校の教職員の平均年齢よりも若い管理職が多いです。

島と言うと何となく不便で大変なような感じを受けますが、今は交通も発達し道路も整備され何不自由なく生活できます。そのため一回赴任すると島の素晴らしさを体得し、離れたがらない人が多いです。

普段同窓会や研修会に参加できないので、「獅子」や同窓会便り等を読んで研修を深めています。情けの深い島民、自然一杯の八丈の特性を生かし、今後も島の教育に全力で取り組んでいきたいと思っております。



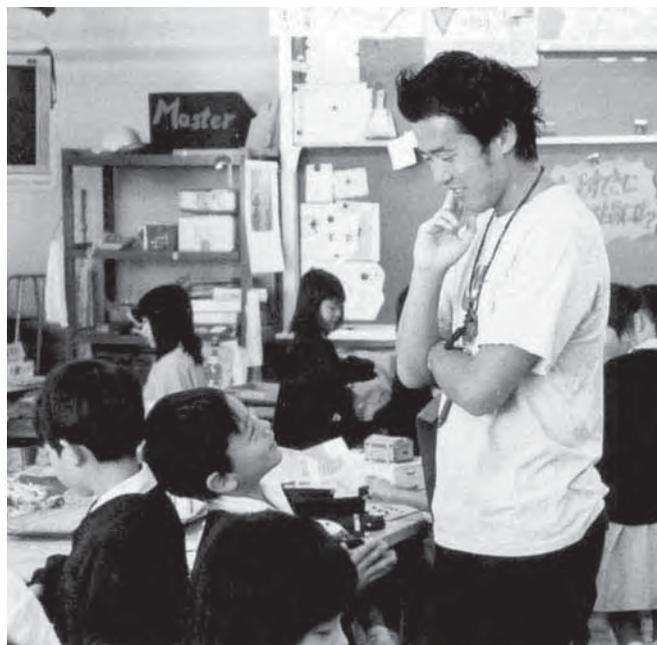
「東京の教育を創造する意気込みで」

教育庁支部 新井 陽子

教育庁支部には、指導部、学務部、人事部などに会員がいます。同じ都庁にいても、顔をあわせることはほとんどありません。ましてや、部が違えば、なおさらです。そこで、会員に、今一番の「旬の仕事」を尋ねてみました。

- ◆ 指導部指導企画課
 - ・ 「性教育の手引き」小・中学校改訂版の作成
- ◆ 指導部義務教育心身障害教育指導課
 - ・ 児童・生徒の学力向上を図るための調査
- ◆ 指導部高等学校教育指導課
 - ・ 生徒による授業評価の施行（平成16年度全校導入）
- ◆ 多摩教育事務所指導課
 - ・ 「学習指導・生活指導の改善・充実を目指した、組織的な教育活動の創造」に向けての準備
- ◆ 都教職員研修センター
 - ・ 「自ら学び続ける教育の養成」という組織目標を踏まえた研修の実施
- ◆ 都教育相談センター
 - ・ 学校の危機管理に関するマニュアルづくり
- ◆ 人事部 ◆ 学務部にも会員がおります。

平成16年度から「東京教師養成塾」が開塾し、対象大学に東京学芸大学の名がありました。なつかしき一杯です。



「館山養護学校に勤めて」

大田区立館山養護学校 教頭 黒田 泰正(昭和54年卒)

千葉県南房総にある大田区立館山養護学校に教頭として赴任し、今年で3年目になります。年間を通して温暖な気候の中で、東京から離れて寄宿舎で生活する子供たちの健康回復を願いながら職務を行う日々です。

今、東京23区のうち8区が房総半島に養護学校や健康学園を設置しています。本校は養護学校の種類では病弱養護学校にあたり、入校を受け入れている児童の病類は、肥満・喘息・偏食・虚弱などです。現在、小学校の3年生から6年生の子どもたち33名が療養を続けながら生活を送っています。

本校の教育活動は、大田区内の各小学校と同じ教科書を使い、教科・道徳・クラブ活動・総合的な学習の時間等と、学習する内容も区内の学校と全く同じです。

区内小学校と違う教育活動に「自立活動」という健康回復のための学習があります。病類別グループごとに学習したり、全員で互いの病類でわかった事を発表しあったり、近くの農道に出て持久走をして体力づくりをしたりすることです。

学校の行事も南房総の自然の中で四季を感じさせるものが多くあります。春の花摘みや田植え体験、夏の海水浴、秋の芋掘りや稲刈り体験、冬のイチゴ狩等、初めて体験することばかりで、毎回児童から感動の歓声があがります。

また、少人数という特性から、異学年での生活行動や少人数指導がたやすくでき、一人ひとりの個性に応じたきめの細かい指導を展開することができます。教職員全員が、一人ひとりの子どもの名前だけでなく、性格や能力を詳しく理解し

ており、いつでも誰でもふれあい相談をすることができるのです。

近隣の小学校や中学校との交流も多く実施しています。互いの学校を訪問してのスポーツ交流や合同の授業、そして5年生だけですが合同の移動教室を行い、教職員の交流も盛んになりました。

寄宿舎では、学習や自治会活動の時間が設定されています。土曜日や日曜日には寄宿舎指導員の指導のもとで地域に出かける機会が多く、館山市の写生会・サッカー大会・マラソン大会に参加をしています。そのときは東京から多くの保護者が一緒に参加したり、応援をしたりするために駆けつけてくれます。

朝は起きるとすぐに乾布摩擦があり、寝る前には、毎日腹式呼吸法を行うなど、強い体作りに取り組んでいます。

近年、区立の養護学校や健康学園が年々減少しています。経費の問題や医療の発達、少子化などの理由から、児童数が減少しているためです。本校も存続の話し合いがもたれるようになりました。

しかし、私は本校のもつ役割は大きいと感じています。肥満や喘息で苦しむ子どもや学級の中でも不安や引け目を感じている子どもが、病類回復により体力的にも精神的にも自信をつけて区内校に戻ることができるのです。さらに、親元を離れる経験も貴重な体験であり、一生の思い出や財産となります。区内の多くの教職員が本校の現境や教育活動を理解し、区内校との連携を図っていく手だてを共に考えて下さることを願ってやみません。



教育を通して世界を見る

井内 幹雄

(1968年数学科卒・
東京都日野市立教育センター)

1. 教職への動機

デモシカ教師という言葉があった。教職に就く動機が教師に「でも」なるうか。しかし、能力から見て教師に「しか」なれない、というところか。給料が安く、子供相手に「楽な仕事」と思われていた。東京学芸大学に通う私は、3年時の付属小学校での実習、4年時の付属中学校での実習、そして、23区内の小学校での地方実習を経ると教師として生きようという気持ちが強くなった。

1968(昭和43)年4月1日、私は大田区立小学校の教員になった。多少の迷い。その主なものは収入である。大学に入る頃、教員の初任給は1万円未満だった。4年後、初任給が30,500円になっていた。しかし、学生時代、アルバイトで50,000円稼げた。教員は安月給で共働きが常識だったが、安定さと夏休みが魅力である。

2. 最初の学校がその後の運命を決める

始業式の日。校長から紹介されて、朝礼台と呼ばれる壇の上に上がる。一斉に寄せられる子供たちの目。横、そして、背後から教職員の目。自分の名前とがんばりませ、と言うだけだった。教室では自分ひとり。何十年かが過ぎて、初めての授業を鮮明に覚えている「教え子」が「あれをする、これをする」と一方的に話したと言う。「で、どうだった？」と、聞くと「あの頃の先生は若々しかった。」などと醒めた一言が返ってきた。

しかし、先輩にも保護者にも、子供たちにも大切にされた。地域全体が若い先生を育てようという温かさがあった。そして、新米先生は何とか仕事が軌道にのった。

3. 教員の腕

先輩と自分には「大きな差がある」と、感じる。隣の学級の先輩が同じ単元の授業を進めているとき、自分が

60分間もかかる指導を10分間で済ませている。おかしい。空いている時間にドアの外で隣の教室をのぞいた。先輩の技を盗むのだ。発言にスキや無駄がない。子供たちとも阿吽の呼吸で学習が進んでいる。こ

の先輩は授業の見学に来た人に気に入られ、息子の嫁に、と懇望されたそうだ。授業がうまいわけだ。

教師を続けたいのなら「腕」を上げなければならない。校内の授業研究だけでは物足りないと感じ、仲間を集めてサークルを作った。個性豊かな仲間が集まる。2~3年たつと、口コミで若い仲間が集まり、研究授業やカリキュラム作りをしようということになる。

授業ばかりが子供との触れ合いではなかった。子供も親も24時間、私が先生であることを求める。

休日の早朝、駅に集まって子供たちと釣りに行く。彼らの方が釣りの腕は遥かに上だ。竿や釣り針、そして、えさの選び方、ノウハウを教わる。

野球をするので、河川敷の野球場の場所取りをする。夕方、子供たちと近くの銭湯にただで入れてもらう。

父が家庭菜園のキュウリを持たせてくれた。うまいぞ



と教室で子供たちに食べさせたが、学校で給食以外にものを食べさせるとは何事か、と給食主任に叱られる。しかし、学級パーティーでケーキやクッキーが出回った。私もおでん、闇なべ、そして、たこ焼きパーティーと発展した。

4. 海外で教員をする

どんな所で「先生」が出来るかを考えた。先生は素晴らしい。子供さえいれば求められる。子供がいなくてころなどない。子供に、人としてこの社会で生きることを教えるのだ。それが、先生自身やがて大人として、自立することになる。だから「子供として充実することから、大人になる」ことの意味を周囲に語った。

島嶼や僻地に赴任するものがいた。そして海外の日本人の子供のための学校に勤めるものがある。

資格が出来ると私は若い仲間とともに、毎年、政府派遣の海外勤務の教員に応募した。志望動機は「海外にある日本人子弟に質の高い教育をする」だけである。

何度目かの応募で、ようやく国に推薦された。受験日は算数の研究授業日と重なった。凄まじい時程をこなして、派遣が決まった。

5. 在外日本人学校 1回目

レセプションで文部省の担当者一人に「あなたは学芸大学卒業でしょう」と言われた。どうして知っているのかと聞くと「あなたが学生だった頃、私は学芸大学に勤務してよく顔を見ましたから…。いろいろなことを相談に来たでしょう。」と言う。大勢の学生の中から覚えていてくれる事務官がいたことは感激であった。

私の赴任先はインドネシアのジャカルタ日本人学校(J.J.S.)である。大きな国がよいという希望が叶った。正直、張り切っていた。同行の妻は、様々な不安を打ち明ける。「大丈夫」と僕。その根拠は大勢の日本人が住んでいるではないか、というものである。4月中旬に10人余りの仲間、家族を入れると50人にもなる大集団が成田を離れた。

ジャカルタ郊外パサール・ミングーの校舎は世界一美

しい。深い緑の中にレンガの茶色、白い校舎。手入れの行き届いた開かれた廊下。熱帯の炎天下、子供たちは元氣そのもの。保護者や学校維持会の人々には「自分たちの学校」という自負がある。さらに、わが子のために来てくれた先生方という気持ちが強い。

子供たちもよく学習する。人の出会いを大切にすることをモットーとする経営方針で、毎年学級編成を変えて担任も変わる。それには始業式の日数十人もの転入生がある事情にもよる。

1年目、私は4年3組の担任となった。子供たちの第一声の一つ。「何や。このおっちゃん。関西弁、しゃべれへん」。神戸からきた彼とは帰国後に何度も飲み交わすこととなる。

困ったのは理科と社会科である。4年の社会科では兵庫県が教材となっている。理科室にあるアルコール・ランプに火を点けると炎が弱々しい。調べてみるとアルコールの濃度が薄いのだ。

現地理解をしようとして子供たちを連れて学校の外を歩くこととする。茶色の大地と現地の人々の暮らしを見聞させるのだ。私たちの集団の前後に警備員をつけなければならぬのは安全への配慮だ。

「先生。インドネシア語で、指輪ってなんていうか知っている？」とY子。

「えっ？知らない」というと、どうも周囲の子供たちの様子がおかしい。知らないことは聞くしかない。インドネシア語のD先生に聞く。「ああ、チンチンですよ。」

その後、2年生、そして、5年生を担当して、帰国することとなった。

J.J.S.の縁は国内でも引き継いだ。そこは私が担任した以外の子供たちも自由に集まる開放的なものであり、中には進学の相談をするものもいた。

阪神・淡路大震災のあの朝、私は神戸、宝塚、そして、大阪にいるJ.J.S.関係の人々に電話をした。そのすべてが通じなかったが、留守番電話に入れた教え子から次々に電話が入った。中には公衆電話から「先生。私、大丈夫。先生の留守番電話が嬉しかった。」と涙声でかけて

きた子もいた。

6. 17年を経て

帰国して、中堅教員から幹部教員と進むが、再び海外に出るという希望はなくなる。しかし、妻は「二度目は一人で行くこと」という。

都の教育委員会の方針では、教諭の再派遣はない。それなら早く校長になろうと考えた。

そして17年後、校長としての派遣の機会が訪れた。3月末にブラジルのリオ・デ・ジャネイロに赴いた。飛行時間は24時間、時差12時間。まさに、地球の反対側である。

J.J.S.に比べると、リオ・デ・ジャネイロ日本人学校(リオ日学)はこじんまりしている。子供たちは小1~中3で30~40名。先生は11名。国内の小・中学校と同様の教育課程のほかにポルトガル語、英語の会話、そして、機会を見つけては現地の学校と交流する。日本紹介やスポーツ交流。ブラジル生まれの子供もいるから、言葉の壁は感じない。しかし、学校としての扱いを受けないので税金などの経費がかかる。校長にはこういう苦労があった。

学校は楽しかった。校長も授業を受け持つ。3年生の理科は授業が楽しみであった。子供たちは校長先生の授業なので、理科の時間は学校のすべてが教室だと思っている。校庭の隅には自分たちの畑を作った。現地スタッフが手伝ってくれた。校庭のはずれのフェンスの外側にはバナナがはえている。これを収穫して、全校生徒に食べてもらうというのが授業のまとめである。当然、花の観察やどこを切ったらよいか、その後、どのように手入れをするのかなど、バナナ学を伝えた。教頭時代に小笠原にいたことが役に立った。3学期になると1、2年生が校内カーニバルとしてサンバのパレードをする。

当然の事ながらブラジルでは野球よりサッカーである。98年、ワールドカップフランス大会。予選と運動会がかち合った。見学の父親が保護者席でテレビ観戦をしている。私もそっと、経過を聞きにいくと日本チームは敗退していた。



決勝トーナメント。ブラジル・カードは午後4時に始まる。町の様子が変わってきた。新聞テレビはワールドカップ一色である。地元出身で独身、9番のロナウドの人気は大変なものだ。私のアパートは12階建ての4階にあったが、隣のビルとの間にロープが張られ、緑と黄色のブラジル・カラーのリボンが下がる。これが町中に広がっている。道路にはこれまたブラジル・カラーやひいきチームのマークがペイントされる。私の車にもブラジル国旗が飾られた。ブラジルが勝つと歓声とともに花火が上がり、耳を澄ますと自動小銃の発射音が聞こえる。4時の開会までに子供たちを帰さなければならない。出来なかった授業を差し繰ることが可能かと教務主任の先生に聞く。「何とかしましょう。授業より安全が大事ですから」とニヤリ。ブラジル・カードの日は午後3時に学校は無入となる。ブラジルは5回目の優勝を目指して勝ち進む。これまで一度もワールドカップの決勝戦に出なかったことはない。ワールドカップはブラジルのためにあるなどとテンションは上がる一方だ。

そして、運命の決勝戦。学校を出るといつものように町はすでにゴースタウンだ。銀行も商店も試合中は営業を中断する。いつもは人だかりのする町の広場も誰もいない。そして、人がまったく載っていないバスとすれ違う。レストランはテレビに見入る客だけである。

家に着くと、シャワーを浴び、テレビの前にはビールとつまみ、そして、軽食が用意され、勝った時に窓から

振りまく紙ふぶきの山。夫婦2人は紙で出来たブラジル・カラーのとんがり帽子をかぶり、TVの前に座る。リオ・デ・ジャネイロでは教育テレビと宗教テレビ以外すべて、パリからの中継である。私たちは4チャンネルの「O Globo」を観た。しかし様子がおかしい。ロナルドが体調を崩して出場が危ぶまれているようだ。キックオフ。ブラジルはキャプテンのベベト以外、元気がない。ロナルドなど最悪である。そして前半15分、1点入れられる。その後、2点追加。ブラジルはフランスに惨敗した。リオの町は死んだように静かであった。

同じようなことがその2年前、アトランタ・オリンピックの予選で、日本が数少ないチャンスを生かして1対0でブラジルに勝ったときにも起こった。街を歩くのが怖かったが、知り合いが「おめでとう。よかったね。でも、私たちは悲しいよ。」と言ってくれた。

「リオ日学」で成功したことは、IT化である。文部省からいただいたコンピュータでとりあえず、インターネットを出来るようにする。梱包をほどいてマシンを出してセットし電源を入れるが、電源に苦労するのが、海外である。当時の日本の電子機器は海外の電源事情に合わない。電圧の上下ですぐ壊れる。物置にはスクラップとなったワープロの山である。安定化電源と停電用装置をセットし、テスターで電源をチェックしてようやく、スイッチオンできる。さらに子供たちのためのコンピュータを買った。韓国製の安いものに日本語ソフトを入れる。これが一番安い。何に使うかをはっきりさせて、担当教員とともに仕様書を作った。2年目にはようやく使えるようになった。文部省は電話事情の不安定から、リオ日学をIT化の指定から外したのだが、それなら自分ひとりでも進めようと考え、認められた結果だった。この頃、どこの日本人学校もホームページを開いている。リオ日学は乗り遅れずにすんだ。

インドネシアでもブラジルでも、その周辺国に旅行をした。それが8カ国にもなる。美しい景色や歴史的な建造物もよいが、やはり人々の暮らしを目の当たりにして感激することが多い。旅人には親切であるし、心からも

てなしてくれる。それが嬉しくて海外にまた出掛けたいと思う。

7. 若い人に期待する

東京学芸大学は教員を養成することにおいて、世界一であると思う。制度において、教授陣において、そして、その出身者において、である。これから大学を終えて社会に出る後輩たちが、地球の隅々まで学校に先生としていくことを願う。

その昔、ラテン文化圏では初等教育の担い手は家内奴隷であったと言う。自分の奴隷たちの中から、読み書きの出来るものを子供の初等教育に当てたのである。それ以外の地域では家庭教師によって初等教育が進められた。だから初等教育に当たるものの地位は低かった。

私たち日本人には教える立場のものは尊敬に値するという文化がある。「聖職」とまでは言わないが人に教える職業は尊いものなのだと、誇りを持ち続けた。

インドネシアの地方に旅行したとき、近くの小学校を覗いたことがある。そこはジャカルタから数千km離れ、インドネシア語がまったく通じない地域語の世界である。ちょうどインドネシア語の授業の時間だった。しかし、若い教員のインドネシア語はお粗末だった。ジャカルタから訪れた外国人の方がきちんとしたインドネシア語を学んでいるのだ。

学ぶものは教えられる。教員は教えながら、学び、成長を続けるのだ。そして、先生は教えることで社会に貢献する。

日本人は全人類の代表として、その運命を考える立場に立ったことはない。かつてのギリシャ人、ローマ人、そして中国人のように自分がこの地球の中心的存在だという立場に立ったことがないのだ。しかし、これからは世界を舞台に働く日本人を育てることが日本の先生の仕事なのである。

■ 私たちが教職をあきらめたとき

藤田 典子
藤原 奈緒

2002年3月、つまり2年前の春に卒業したばかりの二人の女性に登場してもらおう。B類国語科出身の藤田典子さんと藤原奈緒さんである。二人は教員を目指して東京学芸大学教育学部に入學してきた。しかし4年後、二人とも教員にはならない道を選択した。藤田さんはコピーライターの道を選び、藤原さんはケータリングとカフェのスタッフである。なぜ教師にならなかったのか。何があったのか。かつてのクラスメート二人に話し合ってもらった。

藤田：お久しぶり。初めてあなたの店（小金井市東町）にお邪魔したわ。「ヤドカリズム」(yadocarism)というスローフードのケータリングのお店なのね。中にカフェもあって、ここはカフェスペースということでいいの。



藤原：ええ。今、週末だけカフェの営業をされていて、平日はケータリングのご注文を受けています。

藤田：ケータリングというのは？

藤原：いろいろなやり方があると思うんだけど、うちでは基本的に出来上がった料理を配達するやり方が中心です。最も多いのは小さいお子さんがいらっしゃるお母さん方からの注文ね。育児サークルや保育園での催し、ホームパーティーや大学のゼミのお食事会、職場での忘年会、謝恩会などから注文が来るわ。

藤田：ご注文いただいたところに料理を配達するのね。

藤原：そのまま渡したり、その場で盛り付けやセッティングをしたり、要望に応じて動いています。

藤田：あなたは料理を作る人よね。

藤原：そうね。食事のメニュー作りと調理を担当させてもらってる。ここでは役割のようなものは与えられていないのよ。調理だけ、接客だけ、というのではなくてあらゆることを自分でやる。やりたいことを形にしていっていい場所なの。日々の掃除や洗い物から、今後の店としての企画、展望まで全部。経験を重ねて自分を知り、夢を実現するための場所にしなさい、と言うのがオーナーの考え方なので。単なる「飲食」という範疇は超えているわね。

藤田：なるほど。ところでうちのクラスだと先生になった人の方が多いんですけど。

藤原：そうね。半分以上が先生になっているか、目指しているかでしょうね。

藤田：ほとんどが教員志望で入ってきたと思うんだけど、あなたも先生になりたかった？

藤原：なりたかったわね。

藤田：いつからそう思うようになったの。

藤原：中学生ぐらいからぼんやりと。高校で進路を考えるにあたって、ずっと続けられる仕事があったって思ったの。

藤田：ずっとやれる仕事ね。

藤原：そう、家庭を持ちながらできる仕事があったくて。

藤田：へー、しっかりした高校生だこと。

藤原：うちは母子家庭で、母親が私を育てながら仕事をしているのを見てきているので、どうやっても生きて行けるように手に職をつけたかった。また中学1年のときの担任の先生がとてもあったかくて素敵な方だったの。家庭も仕事も両方ちゃんとやっているすごくパワフルな女性だった。その先生に本当に自分の良いところを引き出して、可能性

を広げてもらったなあ。「教員になりたい」と先生に言ったら「今からそんな現実的なことってないで、もっと夢を持ちなさい」っていわれたわね。



藤田：素敵なお先生ね。その先生に憧れて？

藤原：そうですね。中学生生活は本当に楽しくてすばらしかった。先生も生徒もすごくのびのびとしたいい学校で、いわゆる「悪い」子もいっぱいいたけど、みんないい子で、仲良しだった。先生も個性的な方ばかりでした。母親が入院して私ひとりで生活をしてた時期があって、かなり大変だったけど、そんな時も学校に行けばみんながいて笑っていて、先生たちには支えてもらって。

藤田：こんなふうになりたという先生像がまずできて、先生に自分を支えてもらうという経験があったのね。

藤原：そう。先生に対するイメージが強かったのだと思うわ。本当に生き生きと楽しそうな先生ばかりだったので。家庭を持ってもやっていけるんじゃないかなって思った気がする。

藤田：私は父が教師なんだけど、夏休みもあって、夜が極端に遅いこともまずなかった。日曜日も家にいるし、会社員の家の子よりも父親と過ごした時間は長いと思う。教員っていい仕事だと思ったわ。それであなたのその夢はいつまで続いたの。

藤原：大学2年生の秋ぐらいまで。

藤田：そこでどうして変わったの。

藤原：何かきっかけがあったわけではなかった。何をしていたのかあまり思い出せないんだけど、私の大学生生活は現実感がなかったの。楽しかったけど苦しかった。自分が何者なのかわからなくてすごく苦しかったわ。

藤田：教師になりたいっていう夢はあったわけでしょ。

藤原：夢だったのかな。手段だったかもしれない。

藤田：将来何をやるんだろうとか、モヤモヤした感じは私もあったわね。

藤原：大学に入って初めて実家を出て、自分がどうい

人間で、どういうことが好きで、どういうことをしていると一番楽しくって、どういうところが弱くてっていうのを、ひとりになって考えられた時間だったと思うの。1、2年の頃って特に何をやるわけでもなく、普通に学校通って友達と遊んだりバイトしたり彼氏と仲良くしたりしていたけれど、すごく自分があやふやではっきりしなくて、何がしくて自分がここにいるのか分からなかった。ただ楽しいだけ、というのは私にとって苦しかったのね。だからこそ、自分のことを突き詰めて考えられた時期だったと思う。

藤田：なるほど。

藤原：それで出てきた結果が、今まで自分だと思っていた自分と実際の自分は違うんじゃないかってこと。あ、先生じゃないなって。

藤田：それは学芸大では先生になることが当たり前で、その環境にギャップを感じたということかな。

藤原：それもあると思う。

藤田：私の方は先生になりたかったわけじゃないの。私大をいっぱい落ちて、センター試験だけがよくて、学芸大に拾ってもらったみたいなもの。浪人もしていたし、とにかく大学生になりたかった。だからみんながそろって学校の先生になりたいっていうのに違和感があった。自分は違うなって。特にB国は先生になりたい人が主流でそうじゃない方が少数派だった。あなたも初めは先生派だったもんね。

藤原：優等生だったのよ。本当はそうではないんだけど。(笑) いつも穏やかにニコニコしていて、勉強に困ったこともあまりなかった。すごく守られていて平坦な感じ。だから先生という職業は憧れというよりも、自分の可能な選択肢の中から選んできて感じだったわね。だけどこのまま先生になって教壇に立った時に、伝えられることは何もなかったの。のほほんと大学生生活を送ってきて、先生になってほどほど感じの良い先生としてやっていくことはできるかもしれないけど、人間同士で向かいあったときに、本当に伝えられることが果たしてあるのかって考えたのね。

藤田：その感覚、よくわかるな。先生になるつもりなかったのに、教育実習をやって先生っていいな一っ
て思って、1度は教員という道も考えたのよ、私も。生徒からの反応がダイレクトにあって面白かったから。でもこの仕事はごまかしのきかない職業で、生半可な気持ちじゃできないな、とも思った。このまま先生になったら、学校の外へ出て行く子たちに教えられることがあるのかって。授業じゃない部分のことが気がかりだった。そこはあなたと共通するわね。

藤原：そうね。先生になる前に社会経験をした方がいいってよくいわれたりするけど、それだけじゃないとも思うの。職員室にいるんな先生がいるってことも子供にとっては大事なことだと思う。子供って大人が思っているよりずっと勤が働くし、本当のことを見通すわよね。私は自分の身から出ていないような言葉を簡単に口にするようには絶対になりたくなかった。

藤田：私も自分の言葉じゃない言葉は絶対に子供に通じないだろうなって、思った。適当なことをいうともう信用してもらえないよね。あなたの話を聞いていると、先生という職業に対してすごく真剣に考えていたんだってわかったわ。そこから「料理」という全く異なる道に進んだことに興味があるんだけど、やっぱり料理が好きだったからなの。

藤原：料理はずっと好きだった。大学のときもよく人を家によんで料理をしていたんだけど、自分の作った料理があって、おいしいものを一緒に食べるといつもより深く話ができたり、心が通った気がする。大学生活はどこか実感のない自分とは遠いものだったけれど、自分の作った料理が人の真ん中であって「おいしいね、おいしいね」ってもらえることには「人と人をつないでいる」っていう実感がすごくあった。料理をしているうちに自分も元気になるなっていう感覚がどんどん出てきて。うちは母親もお店をやっていたから先生になって働くということより、実感がわきやすかったのかもしれない。

藤田：人の役に立ってるというか、喜ばれるっていう感覚ね。

藤原：飲食の世界って反応がすごくダイレクトなのね。自分が作ったものを食べてもらって、それがその人の血や肉にも、力にもなるってすごいことだなあ、って今でも常に思ってる。作った時の気持ちは、食べた人に伝わりますからね。食べてくれた人が元気になるとか笑顔になるとか、ものすごく重要なことだな一って思った。それが料理をやっていると思った一番の理由かもしれない。

藤田：先生も自分のやったことがダイレクトに生徒からでくると思うんだけど。

藤原：教員という仕事は自分がそれで本当に喜べるかっていう疑問があった。うれしい瞬間はたくさんあるだろうけど、それがあまり想像できなかった。自分がずっと描いてきた図では、私はいい先生になるんだけど、実際自分が生徒の前に立っていえることなんて何もない気がしたし、自信もなかったのかもしれないわね。でも、消極的に今の道を選んだわけではないのよ。

藤田：私が先生もいくなって思った後に、今のコピーライターという道に進んでいくのも、決して教員をあきらめたとかじゃなかった。自分の書いた言葉が、誰かの心を動かすものであって、それによって世の中の人に行動を起こしたり、元気づけたりしたいって思ったからなの。ちょうど就職活動を始めなきゃという頃に広告業界で活躍している学芸大のOBの話聞いて、こんなに楽しそうな大人がいるんだって思ったの。もともと言葉を使って仕事をしたいという夢があったんだけど、OB訪問でそれがはっきりした。先生よりもやりたいことに出会ってしまったのね。

藤原：食べ物と言葉と、媒体はまったく違うけど誰かの活力になるというのは同じね。先生はいつかやってもいいけど、まずはやりたいことをやってからって思ったのね。

藤田：ええ。もちろん卒業してそのまま先生になる人も必要だと思う。父を見ていて、先生っていいなっ

てずっと思っていたから。私もいつかは、って思うわね。いろんなことを経験してからなら教えられることもあるかもしれない。学校とかけ離れた世界の人が授業をしたら面白い授業ができるかもって単純に思う。

藤原：やりたいことをとことんやりつくして、すごくロクなおばさんになったらなりたい、という気がしないでもないわね（笑）。かっこいい人だっと思われること、そういう背中を見せることが大事だと思うの。この人は本当にやりたいことをやってる、それは教育への情熱でも、趣味ですごく楽しんでる、でもいいんだけど、ひとつ筋が通っていて、こんな大人になりたいなっていう存在であることが。

藤田：私が好きだった先生は、勉強してるというより、好きだから知ってるって感じの人でした。楽しそうな大人に見えたわ。

藤原：先生って、何やっても80点とかとれる人ばかりじゃなくてもいいような気がする。

藤田：ところで4年のとき、周りが教員採用とか就職活動している中で、自分がそうじゃないっていうのは違和感なかった？

藤原：全然。私の自己分析は就職活動用ではなくてもっと早い段階にしていたから。

藤田：私は就職活動を通して貴重な経験をしたわ。これから教員になる人にぜひお勧めしたい。就職試験を受けてみなさいってね。受験じゃないからお金かからないし。初対面の人に自分のことをしゃべって、否定されるっていう貴重な経験ができる（笑）。学生生活の中で自分のことを真剣に考えられた時間だった。なんとなくじゃなくて、他人に自分のことを分かってもらえるようにはっきりさせなきゃいけないわけだから必死になったし、悩みました。

藤原：人にわかってもらうように声に出すのって、すごいエネルギー。勇気もいるしね。

藤田：一般の企業を垣間みる経験は、何をやるにも絶対に無駄にならないと思う。先生になるから一般の



企業は関係ないって決めつけない方がいいんじゃないかな。

藤原：私も就職活動しておけばよかった（笑）。

藤田：あなたも就職活動の形はとっていないけど、お店の面接を受けたりしているじゃない。

藤原：様々なお店の方にお話を伺いに行ったりしたわね。初対面なのに本当に親身になってお話しして頂いたことが多くあって、その度に感動したわ。

藤田：先生になっておけばよかったと思うことはある？

藤原：全然。

藤田：私も今は全然。それは今の仕事が好きだからかな。最後に先生とは違う職業に就いた立場から後輩たちにメッセージあるかな。

藤原：何をしても自分のことを突き詰めて、研究することが大切だと思う。自分はこういう人間で、自分にとって何が楽しくて、何が喜びなのかって。同時に嫌なものに対しては何がそう思わせるのかと。自分にとってどうしても捨てられないのを見極めた人は強いんじゃないかな。悩む時間と体力のあるうちにとことん掘り下げて自分と向き合うことだと思う。失敗や恥を恐れないで何でもやってみることかな。あなたは？

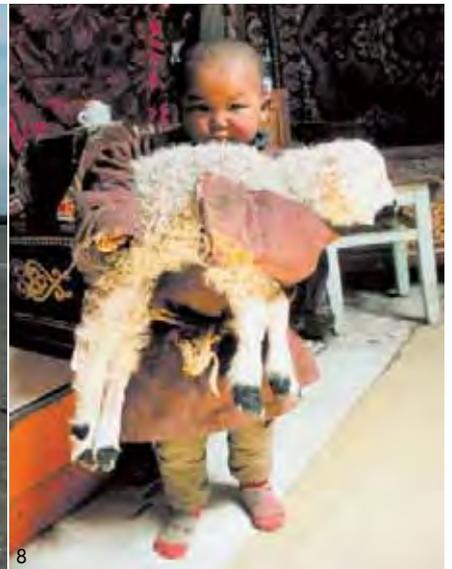
藤田：自分でこれだって思える仕事をする喜びってすごくあると思う。学生時代はやりたいことを見つける時間があると思うからしっかり悩んでほしい。私も1度広告代理店に入って、1年半ぐらいでコピーライターに転職している。これで人生が決まるわけじゃないんだから、とにかく今、自分がやりたいものを真剣に探してみたい。閉じてもらわないでほしい。バイトでも何でもいろいろやってみて、これをやっている時が幸せって思えることを仕事にしてほしいです。

歩いた、歩いた。走った、走った。
そして見た——新聞記者35年

遠藤 満雄
(1968年社会科卒
前毎日新聞編集委員)



1/バイクで出勤、取材の足に(1981年)
2/1973年高倉健さんと 3/1978年江川
卓「空白の1日」事件でインタビュー 4/マ
サイ族の美女と(1992年) 5/1994年標
高4000mのアンデスを越えて 6/1994年
アンデスで



7/空からの取材も(1994年) 8/モンゴルの少年(1997年) 9/モンゴルの草原を走破(1997年) 10/オフロードバイクに挑戦(1997年) 11/いま200万年が水にアラスカの氷河の崩壊(1998年) 12/カイバル峠。紛争地帯に行く(1993年) 13/ニューヨーク。まだWTCが…(1999年)

エジプトのピラミッドそばで発見された象形文字の中に「近頃の若者は……」の字句が見えるそうだ。人類は5000年も前から若者の野放図さに眉をひそめ、また憧憬してきた。僕も35年前は若者であった。月並みに、あっという間であったともいえるし、バトンタッチの時が来たという感慨もある。

僕は2年前から異業種、異世代交流の旅行クラブ「遠旅組」を主宰している。先日も20台のオートバイと10台のスポーツカーを連ねて40人の仲間と鹿島灘沿いを北上し、勿来の関からいわき、三春町の滝桜を巡る1泊2日の旅をした。途中、五浦海岸の岡倉天心記念館「六角堂」を訪れた。天心は29歳で東京美術学校の校長に就任し、横山大観、菱田春草らから師と仰がれた。

その天心の代表作「茶の本」の中に、こんな一節がある。一「西洋人は日本が平和な文芸にふけていたころは野蛮国とみなしていた。しかし日本が満州の戦場に大殺戮行動をおこしてからは文明国と呼んでいる…」。

天心のこの認識は現代にも通じると思う。だから若者たちに天心から「国際人とは何か」を学び、その活力を吸収してもらおうと思ったのである。

僕は「近頃の若者は…」という言葉は吐きたくない。後を続く人たちに信じたい。どうぞ、先走りをせず、じっくりと足元を見つめる新聞を作り続けてください。本当に愉快的な記者生活でした。皆様ありがとうございました。さらばです。

いきなり、妙な文章で入りました。これは今年(2004年)5月、35年勤めた毎日新聞社を定年退職するにあたって、毎日新聞「社報」のために書いたもので

す。新聞記者という仕事がなんだか楽しそうだ、という雰囲気はわかってもらえるでしょうか。

私は1968(昭和43)年、社会科を卒業して、東京書籍という教科書出版会社に就職いたしました。ここまではまあ、東京学芸大学卒という経歴の延長線上にあったといえます。しかし、1年後、毎日新聞社の入社試験を受け、合格したのです。教科書会社には大変な迷惑をかけました。何しろ入社1年しか経っていない新米社員が逃げ出すのですからね。なんとか納得してもらって新聞社に移りました。

新聞記者は中学生のころから憧れの職業でした。しかし学芸大学に入って(学芸大学にしか入れなくて)少し揺れました。周囲がほとんど教員志望であり、小学校課程だったこともあって、授業のほとんどが教員になるためのカリキュラムです。家庭科の実習、ピアノ演奏、水泳……小学校教員になるには必要不可欠です。しかしこの授業がいやでたまりませんでした。入学と同時に「放送研究会」というサークルに入ったことも進路に影響を及ぼしました。このサークルはインターカレッジで、20校以上が加盟している全国組織を持っていました。そこの役員をやることになったのです。それで就職先も新聞社ではなく放送局に変わっていきました。そして4年時の就職活動はもっぱら放送局でした。大学は教員採用試験を受けるための対応は万全だったのですが、それ以外のものにはほとんど無策でした。自分ひとりで願書を取り寄せ、自分ひとりで試験を受けて回りました。しかし、この就職活動は失敗でした。軒並み落ちたのです。それで放送局はあきらめ、子供のころからの夢だった新聞記者の道を選んだのでした。

最初に配属されたのは「サンデー毎日」という週刊誌の編集部でした。ここに通算10年ほどいたのですが、世間の見方を学びました。今週は国会周辺で政治の取材をしていたかと思うと次の週は芸能人の離婚問題を追いかけて。事件現場にも数え切れないほど派遣されまし

た。日本中を駆け回りました。その後、社会部に移りました。いわゆる「サツ回り」から始まります。つまり毎朝、担当する警察署に出かけて行って、そこに居座り、火事や交通事故、空き巣狙いなどの小さな事件をフォローするのです。辛くて苦しいけれど、犯罪や事故から社会を覗き見ることができました。

東京学芸大学出身の新聞記者は周囲におりませんでした。毎日新聞社には一人もおりませんでしたし、他社でも出会いませんでした。それでつい出身大学を尋ねられるのが面倒になりました。答えた後、「なぜ新聞記者になったのか」という質問に答えるのが面倒だったのです。

教育問題には当然関心を持ちましたし、周囲もそう見せていました。先生の日常を追う企画などを担当させられたこともありました。いずれ文部省の記者クラブにでも配属されて、教育記者になるという道もあったのかもしれませんが、そのチャンスは巡ってきませんでした。自分で求めることもしなかったのです。

その結果、私の記者生活は実に多彩、専門分野を持たない「遊軍記者」でした。新聞記者は総理大臣からホームレスまで取材対象、といわれますが、まさにその通りの記者人生でした。

最後に担当したのが「クルマ」のページの編集長でした。自動車に関する新しい情報を紹介するページです。10年間担当しました。世界の全メーカーの新車に乗りましたし、世界中をドライブしました。ヨーロッパのアウトバーンを時速200km以上で1日1000kmも走ったこともあります。また南米パタゴニアの山岳地帯やアンデス越え、インドネシア・カリマンタン島の熱帯雨林を横断したこともあります。

自動車は19世紀末に発明され、20世紀のうちに世界中に広がりました。その数はざっと7億台といわれます。地球の総人口の10人に1台の所有より多いのです。日本はその自動車を年間1000万台近くも生産し、その半分近くを輸出しています。最近では世界各地に生産拠点

を持ち、世界で最大の自動車供給国になりつつあります。日本人は10人に1人以上が何らかの形で自動車に関連する仕事をしているといわれます。周囲を見渡してみればわかります。自動車がなければ必要のない設備や道具、インフラがたくさんありますね。道路だって自動車がなければ舗装する必要さえないかもしれません。ところが、一般の人たち（自動車ジャーナリストも含めて）の自動車への関心は、相変わらず新型車の乗り心地や、新しい技術がどれだけ導入されているかに集まります。自動車は国際政治、国際経済そして科学技術、デザインなどの総合的な産物です。単なるカッコいい乗り物ではないのです。その意味では「教育」に似ているかもしれません。計算能力や文字の読み書きの能力をつけさせるだけが教育ではないでしょう。自動車もただ速く走るだけの道具ではなく、好むと好まざるとに関わらず、人間生活のあらゆる分野の中に位置づけられるのです。教育のない社会は考えられないのと同じように自動車のない世界は成立しなくなっているのですね。

まったく、人生とは予想のつかないことの連続です。それがまた楽しいのです。

ここに掲げた写真は、私の退職記念パーティーを企画してくれた後輩たちが我が家にやってきて、アルバムの中から勝手に選び出したものです。これらはパーティー会場に映し出されました。あらためて眺めてみると、良くぞ歩き回ったものよ、走り回ったものよ、と思います。まだ当分歩き続けます。後に続く後輩たちを信じて……。冒頭に掲げた文章の通りです。岡倉天心のような国際人を目指したいと思うのです。

デジタル・モバイル時代



(株)テレビ東京 美術センター
相談役 永尾和樹
(1964年甲類理科卒)

東名高速道路や東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された昭和39年4月に、東京キー局の5番目として開局したテレビ東京(当時、日本科学技術振興財団テレビ事業本部)に入社できたことは、少しの好奇心と熱意と幸運からであった。3年時に選択した「視聴覚教育講座」(五十嵐清教授・櫛田馨助教授担当)でスライド教材の制作を仲間4人とまじめに取り組み、コンクールで2位に入賞した時の喜びが、その業界への就職と30年に及ぶテレビ制作意欲に繋がったのではないだろうか。

まだ、メディアの世界は新聞、映画、ラジオなどが主流で、モノクロテレビ映像からカラー化への変化が少し動き始めた時代で、昭和38年、初めてアメリカとの衛星生中継に、テキサス州ダラスで起きたケネディ大統領暗殺事件の映像が飛び込んできたことに日本社会も騒然となった。テレビの「力」に少しずつ変化が起き始めていた時代でもあった。その後カラー化が実現し昭和43年カラーテレビ所有世帯が100万を突破、ハンディカメラが登場するとあらゆる映像が可能になった。日本経済の高度成長に合わせ、受像機も一家に2台、3台と増えたが、視聴時間だけは2時間20分前後で今も変わらない。



テレビ報道はどう変わる?

1996年通信衛星(CS)を放送に開放した年からメディアが一気に多様化した。デジタル多チャンネル有料放送が始まり、300チャンネルのテレビ番組が流れ出した。その後、2001年には放送衛星(BS)によるデジタル放送8局が開局し、2003年12月には、地上波デジタル放送も開始され、データ放送とともに画面の多様化も進んだ。ブロードバンド放送も認可され、放送と通信の融合が促進し、デジタル・メディアの完熟した社会状況が2011年の完成へと向かっている。

一方でメディアの多様化、多チャンネル化とともに進んだのは、放送規制の動きである。「個人情報保護法」は平成15年5月国会で成立し、個人情報扱う全ての者に対する基本理念のほか、個人情報取扱い事業者に対して利用目的の通知、公表、第三者への提供制限などの義務規定が盛り込まれた。戦後の法律で初めて報道が定義されたほか、個人を含む報道機関や著述業など5つの分野の適用除外が明記された。しかし、マスコミ各機関は主務大臣が「報道」にあたるか判断することなどが問題としている。

外国からの武力攻撃や大規模テロへの行政の対応などを定めた有事法制の一つである「国民保護法」は、施行を前に指定公共機関160社を決定し、兼ねてから「放送、報道の自主・自律が損なわれるおそれがある」として指定に反対を表明していた放送事業者19社が含まれた。政府広報と独自取材報道の兼ね合いが当然問題になる状況だ。

増加する少年の凶悪犯罪を背景に自民党が提案を準備している「青少年健全育成基本法」は、「青少年有害社会環境」の定義が幅を広げすぎ、公益性の概念として曖

味であるばかりか、青少年の「価値観の形成」にまで国家が介入するような内容になっている。民間放送の事業者団体「民間放送連盟」は、言論・表現にかかわる領域に行政が直接介入することは、自由主義社会の根本理念と対立するものとして反対を表明している。

この他、国会で審議中の「裁判員制度法」では、裁判に市民感覚を取り入れ、より開かれた司法を目指すはずの法律が、国民から選出された裁判員の取材さえできない内容になっており、制度の意義や裁判の実態を報道しにくい状況が生まれようとしている。

さて、メディアがどんなに多様化しても、基本はソフトであり、各テレビ局は日夜キラーコンテンツ探しに頭を痛めている。テレビ東京は中でもアニメ番組に力を入れ、週におよそ30本のタイトルを放送している。世界で放送されるアニメの6割は日本製といわれ、68カ国、25言語で放映されている。いまやアニメの国内市場規模は2000億円(2003年経済産業省調べ)を突破して、人材育成のために大学にも次々にアニメ学科が誕生している。日本経団連は平成15年8月「エンターテインメント・コンテンツ産業部会」を発足させ、3次産業の分野の振興策を政府と共に促進し始めた。東京都杉並区、練馬区などはアニメ制作会社が集中していることから、資料館などを作りアニメ産業の振興を図っている。ソフト業界の一例だが、まだまだ発展は続いている。

デジタル時代で、最も大きい変化が移動体通信の分野である。

小型コンピューターと携帯電話などの通信機器を用いれば、屋外などでもインターネットに接続し、様々なサービスを受けることができる。モバイル機器は高性能化、軽量化などで増加傾向が続いており、新しいメディアとして確立しつつある。カメラ付き携帯電話は2000万契約(15年3月現在)を超え、携帯電話契約数も4社合計で8000万契約を超えた。平成17年には、地上波デジタルテレビ放送も携帯電話で受像できるようになり、数年後には100円玉ほどのDVDが内蔵され、好きな番組が、好きなときに再生して視聴できるようになる。当然、ビ



世界を駆けめぐる日本のアニメ

ジネスチャンスが拡大し、携帯向けソフト・コマースが大量に流れ出す。

平成16年6月長崎県佐世保のパソコンメールの交換から起きた小学生児童の痛ましい事件は日本の社会を騒然とさせた。文部科学省の調査でも公立学校の100%がインターネットを利用した授業を行っている。情報機器を扱う技能やソフトを検索する技術は子供たちは好奇心も手伝って上達が早い。パーソナルな機器のため、教師や親の目の届かないところで、ショッピング詐欺、アダルト映像や薬物の不法販売、出会い系サイトでの危険な勧誘など大人が子供をねらって次々と攻撃を仕掛けてくる。機器を扱う前に、最低限の個人情報管理し身を守る方法、相手を傷つけないルール、著作権などの法律を守る教育をすることが遅れている。教育現場ではそれを教える人材も不足していると聞く。日本に視聴覚教育を教えたアメリカ・オハイオ州立大学デール教授の時代には、ネット情報機器パソコンやモバイル通信機器はなかった。

メディア業界に就職を希望し、新しい時代のジャーナリズムに挑戦しようと考えている東京学芸大学の在校生諸君がいたら、是非、目の前の困難にめげずに、業界で活躍する諸先輩を訪ね、豊富な経験談の中から自分に合った職種を発見し、チャンスを掴んでほしい。幸いにも10年前からマスコミ・オービー会を卒業生の有志が発足させ、100人近い名簿も完備して新聞、出版、映画、広告、ラジオ、テレビ、芸能スポーツ、文化人など活躍する卒業生の交流親睦会を開いている。

こぐれの素・東京学芸大学

卒業して30年が過ぎた数年前、小金井祭を訪れたことがある。歩き慣れていた国分寺駅から学校までの道は大小様々な住宅が立ち並び、郊外型の住宅地になっていて、かつて、そこここに点在していた農家風の民家は見事に消えていた。そりゃそうだ、30年もの年月が経過すれば、人も家も風景も変わる。現に、鼻っ柱の強い遊び好きな女の子だった私だって、分別くさい白髪交じりの、仕事好きなミニお婆さんになっているんだから。

あちらこちらの路地に迷い込みながら、やっと正門前の桜並木にたどり着き、ここが我が母校東京学芸大学？と目を疑った。若木だった桜たちも太く大きく育て、老齡の時を迎えているようだった。

私たちが入学したのは昭和40年の春。その前年に大学のキャンパスはこの地に統合されたのだそうだから、桜たちの年齢は我々とほぼ同じか。人間ならそろそろ定年を迎えようという年齢なのである（まあ、桜の寿命は何百年という単位なので、本当はまだまだ子供なのかもしれない）。

大木になったケヤキも大きな枝を空に向かって広げていて、我々が闊歩していた時代の大学校内とは違い、しっとりとした学舎の雰囲気には満ち溢れていた。

あの時代、学生運動が始まってエスカレートしていったあの時代、キャンパスがまだまだ未成熟だったあの時代、酒ばかり飲んでいたあの時代が懐かしく脳裏に浮かんだ。

学生運動で混乱していたあの頃、サンバ科（三馬鹿）と陰で囁かれていたのは美術科・音楽科・体育科の三科。「なんだと、失礼な！」とお怒りの方もおられるで

こぐれ ひでこ

1947年埼玉県生まれ。1969年卒業。服飾デザイナーを経てイラスト&エッセイ人として活動中。著書22冊あり。



しょうが、40年近く前、そう呼ばれていたのは事実。そのサンバ科の中で最右翼だった美術科に私は籍を置いていたのである。サンバ科最右翼のなかでも目立ってできの悪い学生が私だったのである。

授業ボイコットのためロックアウトされた正門で仲間数人と酒を呑んで騒ぎ、近所の人に怒鳴られたり、美術科館前の芝生に「喜楽」や「長野屋」から出前を取ったり、旧陸軍技術研究所の建物にあった部室で青臭い議論を交わしたり、教室に1カ月も泊まり込んで酒を呑み続け、あろうことか教室の流しで入浴したり（日本画の高木先生ごめんなさあい！）...思い出すのは女にあるまじきバンカラな大学生活のことばかり。酒は不可欠な友であった。酒を呑む席には必ず座っているヤツだったので、クラスメイトから「コンパ委員」という称号を与えられていた。こんなデタラメな学生、今でも存在するのだろうか。自分の昔を顧みて、恥ずかしいような誇らしいような...んーん、でもちょっとだけ誇らしさが勝っているかな...

美術教師になるんだろうなあ、ぼんやりとそんな風に考えていた私だったけれど、学ぶことよりも酒がらみの遊びに熱中しすぎたせいなのか（絶対そう）、東京都の教員試験に不合格になった。当たり前のことだと思う。東京都の試験官には私の素行不良がお見通しだったに違いない。

さて、教師への道を絶たれてガックリしたのかというと、そんなことはなかった。

「あ、そ、私みたいな教師は不要？じゃ、別の世界へ旅立つわ」

いとも簡単にそう考えて、洋服業界へと足を踏み入れたのである。

卒業後、服飾を勉強したのは半年だけだというのにデザイナーを自称。思えば不遜な女であった。25歳の時パリへ出かけた。パリの小さな会社でお給料をもらえるデザイナーになった。パリ生活は3年、日本に戻って洋服会社経営を10年...合計すると16年間、洋服業界に棲息したことになる。服作りのことなんてなんにも知らずに飛び込んだ世界だったけれど、服作りする上で彫刻やデザイン、絵画、工芸など...美術科で学んだ基礎知識に助けられているなあ、と感謝することがたびたびあった。まじめな学生じゃなかったのは事実だけれど、知らず知らずのうちに、なにかを吸収している場所、それが学校というものなんだろう。そして、なにかに強烈な興味を抱いたとき、学んでいたアレコレがぼつりぼつりと姿を現して、やりたいことの実現へと導いてくれるのだろう。今でもそう思っている。

38歳の時、洋服業界を引退。1年足らずのうちにイラストレーターを自称し始めた。中年になっても不遜な性格は変わらず...人間の性格はそう簡単には変わらない。すすめ百まで踊りを忘れず、だ。

イラストレーターを名乗ってからすでに19年が過ぎた。最近は自称するだけではなく、他人からもイラストレーターとして認められるようになった気がする。その上、夢にも思ったことのない「文章を書く」という作業で収入まで得ているのだから、人生はどんな具合に転がっていくのか予想もつかない。面白くて不思議だ。

思えば、大人への階段を昇り始めたのは、他でもない、小金井市貫井北町の、ただ広いばかりが特徴だった学芸大学のキャンパス。酒も煙草も恋愛も、みんなここで始まったこと。そして今でもその三つのことは在学当時と同じように続行中である（夫とはクラスメイトでした）。

東京学芸大学とは、私の素を生み出してくれた、ありがたい場所なんだと思っています。



女性が仕事を持つということ



井口 保子

(フリーアナウンサー)

「戦後は終わったのか？」という議論が盛んだった頃、私は東京学芸大学の社会科に入学した。

月刊誌「文芸春秋」には中野好夫氏の「もはや戦後ではない」という文章が掲載されて大きな話題を呼んでいたし、当時、学生が愛読していた「世界」にも「戦後への決別」が特集として取り上げられていた。終戦から10年余り。昭和30年代初めの日本社会は落ち着きかけてはいたのだが……。

小金井の東京学芸大学には「戦前」「戦後」の面影が、そこに残っていた。

まず仰天させられたのが貧弱な建物。教室は壊れかかった木造。冬は隙間風がピューピュー音を立てて入り込んできたし、机も椅子もガタガタ。オーバーコートを着たまま授業を受けていた。

ウソかホントか、さだかではないが「社会科の教室は戦前の兵舎の跡だそうだ」などと、学生の間では、まことしやかに囁かれていた。教室から教室への移動も真冬は霜で濡れたドロ道ですべったり転んだりしながら時間を気にして歩いていた。

それでも当時の学生は明るく朗らかで授業の合間には板に穴のあいたような廊下でジルバやマンボのステップを踏んでは楽しんでいた。貧しさを苦しめない世代だったのかもしれない。

3年になって社会科が下馬（しもうま）の世田谷校舎に移ったときは、ようやく冬の間風から解放された、とホッとしたものである。

実は私、その頃、すでにラジオ関東（現ラジオ日本）の社員アナウンサーとしてスタートしていて、学生と社会人という二足のわらじを履いて日々、忙しく動きまわ

っていたのだ。3年、4年の単位を3年かけて取得。小金井時代をあわせると通算5年も通って卒業証書を手にしたのである。

ラジオ関東に入社したのはほんの弾み……だった。放送研究会の先輩が「アナウンサー試験を受けに行く」というので後学のために私は鞆持ちとしてついて行った。

当時のアナウンサー試験は、まず音声テストを受け、合格した者だけが書類を渡され、二次試験を受けるかたちだった。

3人の先輩の鞆を持ってスタジオの廊下に立っていると係員がやってきて、「さあ、あなたもどうぞ」と声をかけられた。モジモジしている私に「鞆なら私が見てあげましょう」という。

思いきって長い行列の後ろについてテストを受けることにした。な、な、なんと、私はあっさり合格。先輩3人は音声テストで落ちてしまったのだ。なんとも気まずい帰り道だった。

私はテストを次々にクリア。遂に五次の面接。そこで試験官は書類を克明に見て、卒業まで2年もあることに気づいたのだ。

「大学はどうしますか？」

「アナウンサーになれるのなら退学します」と私。

「いや、それはまずい。わが社はアナウンサーといえども女子社員の定年は30歳。結婚退職も社則にうたってある」

「私、28歳までには結婚してアナウンサーをやめま

すから……」
「いやいや、中途退学では嫁の貰い手がないぞ。どうだ、大学に通いながらアナウンスの仕事をするか？」

「ハイ。そうさせていただきます」

即座の決断で開局間もないラジオ関（当時のラジオ関東の愛称）の社員アナウンサーになってしまった私。

今は絶対にない面接試験の内容である。

女子の定年が30歳？結婚退職？なんだそれは？しかも社則にも、うたってある？

しかし、昭和30年代の日本では、それが堂々と、まかり通っていたのである。

いえ、30歳、どころか、当時、「女子アナ25歳定年制」をとっていた民放が2社もあったのだ。

学芸大を卒業した後は「先生になる」と安心していただけ、両親は「好き好んで30歳までしか働けない職業につかなくても」と、どれほど嘆いたことか。

テレビのない時代に生まれた私は子供の頃から「ラジオ」が大好きだった。ようやく言葉を話せるようになったとき、私は母親に、こう言ったそうである。

「大人になったらラジオの中に入るから大きな体になってはダメなの」

それも何度も繰り返して……。

母だけでなく周囲の大人は大笑いしたそうだが、幼い私は大真面目だったという。3歳の幼児の頭では、どう考えても四角い箱のラジオには「人が入って、おしゃべりをしている」としか思えなかったのだろう。

こんな私が小、中、高、大と進む中で、アナウンサーを目指したのは当然だったかもしれない。1500人の中から誕生した「学生アナウンサー」などと、当時、週刊平凡などにも大きく取り上げられ、しばらくは良い気分でも過ごしていたのだが。それはいつと時のこと。いざ、働き出してみると学生とアナウンサー生活を両立させることは想像以上に大変だった。

一番大変だったのが教育実習。仕事も休めない。実習もしなければならない。教材も作らなければならない。わずか2、3時間の睡眠でがんばった日が週に4日以上あった、と記憶している。

大学に「教職に就かないから教育実習の免除」を願い出ると「では中退を」ということになり、会社は「何年かけ

ても卒業してくれ。便宜をはかるから」というばかり。しかし、アナウンスの現場では甘えは許されなかった。

悩みに悩んで、ふつうの学生が数週間で終了する教育実習の単位を3ヶ月近くかけてようやく取得。青春の真っ只中を、愛も恋もなく過ごしていた私にとって、卒業証書は「頑張ったあかし」。私の中ではずっしりと重い。

とはいえ、昭和30年代の民放には学芸大の先輩は皆無……にひとしかった。私大の放研が主流で、それぞれに「三田会」「白門会」などと、名称をつけ、連れ立って「飲み会」に出かける同僚がうらやましくてならなかった。

苦労して卒業したが仕事の場では学芸大出身で得をしたことはあまりなかったような気がする。でも、これからは違う。卒業生の半数以上が教職に就かず、いろいろな社会に飛び出している。マスコミにもどんどん進出している。どこへ行っても卒業生に会えるようになるだろう。

私は厳しい世の中を懸命に生きてきたが、これからは違う……と思う。21世紀は女性の時代だ。定年の男女差もなければ、女子の結婚退職もない。

28歳までにアナウンサーをやめます、と言って入社した私が数10年、仕事を続けていても誰にも文句を言われない。30歳を過ぎて始めた競馬の仕事はラジオ日本を退職した今も、まだ続けている。毎日が楽しくてならない。いい世の中になったものだ、とつくづく思う。

東京学芸大学で学んだこと

私は1991（平成3）年に教育学部初等教員養成課程社会科専修を卒業しました。社会科卒業という皆さん、えっ、とおっしゃいます。社会なのになぜ気象予報士の仕事を？と必ず聞き返されます。実は社会科の中でも地理に所属し、山下脩二先生の下で「気候学」を学びました。研究論文や卒業論文も「気候」で書きました。大学四年の時、山下脩二先生の薦めもあって、子供の頃から夢でした気象キャスターの道へ進みました。

私が東京学芸大学を選んだ理由は二つあります。一つは教師の免許を取れること、二つめは天気を学べることでした。中学の卒業文集の中で「将来はNHKの気象予報官になりたい」と書き、高校時代は理科系のクラスに所属していました。ところが、大学受験で理学部に合格後、入学を辞退しました。果たしてこのまま進んでいいのか、と迷いが生じ、一年間浪人してじっくり考えることにしました。自宅浪人、いわゆる“宅浪”をして、予備校に行かず独りで勉強しながら将来のことを考えました。そこで感じたのは人の温かさでした。自宅浪人は孤独との闘いでもあったので、友人が予備校から帰ってきて様々な話をしてくれるのがとってもありがたく思うようになってきました。そこで、人間味のある仕事もしてみたいと思って教師の道を考えました。ただし、天気の世界に入る夢も捨てきれず、教育と天気の二つの勉強ができる東京学芸大学に進むことを決心しました。

気象予報士の仕事

気象予報士の試験が始まったのは平成6年の夏でした。

気象予報士
平井 信行
(1991年社会科卒)



当時、私は（財）日本気象協会という民間の天気予報の会社に入って4年目で、177の天気予報の声の吹き込みやNHKなどのラジオの天気番組への出演、野球場などに向けた会社独自の天気予報などを担当していました。社会人になってからも様々な経験をしたことや天気の勉強を欠かさなかったこともあり、試験には1回で合格しました。

気象予報士は国家資格です。施設を整えて許認可さえ受ければ、気象予報士がTVやラジオなどでも独自の予報を発表することができます。現在、気象予報士は5000人誕生しています。TVでは気象予報士の資格を持った若い気象キャスターが多数登場し、賑やかになっています。気象予報士制度が始まるまではどちらかというとベテランの方の仕事でしたが、私もこの波に乗って出演することができた者の一人です。

気象予報士の仕事を紹介します。私が担当しているNHK気象情報は19時前の全国天気（一部放送されない地域を除く）、21時前の首都圏天気です。朝起きてまず何をするかというと空の確認です。自分が前日しゃべったことが当たっているかどうかを見ます。

そこから夕方の放送に向けてのストーリー作りが始まります。家から局に向かうまでの街の様子、電車の中の会話なども参考にします。局に入るのは午後2時過ぎです。気象庁から送られてくる50枚以上の天気図を見て今後の天気の見通しも検討しながら、放送で伝える内容を一つに絞り込みます。これがかなり難しく、毎日、苦

労するところです。放送時間は3分から6分と短いですが、それまでに費やす時間は最低5時間かかります。

気象予報士の養成大学！？

大学の勉強で天気予報に役立ったことが二つあります。一つは教育実習、二つ目は気候学ゼミでの観測です。

大学3、4年の時に行った教育実習は、子供たちと共に過ごした楽しい思い出として残っています。しかし、つらかったことは、睡眠時間を削って指導案と呼ばれる授業のシナリオを書いたことです。当時は正直、なぜこんなことまでして授業をしなければいけないのだろうか、と疑問を持っていました。しかし、今となっては厳しく指導して下さった指導教官には大変感謝しています。

天気予報の放送台本は、まさに授業の指導案です。どういうことかということ、「導入」、「本題」、「まとめ」という授業のシナリオが、短い時間に放送される天気予報でも同じです。導入では、視聴者に興味を持っていただくような身近な話から入り、結論を先にいうことで何を伝えたいかを明確にします。本題では、いつ、どこで、どんな現象が、どのぐらい、どうしてなのかを意識して最も時間を割いて放送します。最後に、まとめでは、耳に残るようなコメントで念を押します。つまりは、人に伝えるときのわかりやすさの基本はすべて同じ法則だということです。教育実習で指導案を書いて授業をしたことで、この基本を学ばせていただきました。

二つ目に役に立ったことは気象観測です。気候学のゼミでは論文の作成のために気象観測をしました。観測とは実際に現地へ行って見て感じ取ることです。気象キャスターをしているとついつい机上の論理だけで物事を考えてしまいがちです。ですから、視聴者との感覚とズレが生じて説得力の無い放送となってしまうことがあります。そこで今でも重要視しているのは、実際の空の様子、

風の感覚、街の声です。実際に見て感じたことに勝るものはないことを、大学時代の観測で学びました。

観測でもう一つ学んだことは、観測値と理論値とは一致しないこともあり、教科書には無い事実があるのを知ったことです。たとえば、高気圧に覆われているのに雨が降ることもあるというのは教科書には書いてありません。しかし、自然が相手の天気予報ではイレギュラーな現象とも仲良くお付き合いしなければなりませんから、この経験があることで考え方に幅ができました。

夢

次の新たな夢があります。それは、質の高い気象予報士を育成し、活躍の場を拡大することです。気象予報士の資格を持っていても、TVやラジオ以外の仕事になかなか結びつかないという現実があります。ですから、気象予報士の質を高めて新たな価値を見だし、アピールすることが必要になってきます。

そこで、私は「NPO法人気象キャスターネットワーク」という気象予報士の団体を作りました。これは教育を柱に活動し、気象予報士の質の向上と活動領域の拡大を図ることを目的としています。現在、環境基金からの助成によって、気象予報士が地球温暖化などの地球環境教育を小中学生対象に行っています。気象予報士の特徴は、自然科学などの理科に強く、わかりやすく伝える能力を持っていることです。この能力を教育の場にも活かすべきだと思います。また、防災という観点から、自治体の防災担当として気象予報士を置くことも検討しなければいけないでしょう。一刻を争う避難勧告の判断をするには、現場に専門家がいなければできません。

今後は、私の憧れだった気象予報士の世界が大きく発展し、次世代を担う子供たちにとっても夢のある世界であり続けるように微力ながら貢献したいと考えています。

国際交流 ～ 学芸大は世界へ ～

今、学芸大は国際交流の面でも注目を集めている。教育学の単科大学でありながら、非常にたくさんの留学生が学んでいるのだ。驚くべきことに、その数ざっと500人。いまや、学内で留学生と出会わない日はない。

大学内では、留学生独自の活動も年々活発になっている。2004年は美術科研究棟の展示ホールで「留学生の書画展」というユニークな展覧会が行われたほか、「小金井祭」では、学生の企画した出店や展示が大好評である。

しかし、留学生がどのような制度によって本学に入学し、どのような目的で学んでいるのかは意外と知られていない。また、姉妹校・提携校も世界各国に広がり30をこえることなど、詳細については知らない方も多いと思う。その現況を報告しよう。



外国人留学生出身別在籍状況

平成16.5.1現在

出身国 (地域)	大学院レベル																				学部レベル										合計		
	大学院生						研究生		教研究生		科目等履修生		特別聴講生		日本語予備教育生		小計		学部生		日研究生		科目等履修生		特別聴講生		小計		合計				
	博士	修士	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計				
中華人民共和国	0	4	26	86	45	60		2	2		1					74	152	14	42		3		1	3	7	17	54	91	205	296	(15)		
大韓民国	1	5	7	31	2	19	1	1					1			11	57		3		5			4	22	4	30	15	87	102	(17)		
台湾		1	1	3		3										1	7							2	1	2	1	3	8	11	(0)		
ドイツ					1											1	0				2			3	2	3	4	4	4	8	(3)		
香港				1		1										0	2							3	0	3	0	5	5	(2)			
アメリカ合衆国				1												0	1			1				1	2	2	2	2	3	5	(2)		
タイ																0	0			1				3	0	4	0	4	4	(1)			
ミャンマー			1					1							2	1	3							0	0	1	3	4	(4)				
フランス			1													1	0			2					2	0	3	0	3	(2)			
ブラジル				2			1									1	2								0	0	1	2	3	(3)			
ウクライナ					2											0	2			1					0	1	0	3	3	(3)			
インドネシア					1		1									0	2								0	0	0	2	2	(2)			
ウズベキスタン							1									0	1			1					1	0	1	1	2	(2)			
フィリピン								2								0	2								0	0	0	2	2	(2)			
ベトナム				1												0	1			1					0	1	0	2	2	(1)			
ルーマニア			1													0	1			1					0	1	0	2	2	(1)			
アルゼンチン							1									1	0								0	0	1	0	1	(1)			
イタリア																0	0								1	0	1	0	1	(0)			
イラン					1											0	1								0	0	0	1	1	(1)			
インド																0	0			1					0	1	0	1	1	(1)			
エル・サルバドル									1							0	1								0	0	0	1	1	(1)			
オーストラリア				1												0	1								0	0	0	1	1	(1)			
カタール			1													1	0								0	0	1	0	1	(1)			
カンボジア			1													1	0								0	0	1	0	1	(1)			
スウェーデン																0	0			1					1	0	1	0	1	(1)			
スリランカ			1													1	0								0	0	1	0	1	(0)			
チリ							1									0	1								0	0	0	1	1	(1)			
トリニダード・トバゴ															1	0	1								0	0	0	1	1	(1)			
パラグアイ							1									1	0								0	0	1	0	1	(1)			
ブルガリア				1												0	1								0	0	0	1	1	(1)			
ベルギー			1													1	0								0	0	1	0	1	(1)			
ポーランド																0	0				1				0	1	0	1	1	(1)			
マレーシア																0	0			1					0	1	0	1	1	(0)			
ミクロネシア						1										0	0			1					0	1	0	1	1	(1)			
モンゴル																0	1								0	0	0	1	1	(0)			
計	1	10	40	128	48	88	4	10	2	0	1	1	0	3	96	240	14	47	5	16	0	1	13	41	32	106	128	345	473	(75)			
	(0)	(3)	(5)	(15)	(2)	(10)	(4)	(10)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)	(11)	(41)	(0)	(2)	(5)	(16)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(5)	(18)	(16)	(59)	(75)			

* ()は国費留学生数で内数

留学生の種類と在学区分

一口に「留学生」といっても、様々な在学形態がある。一般的な区分の仕方は「奨学金の有無」であり、以下のように分けられる。

国費留学生 日本政府から奨学金をもらっている留学生

私費留学生 それ以外の留学生

さらに、在籍身分によって以下のような区分がある。

正規生

- 学部学生
- 大学院生（修士課程）（博士課程）
一般の日本人学生と同様のカリキュラムで学ぶ留学生の在籍区分である。
「教育職員免許法」に基づき、規定単位を履修すれば該当の教員免許状が与えられる。

非正規生

- 研究生
特定のテーマで研究する留学生。在籍期間は半年～1年。
- 特別聴講生（交換留学生）
本学と協定関係のある大学の学部学生・大学院生である。短期間（1年間）在籍できる。
- 科目等履修生
本学の学生以外のもので、授業教科を学習する学生。試験に合格すれば、単位が取得できる。
- 教員研修留学生
世界各国の教員・教育関係機関職員を日本に留学させる制度に基いて留学してきた学生。この制度は本国での教育水準の向上に役立つ幹部要員の育成に協力する目的がある。
- 日本語・日本文化研修留学生
世界各国の大学で日本語・日本文化に関する学習をしているものを留学させる制度によって留学してきた学生。日本語能力の向上に努めると共に、日本事情・日本文化の研修などをする。

■ある留学生の教育実習体験

この秋、一人の留学生が教育実習生として教壇に立った。教育学部B類家庭科3年に在学する中国出身の女子学生李艶君(り・えんくん)さんである。留学生といえども、

通常の学部生と同等の能力が問われる。大学とは異なる現場の空気、生徒の声…。実習を終えた彼女に「忘れられない3週間」を語ってもらった。

—出身はどちらですか。

李：中国の遼陽出身です。日本に来て今年で5年目になります。最初の2年間は日本語学校に通い、それから東京学芸大学に入学しました。

—日本に来た目的と、日本語学校から東京学芸大学に進学することになったきっかけは。

李：日本の会社に興味があり、そこで働けるように日本語を勉強するため日本に来ました。都内の国立大学に行きたいと思ってたところ、日本語学校の先生に学芸大のことを勧められ受験しました。

—生徒たちにとっても珍しい留学生の教育実習の先生でしたが、どんな反応でしたか。

李：私を一番応援してくれたのが、生徒たちだったんです。そのことが、私の不安をどれだけやわらげてくれたことか、計り知れません。最初の1週間は何をやるにもとても不安で、「子どもたちが怖い」と感じていたんですよ。でも、清掃の時間や給食の時間などの授業以外の時間にも生徒たちとふれあうことで、一人ひとりの様子が見えてきて。2週間目に入ってからには本当にあつという間でした。

—何か困ったことはありませんでしたか。

李：一番苦労したことは子供たちの名前を覚えること。ずっと最後のほうまで2人の名前を逆に覚えていたことがあって、何度も謝りました。言葉の面でも困ったことがなかったわけではありません。実は、生徒との話の中で私が知らない言葉が出てきて、「それってどういう意味の言葉ですか？」と私が聞いてしまったり。はじめはびっくりされたけれど、わかりや

すく説明してくれました。そんな一つ一つのやりとりがうれしかったですね。

—担当教科は家庭科でしたが、中国での授業とイメージは違いますか。

李：中国では家庭科に当たる教科はないんです。だから、いざ授業をやろうと思っても、イメージがわきにくくて…それがわたしの不安を高めていたのかも。でも、教育実習の先生・留学生の先生なんて関係なく、生徒たちは授業に対して真剣勝負。そんな生徒を見ていると、「何が何でもやらなくては！」と逆にやる気が出ました。

—生徒たちには、どんなことを教えましたか。

李：今回担当した単元は、消費者教育の部分でした。インターネットでの買い物など新しい販売方式が増えてきていて、生徒たちの身近に潜む危険も増えています。そんなことを、事例を交えながら指導しました。ロールプレイの授業などがたいへん盛り上がり、生徒たちに好評でしたね。うれしかったです。

—教育実習を振り返ってみての感想を。

李：日本に来たときには、今の私を想像もできなかった。この大学に来て、教育実習ができて本当によかったと思う。この経験は、きっと一生忘れないでしょう。実習の終わりに、生徒たちにメッセージをもらって、涙が出てきました。そして、ある生徒にこう言われたんです。「先生はいちばん頼りなかったけど、いちばん一生懸命でした。いちばん大切なものを教えてもらいました」って。

(インタビュー・橋本英明)

❖ — 交換留学生 体験レポート —

トリア大学(ドイツ)から

2003年10月～2004年9月

去年のこの時期、私はまだ南西ドイツの自分の家にいた。今の東京の蒸し暑い日々とはまるで違うその夏、私は一生態命頑張って明治維新や平安時代の文化、昭和時代の文学についてのすべてを勉強しようとしていた。なぜならば、私のトリア大学の日本学科では留学する前に必ず中間試験を受けなくてはならないからである。ご覧の通り、私は合格した。今日まで、私は清少納言の枕草子に描写されているかき氷の味や、或いは尊皇攘夷と薩摩藩の関係について誰かに聞かれたことはないが、それでもやはりあの時努力して良かったと思う。

平成15年の10月成田空港への飛行機に乗ったとき、私は不安を抱いていた。もちろん、トリア大学の先輩たちや日本人の留学生から日本での生活についてはたくさん聞いたことがあった。しかし正直を言うと、世界一大きな街である東京で一人、本当に大丈夫だろうかと私には自信がなかった。幸いなことに、私は何ら問題もなくあっという間にこの都市に慣れていった。

学芸大学の授業に慣れていくのも同様に早かった。そして留学生対象の講座のおかげで、私の日本語はすいぶん上達した。一方、教育学部の言語学の演習にも挑戦してみたが、最初の数週間は先生が話していることを理解するのがとても難しかった。専門用語の嵐に巻き込まれるような感じがして、45分間も集中することはとても出来なかった。さらに、その授業では3、4人で皆の前で文法的な問題について発表することがあった。私はそれは絶対出来ないと思い、物凄く緊張したが、一緒に発表する日本人の学生が手伝ってくれたし、結局その授業はとてもいい経験になった。

当然のことながら、海外で学ぶということは、大学の時間表に書いてあるそれぞれの講座だけが勉強ではない。テレビのCMにおける駄洒落や、外国の映画についている日本語の字幕、和食の本に載っているレシピなど、このようなもの全てが勉強になっていく。色々な国から来た友達との会話や、寝るときに見る夢もすべて日本語だ。

特別聴講生 ランブレヒト・マティアス



もう9ヶ月ここに住んでいる私は、もはや「日本語を勉強している」ではなく、「日本語で生きている」と言えるようになった。

最近私はカレンダーの日付を見る度に、多少切ない気持ちになってしまうことがよくある。日本にいる時間は残り僅かなので、その分この短期留学の間にしてきた思い出が次々と浮かんでくる。昼休みにむさしのホールの前で演奏する学生バンドや留学生の友達とのペ・ヨンジュンについての馬鹿話のような小さな事とも、もうお別れだ。それは私にとってとても寂しいことだ。私はドイツに帰るとき、恐らく二種類の涙を流すかもしれない。一つは、愛してきたこの全てから別れる悲しみの涙、そしてもう一つはこの素晴らしい留学の機会を与えてもらった喜びの涙だ。日本への留学を可能にしてくれた東京学芸大学とトリア大学の日本学科に心から感謝している。

私にとって、この一年間の短期留学は本当に最高の思い出である。違う国に行って、長い間暮らすことを決心するほど重要な決定はあまりないだろう。異文化の国、あるいは自分の母語が通じない国で困ることは確かにあるかもしれないが、それは実際に挑戦してみないとわからないと思う。知らないことに対してびくびくするよりも、心を開いてチャレンジしてみるそのことは何より大切だと思う。



富士山旅行にて

ヨーテボリ大学(スウェーデン)へ
2003年2月~2004年1月

N類総合社会システム専攻4年 芦田 きく子



スウェーデンに留学したというと、必ずといっていいほど、「スウェーデンって何語ですか?」「福祉の勉強に行くのです?」「なんでまたスウェーデンに??」という質問をされる。きっかけは人それぞれだが、私の場合は大学1年生の夏休みに1ヵ月スウェーデンにホームステイをした時に、スウェーデンの社会制度に興味を持つようになったのがきっかけである。中東からの移民が多いこと、アフリカやアジアからの養子がいること、自分で時間割を考えて先生がサポートしながら学ぶという小・中学校を訪問したことなどに漠然とした驚きと疑問をもった。その1年後、語学(英語)と異文化社会を学びたいと思い、協定交流留学制度を調べていたところ、偶然にもスウェーデンのヨーテボリ大学と東京学芸大学との間に提携が結ばれたというのを知り、さらに調べると、私の興味関心であるスウェーデンの社会制度及び文化を学ぶコースが留学生対象にあることがわかり、講義も英語で行なわれているということで、スウェーデンに一年間留学してみようと決心した。

私はヨーテボリ大学で、人文学部のScandinavian Social Studies and Cultureを春・秋学期に主専攻とし、他に春はスウェーデン語初級クラス、秋は教育学部で多文化主義の抱える問題とスウェーデンの現状について学ぶクラスを2・3ヶ月ずつ受けた。

スカンジナビアンスタディーズ春学期(1月から6月上旬)に歴史、政治学、社会運動、児童福祉を学び、秋学期に北欧の近代文化、戦後若者文化、北欧文学、スウェーデンの近代演劇作品について学んだ。

どのコースもおもしろかったか、やはり苦勞したことは英語での講義についていくことであった。しかも、留学して3日後から政治学を英語で勉強しなければいけなかったのも、テキストの予習は欠かせなかった。政治用語を覚えるのは大変だったがなんとかついていけるように努力した。論述の筆記試験に合格したときはとてもうれしかった。また、クラスの面白いところは、クラスメイトの出身国や年齢、境遇が本当に様々で、世界全大陸から集まってきた留学生だけでなく、スウェーデンで現役の中学教師をしている男性や、中東からの移民労働者、下は19歳から上は70歳までの幅の広さには驚くばかりだ。スウェーデンのことだけでなく、グループディスカ

ッションでそれぞれの国のことを比較しながら議論したことはとても勉強になった。もちろん日本のこともいろいろと質問されて(ex.日本におけるナショナルアイデンティティって何ですか?という質問には考えさせられた!)答えに困ることもあった。日本のことを改めて考えるよいきっかけにもなった。英語のことに関しては、ここでは外語を母国語とする学生もそうでない学生も同じ留学生であるため、アメリカ人学生の積極的な発言に圧倒され、インドやアフリカの留学生の独特な英語の発言を聞き取るのには苦勞した。また、大学内の講義だけでなく、ストックホルムへ政治学セミナーツアー、保育所見学、自動車のボルボ社見学、小・中学校見学をすることもできて、毎日勉強になることがあり充実した日々を送ることができた。

今、留学を振り返ってみると、様々な人々との出会いから学んだことがほとんどだったといってもいいだろう。学生寮ではスウェーデン人をはじめ、世界各国からの留学生達と親しくなることができ、頻りにディナーパーティを開き、各国の料理を交えて、それぞれの国の社会文化について語り合ったりしたことから新しい価値観を得ることができた。まさに留学は出会いの宝庫だった。

スウェーデン社会を実感し学ぶこと、たくさんの人と出会い、たくさん友達をつくること、手段としての英語を自分のものにする、それに加えて、スウェーデン語に興味を持ち上達できたことから、私の留学生活は100%充実したという自信を今、持っている。それは私の努力だけでなく周りの人たちが温かく見守ってくれたからだ。スウェーデンで出会った人たち及びヨーテボリ大学の方々、この貴重な機会を与えてくれた東京学芸大学、そして何より今回の留学の後押しをし、常に支えてくれた家族に感謝の気持ちをここで伝えたい。Tack!!



スカンジナビアンスタディーズのクラス

世界とつながる — 協定校 —

諸外国の大学との学術や学生の交流を促進するため、本学では31の大学と大学間交流協定を結んでいる。特に学生交流に関する覚書を交わすことにより、毎年一定人数の交流（交換

学生が確保され、また、留学先の学費の免除、宿泊施設の提供などが可能なことから、下表の大学との間で、円滑な短期留学（1年未満）が期待できる。

学生交流協定締結校

協定校	国・地域名	受入学生数	派遣学生数
① 新羅大学校	大韓民国	5	
② 南ソウル大学校	大韓民国	5	
③ 全南大学校	大韓民国	5	
④ 公州大学校	大韓民国	4	
⑤ ソウル市立大学校	大韓民国	5	
⑥ 京畿大学校	大韓民国	2	
⑦ ソウル教育大学校	大韓民国	1	3
⑧ 北京師範大学	中華人民共和国	2	1
⑨ 東北師範大学	中華人民共和国		
⑩ 蘇州大学	中華人民共和国		1
⑪ 香港中文大学	中華人民共和国	3	1
⑫ 華東師範大学	中華人民共和国	3	1
⑬ 広西師範大学	中華人民共和国	5	
⑭ 上海師範大学	中華人民共和国		
⑮ 台湾大学	台湾	3	
⑯ タマサート大学	タイ王国	1	
⑰ シラパコーン大学	タイ王国	2	
⑱ キャンベラ大学	オーストラリア		
⑲ シドニー大学	オーストラリア	2	
⑳ カーセジ大学	アメリカ合衆国	2	2
㉑ ボールステイト大学	アメリカ合衆国	1	5
㉒ ハワイ大学ヒロ校	アメリカ合衆国		
㉓ トリア大学第Ⅱ学部	ドイツ連邦共和国	5	
㉔ ハイデルベルク大学	ドイツ連邦共和国	2	3
㉕ 国立東洋言語文化研究院	フランス共和国		
㉖ ヨテボリ大学	スウェーデン王国		1
合計		56	20

(2004年4月1日現在)



■ 芸術 — 世界へ

今年(2004年)4月から、東京学芸大学は国立大学法人という名の「法人」に生まれ変わりました。それに伴って4つの学系(人文社会科学系、総合教育科学系、自然科学系、芸術・スポーツ科学系)に組織変更されました(74ページ参照)。そのうち芸術・スポーツ科学系の「芸術」に視線を向けてみましょう。東京学芸大学の「学芸」の名にふさわしい、その面目躍如たる内容がそこにあるように思えます。

もともと学芸大では美術、音楽、書道など「芸術教育」

の教員を養成する目的で、美術科、音楽科・・・などが設けられたものです。それが16年前の1988(昭和63)年に、いわゆる教養系(通称・ゼロ免。教員免許の取得を卒業要件としないコース)が設置されたことによって、芸術分野の教育内容が大きく変貌したように見えます。もちろん芸術教育に携わる優れた教員を養成する目的はいささかも揺らいではおりませんが、教員養成目的以外の分野でも業績を上げつつあります。その実態を報告してもらいます。

■ 「美術科」

ちょっと複雑ですが、いわゆる美術科の概要を説明します。最初にお断りすると、現在は「美術科」と称する科は存在しません。前記のように今年4月から「芸術・スポーツ科学系」という学系組織になり、そのもとに「音楽・演劇講座」、「美術・書道講座」、「健康・スポーツ科学講座」、「養護教育講座」の4つの講座があります。「美術・書道講座」は、「美術科教育学分野」、「美術分野」、「書道分野」の3つの「分野」によって構成されています。

これを学生の専攻の側面から見ると3つの「類」に分かれるのです。「A類」「B類」「G類」です。

■ 教育系

初等教育教員養成課程美術専修 (A類美術)

21世紀にふさわしい小学校教員の養成をめざして、新たな授業やカリキュラムが用意されています。プロジェクト学習群や情報処理を含む教職基礎の科目をとおして、今日的な教育問題に対応できる教師像を探り、幅広い勉学ができるようになります。美術専攻においては、表現教育・造形教育・鑑賞教育の一つを選択し、得意分野をいかす教師実践の基礎力を身に付けます。これらの成果は、制作と論文の両面から集約し、卒業制作として発表することになります。

中等教育教員養成課程美術専攻 (B類美術)

美術専攻は中等教育(中校や高校、中高一貫校など)の美術や工芸を担当できる教員養成をめざし、平成12年度に開設されました。この専攻には21世紀の新しい学習課題や形態に応えるために、芸術や自然、人間、社会をみすえた美術表現や複合的な表現、伝統工芸から映像メディアによる表現まで、豊富で多様な授業が用意されています。美術専攻の選択科目だけでも50科目を越え、専門的に集中的に深めたり幅広く研究することができます。

■ 教養系

芸術文化課程美術専攻 (G類美術)

絵画・彫刻・デザイン・工芸・芸術学の5つの分野が置かれていますが、1~2学年でこれらを一通り履修するシステムを持つので、将来のどのような作品作りにも対応できる基礎表現力を体得できます。卒業後の多様な進路を想定した専門性の高い講義科目は、美術科独自のものから、教育系大学としての全学の各分野が開講するものまで幅広く活用でき、選択の方法によって、各自が既存美大にはない、独自の専門性を構築することができます。

「美術科棟」案内

美術科棟には「美術科教育学分野」、「美術分野」、「書道分野」、「技術分野」の一部が置かれているのは以前と変わりませんが、2000（平成12）年の大改修で、堅牢で美しい合金による外装を施した校舎に生まれ変わりました。校舎の基本構造は以前からの三階建て／H型であることに変化はありませんが、旧美術科棟との外観上の大きな変更として美術科棟正面入り口（通称軽井沢付近）に、新たにガラス張り外観の多目的スペースを1階～3階まで増設したので、その内容を報告しましょう。

1階の「ギャラリー」と「アクティビティ・ホール」と呼ばれる多目的教室は、美術科、書道科の学生を中心に、全学の学生たちの作品の展示会や制作や論文等の発表会会場として、また夏期には公開講座や集中講義に活用されています。

ギャラリーの利用運営状況は開始2年目からほぼ100%近くになり盛況です。ここ1年間で開催された主な展示会・発表会の内容を挙げてみますと、

- 教育環境や学校環境において、身体的障害を持つ人々や、幼児・老人まで誰でもが利用しやすい道具や教具を企画・プレゼンテーションした「ユニバーサル展」、
 - 精神に障害を持つ人々が絵を描く事で癒され、安定した日常活動を取り戻す過程と状況報告をおこなった「アートセラピー展」、
 - 本大学美術科卒業生を中心に美術教育の現場での研究報告・発表の場として開催された「美術教育フォーラム」、
 - 現在の中国美術大学の状況を留学生により提示する「中国・魯迅美術学院展」、
 - 本学美術科による手作業の重要性と芸術性・実用性の重要性を伝える「工芸の基礎：展」、
 - 日本、中国、韓国の美術科大学院生が「教材とデザイン」について各国の教育状況を背景に制作展示した「三道為知（サンドイッチ）・展」など、
- テーマを見ると、学芸大学ならではの特徴とも言える「教育」と「芸術活動」の結びつきの研究結果をプレゼンテーションするものとして話題となり、新聞や雑誌などにも紹介される事も多くなりましたので、ご覧になられた方もいらっしゃると思います。



美術・書道講座の研究棟

2階は美術科を含めて全学で利用可能な「多目的研究室」として用意されています。1年を1単位期間として研究目的を提出し、認められた分野でこの空間を研究室として利用できるようになっています。平成16年現在は、美術科デザイン研究室の大学院生が研究活動を行う現場として利用しています。

3階は「美術科図書室」として利用されています。以前の美術科図書室は1階にありましたが、3階に移動し明るく静粛な「美術科図書閲覧室」を併設したことで生まれ変わった感があります。以前は週一の利用のみであった図書室が月金で公開されるようになり、多くの美術科学生が利用する事になりました。

美術科棟の外観上の変更点はもう一つあります。それは屋上に設置された「太陽光発電パネルシステム」です。

以前の屋上には、染色作業での水洗い用に大きなコンクリート製の流しが何基か置かれていましたがこれが撤去され、美術科棟の屋上いっばいに青光りする太陽光発電パネルが南の空を向いて並んでいます。そのため安全管理が厳しくなり、屋上には上がる事ができなくなりました。学芸大美術科が立体風で有名だった頃を覚えていらっしゃる方々は、屋上からの風揚げが懐かしいかもしれません。

毎年11月に開催される小金井祭では「ホームカミングデー」というイベントが組み入れられ、卒業生の方々に現在の学芸大を見ていただくという日があります。また、美術科ならではの「卒業制作展」も毎年1月末から2月初旬の間に開催されます。ちょっと大学に行く機会が無かった方も足を運んでいただければと思います。



美術科の情報と各研究室情報（一部製作中）を下記ホームページでご覧になれます。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~bijutsu/>

■「音楽科」

周知のごとく、東京学芸大学も本年4月から法人化され、これまでの枠組みにとらわれない新たな発想や教育・研究が求められています。音楽学科は本学の研究組織の改編にあわせて本年度より新たに音楽・演劇講座という形になりました。欧米では一般的に芸術は、音楽、美術はもとより演劇や、ダンスを交えた総合的なものと捉えられています。この意味では音楽・演劇講座となったことは、国内の大学では特筆されることです。

音楽・演劇講座は、音楽の演奏や音楽理論と音楽教育の実績に加えて、演劇が加わることによってさらなる学際的アプローチがすすめられていくことでしょう。例として、公開講座や本年9月に開かれた音楽・演劇講座が主催した国際交流研究セミナーなど、教員の講演会、シンポジウム、西洋芸術音楽と日本伝統音楽との演奏など

国境や、言葉をこえた活動などの新たな展開も始まりました。今後も音楽・演劇を中心とした新たな芸術及び芸術教育の創造に取り組んでいきたいものです。



音楽科の同窓会が当初、どのように誕生したのか十分には分からないが、現在の会則を見るとその制定は昭和40年とされている。つまり、ほとんど40年に及ぶ歴史を有しているのである。私はこの少し後に入学した訳であるが、当時同窓会の活動を中心になって進めていたのは故星野圭朗氏であった。

研究集会などを計画して、当時としては当然のことながら、星野氏が1枚ずつ宛名を書いてハガキを出すといった地道な活動を進められていた。「卒業したらお手伝いしますよ」と言っていたのは私だった。その通りになった。

当時、音楽科の学生委員会の会長をしていた私は、小金井祭の学生行事として講演会を計画し、協議の末、小泉文夫氏を招くことにした。私どもには謝礼を十分に用意する力はなく、同窓会がこれを負担されたのを思い出す。

その後、歴代の諸兄姉の尽力によって同窓会は充実を遂げてきた。昭和54年に会則の一部改正の記録があるが、この頃から本格的な活動が展開され、数年後、同窓会の生命線とも言うべき会員名簿の整理が進められた。その頃、幹事が集まって、それぞれが山のような封筒の表書きに数

時間、労したのが懐かしい光景として思い出される。時代と共に、住所情報等のデータベース化が進められ、今日では住所不明者のデータ判明率は次第に高まってきている。

様々な取り組みを試みてきているが、原則として年1回の集いを計画し、講演会、研究会、コンサートなどが催されている。この10年余りは音楽科卒業生による「ふれあいコンサート」を6月に実施し、総会と懇親会をこれに組み合わせている。いずこも同じかと思われるが、人を、金を、いかにして集めるかが当面の課題である。とは言え、スタッフの努力と音楽学科の先生方のご理解のお陰で、最近卒業時の音楽科同窓会の終身会費納入がほぼ10割に達するようになってきている。現在、会報の発送先である有効な住所データは2,700名程である。

なお、今後卒業予定者の就職先の確保などに、先輩に当たる同窓生がどのように貢献しうるのかといった課題について展望を得たいと希望している。これは、辟雍会全体にも期待したいものである。

(会長 井口 大)

書道分野

●特別教科教員養成課程から中等教育教員養成課程、芸術文化課程へ

書道分野は、昭和27年、全国に先駆けて設置された特別教科教員養成課程書道専攻を前身とする分野です。昭和63年の教養系の設置により、芸術課程書道専攻が新設され、さらに、平成12年の課程再編からは、中等教育教員養成課程（B類）書道専攻、芸術文化課程（G類）書道専攻として位置づけられ現在にいたっています。

中等教育教員養成課程（B類）書道専攻は、高等学校芸術科書道や中学校国語科（書写）の教員を養成することを主な目的としており、学生は、教員として必要な知識・技能・指導法を中心に、今日的な教育課題にも対応できる能力を身につけるべく勉学に励んでいます。芸術文化課程（G類）書道専攻は、学校教育のみならず、生涯にわたる学習活動の中や、書道に関する様々な分野で指導的な役割を果たし、活躍できる人材の育成を目指しており、学生は書道の実技・理論に加え、関連する専門的知識や技能等について幅広く学んでいます。

各専攻の入学定員は、それぞれ10名で、平成13年度からは推薦入試も実施しています。卒業後の進路は、大学院修士課程美術教育専攻書道教育コース、総合教育開発専攻表現教育コース・芸術教育サブコースへの進学や博士課程への進学のほか、小学校、中学校、高等学校の教員、教育関連企業や一般企業、美術館・博物館の学芸員、研究者、文化財の修復技術者、書道関係の出版社など多岐にわたっています。



●地域・社会との連携をめざして

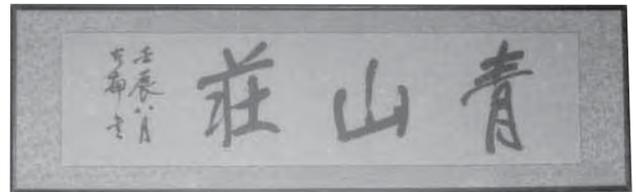
現在、国立市の公立小学校において、学部4年生と大学院生が、教育支援ボランティアとして国語科書写の授業支援に取り組んでいます。また、文部科学省教員養

成学部フレンドシップ事業の一環として、近隣の小学生や附属養護学校の児童・生徒を対象とした「書き初め」支援も行っています。このほか、書道分野所属の教員が講師となつての公開講座も実施し、地域や教育現場との連携協力の成果をあげています。

●国際交流の広がり

来る10月30日から行われる小金井祭では、芸術館2階展示室において、学生の日頃の学習成果を発表する書道展「書道科書作展」が開催されます。本年は、併催企画として「第1回上海師範大学・東京学芸大交流書法展」の名のもと、本学と交流協定を結んでいる中国の上海師範大学の学生と教員の作品が展示されます。皆様のご来観をお待ちしております。

●青山荘の扁額のこと



卒業生の皆様の中には、千葉の岩井海岸にあった海の家「青山荘」に宿泊し、水泳に親しまれた方も多いと思います。老朽化により建物は取り壊されてしまいましたが、部屋に掲げられていた「青山荘」の扁額が、芸術・スポーツ科学系長の柴田義晴教授のお骨折りにより、50年を経て大学に戻ってきました。筆者は田邊古邨先生、本学書道科の初代主任教授です。現在は、芸術・スポーツ科学系4号館2階の書道実習室の壁上に掲げてありますので、ご来校の折にご覧いただければ幸いです。

●書道科同窓会「硯心会」の動き

去る7月21日から24日まで、銀座・洋協アートホールにて第23硯心会書展が開催されました。本年は特別展示として「山田正平展」を開催しました。また、8月7日・8日の両日には、東京学芸大学書道学科との共催行事「第28回学芸書道全国展」が開催されました。表彰式では、鷲山恭彦学長から東京学芸大学学長賞が授与され、表彰式後には数学者の秋山仁先生による特別講演が行われました。

「学芸の森」＝ その緑はこうして出来上がった — 樹木が語る大学の歴史 —

青々と茂る緑。雄大な枝振りを見せるケヤキ、風格を醸し出すサクラ、天に鉤を突き上げるヒマラヤスギなど、夏に学芸大キャンパスを訪れる人がいたら、森のような緑の洪水にしばし圧倒されることであろう。しかし、これらの木々は大学発足当時にはほとんど無かったものなのである。当時を知る人に「現在の学芸大キャンパスと、大学発足当時の姿で最も異なるものはなにか？」と聞くと、ほぼ全員がこう答える。「とにかく、樹木が多くなりました」と。聞き取り調査と写真などの資料を基に、東京学芸大学の歴史を緑の変遷から概観する。

昭和15年以前

武蔵野の荒涼たる原野であった当地は、米将軍として知られる徳川八代将軍吉宗のいわゆる享保の改革によって、始めて人の暮らす土地となったようである。俗に関東の空っ風と呼ばれる冬のきつい寒気、水の乏しいやせた土壌。内藤新宿以西のいわゆる「多摩」にあって、五日市街道と甲州街道のはざまに存在する段丘上のひたすらに広い荒野であるこの地は、長らく野盗・野伏せりの類いが出没するような地であったと思われる。そんな土地に、玉川上水の分水の開通とそれに伴う新田開発の



昭和12年(1837)の小金井市(当時は小金井町)北西部(写真で見るとわたしたちのまち小金井付録(1988)より)。現在の東京学芸大学キャンパスは枠内にほぼ位置する。

いたかは軍事機密も手伝って、未だ明らかでない点も多いが、昭和年代に在学した者であれば誰もが知る、プール門の外にあったプールは上陸艇の研究プールであったと言われ、戦前の面影を知ることのできる施設であった（現在では埋め立てられ更地となっている）。また、当時の軍施設であった木造の建物はそのまま講義棟、事務棟などに受け継がれ、サークル長屋としても平成の初期にいたるまで使われ続けた事は記憶に新しい。

昭和15年、地主が役場に呼ばれ、もちろん軍の意向に逆らうべくもなく、わずか30分で第一次買収交渉が行われたという。いわれるまま順番に印鑑を押すだけでしかなかったのだから、戦時下とはいえ、地主の方々には断腸の思いがあったであろう。さらに昭和17年の第二次買収により研究所の敷地は広がり、南西は現在の東京学芸大、北は現在の文化女子大、東は小金井市の上水公園まで広げられた。実に現在の小金井キャンパスの4倍以上の面積である。施設はコンクリートの万年塀で囲まれたため、現在の新小金井街道などの生活道路は分断され、近隣住民は遠路を迂回する生活を余儀なくされたという。

このような時代であったため、研究所内部の様子を伺える資料は残念ながら見あたらないが、戦後の航空写真（昭和22年）によって、研究所の中心施設が存在した現学芸大学の敷地の部分には、あまり樹木がなかった事が見て取れるのである。前ページ写真右上の方に見える黒い四角がプールで、そこから延びるプール門通り、北のサレジオ通り、南に東門通りが無人の野を切り開くがごとく造成されている。学芸大正門から右手にのびる道路は、今では附属中脇で直角に曲るのみだが、もともとは小中学校の敷地を貫通し、現、国際交流会館前から東側へ延びる、道幅の広い直線道路とつながっていた。撮影されている木々は、研究所以前からあるプール門通りと現体育館の間にあるかつての屋敷林の木と、プール門周辺から現在の附属幼稚園の場所に育つ高木のアカマツ、および研究所施設に附随して植えられたと思われるゴウウマツ、ヒノキなどわずかの中低木のみである。つまり、学芸大発足当時のキャンパスには樹木が少なかったのだ。ちなみに、当時「行幸道路」と呼ばれた正門前の道路のサクラ並木は、昭和17年の第二次買収のときに植樹されたものである（もちろん現在のような大木ではな



昭和28年（1953）、東門脇にあった給水塔から撮影された学芸大。中央の二階建ては当時の本館（現在、50mプールがある）。その後ろにかつて屋敷林だったケヤキ（落葉している）が見える。手前3棟の長屋は兵舎を利用した教室（現在、多目的ゾーンとなっている）。教室の周りに植えられたヒノキは、まだ屋根より低い。教室左手前の空き地は現バレーボールコート。総合グラウンドはまだ無い。



左：昭和28年(1953)のまだトラックが無い頃のグラウンドから南西方向を見た写真。正面の建物は戦後新築された2階建て木造モルタル作りの図書館。図書館の前に斜めに伸びるクロマツが、昔に稲荷があった場所に生えていたもの。中央左には農家の屋敷林であった常緑樹のシラカシと落葉樹のケヤキが見える。

右：現在の同じ場所。同じ角度から撮影。右側の高木が昔からのクロマツ。多くの樹木が成長した。

いが)。また、現芸術・スポーツ科学系研究棟5号館裏のプール門通りに不自然にはり出したクロマツがあり、昔から首吊り松とか、呪いがあると噂されていた。しかし、これはかつてこの地に稲荷があり、その御神木のような扱いを受けていた木であったとのこと。そんな経緯で無理に切り倒さずに今日まで残されたい。

東京学芸大学開学(昭和24年)前後

昭和21年(1946)5月7日、空襲により消失した東京第二師範学校が豊島から小金井へと移転を決定する。当初の割り当て地は、現在のものと同く大きく東側にずれていた。南北はほとんど変わらないが、東は現在の市立本町小学校の西側の通りまであり、逆に西側は附属中学校・大学体育館の西側の通りまでであった。しかし、現在の東門以東の土地は失火によりわずか1年で没収されてしまう。その後、東京学芸大学が発足し、大学キャンパスを小金井一カ所に統合することになったが、これだけの土地では面積が足りない。そこで現在の西側半分の土地を取得することになった。しかし、そこには戦後の払い下げや混乱に乗じた居住者がおり、工場までもが存在していたので、取得には多大な苦労があったようだ。昭和27年ごろより取得にのりだし、完了まで6年近くの月日がかかっているが、この当たりの経緯は東京学芸大学「二十年史」「五十年史」に詳しいので参照されたい。

この時期、陸軍技術研究所を引き継いだ構内を整備し

ていたのは、昭和22年に組織された復興部であったが、大規模な工事は望むべくもなく、基本的には教育研究環境を整えるのに精一杯であったと思われる。何より、西側の土地を確保する事が大問題であった。しかし、若干残された写真によると、新しく植えたと考えられる低木なども見受けられるので、多少の緑化整備はなされていたようである。

昭和29年以降

西側半分の土地が正式に認められ、大学用地がほぼ確定した昭和29年より大規模な環境整備が始まる。学内全体のレイアウトが計画され、既存道路を活かした形で学内のメインストリートが整備される。建物の配置も大きく変更された。それに伴い、大学が建てた最初の鉄筋コンクリート建築物である自然科学系研究棟が29年から37年まで毎年少しずつ建設された。また、軍施設であった多くの木造建築物は「引き家」といって、ころを建物の下において、ゆっくりと引いて移動されたのである。この時代、建物の整備



昭和28年(1953)の正門。後方に樹木は見えない。



左：昭和41年(1966)撮影のプール門通り。プール門から南西を望む。木造の建物は兵舎を利用した教室。植えられたばかりのクロマツ並木がある。



右：現在の同所。左手の特殊教育研究施設右側に接するサクラは、右写真中央わずか右に写っているものと同じ木である。クロマツが大きく成長した。今日、学内に電信柱はなくなった。

下：昭和41年(1966)の大学全景。東門から少し入った右手に給水塔が見え、その右側には運動場が広がる。この場所に現在は附属幼稚園が建っているが、当時の附属幼稚園は写真左下(附属小学校の手前)の場所にあった。中央右手の日本部棟の北側には25mプールが見えるが50mプールは未だない(後に日本部棟跡地に建設される)。現在の図書館や本部棟が建つ土地は未だ更地であった。



に追従して周辺の中低木が新たに植栽され、あるいは研究所時代のマツなどが移植されて、ゆるやかに学内緑化整備は進行した。昭和33年頃には、現在の本部事務局周辺から保健管理センターにいたる道沿いにサクラの苗が植えられている。

かつてのグラウンドは、附属小学校の場所に存在していた。それが、昭和33年(1958)に現在の場所に移転される。この事は、学芸大のレイアウトを決める上で重要な出来事であった。なぜならば、この時期にほぼ現在の配置による整備計画が固まっていた事を意味するからであり、ほぼ全体像の見通しができたこの頃から、学内の緑化整備は本格的にスタートできたのである。ちなみに、この移転によって北門と北門通りが付け加えられ

た。研究所時代には存在しなかった道である。さらに後年、総合グラウンドはオリンピックのために作られた国立競技場に準じて、改装がくわえられた。400メートルトラックにラグビーのポールがそびえる様はまさしくその通りである。

正門、東門、プール門の新設から始まった緑化整備

昭和38年(1963)、現在の緑あふれる学芸大キャンパスの姿はこの時から始まったと言っても過言ではない。なぜならば、学内を象徴し、また武蔵野の象徴でもあるケヤキの大規模な植栽が開始されたからである。

まず正門であるが、それまでは石造りの門柱があるだ

けであったものに側壁を付加し、現在の形に変更された。これに伴い、翌年から正門内側の中央庭園（噴水池と周辺）の造園が始まる。ここで始めて、外部からきた人には極めて体裁のよろしい学芸大のケヤキの美林が形作られる。40年前の幼苗が、現在の圧倒的な存在感をしめす大木へと成長した事は驚嘆せずにはいられない。

そして、東門とプール門の新設である。こちらの方が正門よりもいっそう学内の景観をさめる意味で大きな事であったかもしれない。なぜなら、両門の新設は、それぞれ学内を東西に走る幹線道路、東門通り・プール門通りの整備をともなっていたからである。特に東門通りは、附属小中学校の整備と歩調を合わせて、両側にケヤキが

植栽される。わざわざ筑波近郊の種苗業者に足を運び、枝振りのよいものを選んだと、当時この事業に尽力した元技官は語る。現在の雄大なケヤキ並木の始まりである。プール門通りには、クロマツが選択された。ケヤキとは異なる常緑樹をとということも考えられたいが、例の「伐れないマツ」があり、プール門周辺には戦前からのアカマツ高木が残存している事などもあって、マツに落ち着いたのであろう。さらに、プール門通りにつながる北門通りには両側にヤナギが植えられ、ほぼすべての主要道路に平行した植栽は完了する。学内に存在する大きな並木はこの時期に造成されたものであり、「学芸の森」の基礎はここに誕生した。



左：昭和42年（1967）附属中学校前の東門通りから西側を望む。ケヤキはまだ低く、冬季で落葉していることもあり、図書館（現、人文社会科学系研究棟2号館）の塔がよく見える。道路は簡易舗装である。中央奥に見えるのは講義棟4号館（現在はS棟に建て替えられている）。

右：現在の同所から同じ角度で撮影。木々は生長し空を覆うため、建物を撮影することは困難である。

下：ケヤキが植えられた当初、噴水池のある中央庭園は陽のあたる明るい場所であった。昭和43年（1968）。

昭和43年(1968)、自然館(現自然科学系研究棟1号館)屋上から見た建設中の現本部棟。



万葉植物園、その他、多様な植栽

並木や中央庭園を中心とする大規模な植栽事業が完了するとともに、個々のデザインされた小規模な植栽が始まる。昭和40年(1965)に着手した万葉植物園や、自然科学系研究棟1号館南面の植樹帯などがその例である。万葉植物園には多様な樹種が植えられ、画一的な並木路とは一線を画し、庭園風な趣向が凝らされた。

現在学内には、200を超える樹木が存在しているが、それはこの時期に施設課技官として任にあたった、田代良一氏の影響が少なくない。氏は東京帝国大学附属農業教員養成所を卒業し、昭和26年本学講師となるが、37

年に施設課専門職員に転身する。文部教官から文部技官に籍を移動してまで学内の造園計画にこだわりを持ち、多種多様な樹木を各所に配置していったらしい。ひときわ天を圧するヒマラヤスギ、涼やかな香りをたたえるジンチョウゲの茂み。現在では減少してしまっただが、そこかしこの小庭のような設計の中に散見する珍しい植物には、氏の思いが込められているに違いない。こうして、並木などの大きな植栽から小さな植栽へ、全体から個々へと変化するのが昭和40年代であった。それは、着々と完成し増えてゆく施設とともにあり、学芸大全体が細部を充実させてゆく過程でもあった。



昭和43年(1968)頃の万葉池周辺。芝生の周りには、万葉集に出てくるさまざまな植物が植えられた。



今日の万葉池周辺。生長した木々の枝葉が鬱そうと繁り、夏には心地よい木陰を作りだす。

繁栄、そして未来へ

学内の施設は研究棟など主だったものは昭和50年（1975）頃に完成した。それに追従して、学内の造園事業もほぼ完成となる。その後、特殊な施設の追加や既存施設の増改築にともなう伐採、移植、植栽が行われているが、それらはマイナーチェンジであり、実質は維持管理に近い状態となった。約4500本の中高木と数え切れない低木からなる10万坪弱の庭園は、みごとに繁栄を遂げたのである。

木は生長する。当たり前のことであるが、今回の取材を通じ改めて感じたことである。そして、木々からほとばしる生命の息吹の中、大学も今日まで発展を続けたのだ。今後は、これら高木の老朽化や寿命に対する管理も重要になると思われるが、全体の調和を維持しつつ豊かな自然と文化の薫る「学芸の森」を、世代を超えて育てていきたいものである。

今回の企画に関して、東京学芸大学元職員の池田喜三郎氏、現職員の、山本省三氏、岸野利久氏、伊藤昭二氏、山本春信氏に協力を頂いた。また、地元の荒畑文夫氏には興味深い話を多く語っていただいた。紙面の都合上、その多くを書く事ができず申し訳ない限りである。取材に当たり快く時間を作って頂いた諸兄に感謝の意を表したい。

企画：真山茂樹（1978年：理科卒）

協力：大塚和広（1986年：社会科卒）

和55年(1980)撮影の大学全景。この年の春、大学唯一の中層ビルである人文社会科学系研究棟1号館(通称サンシャイン)が竣工した。当時、野球場、陸上競技場、農場の周りには木造平屋がサークル長屋、研究室、管理棟、官舎、倉庫として残っていた。



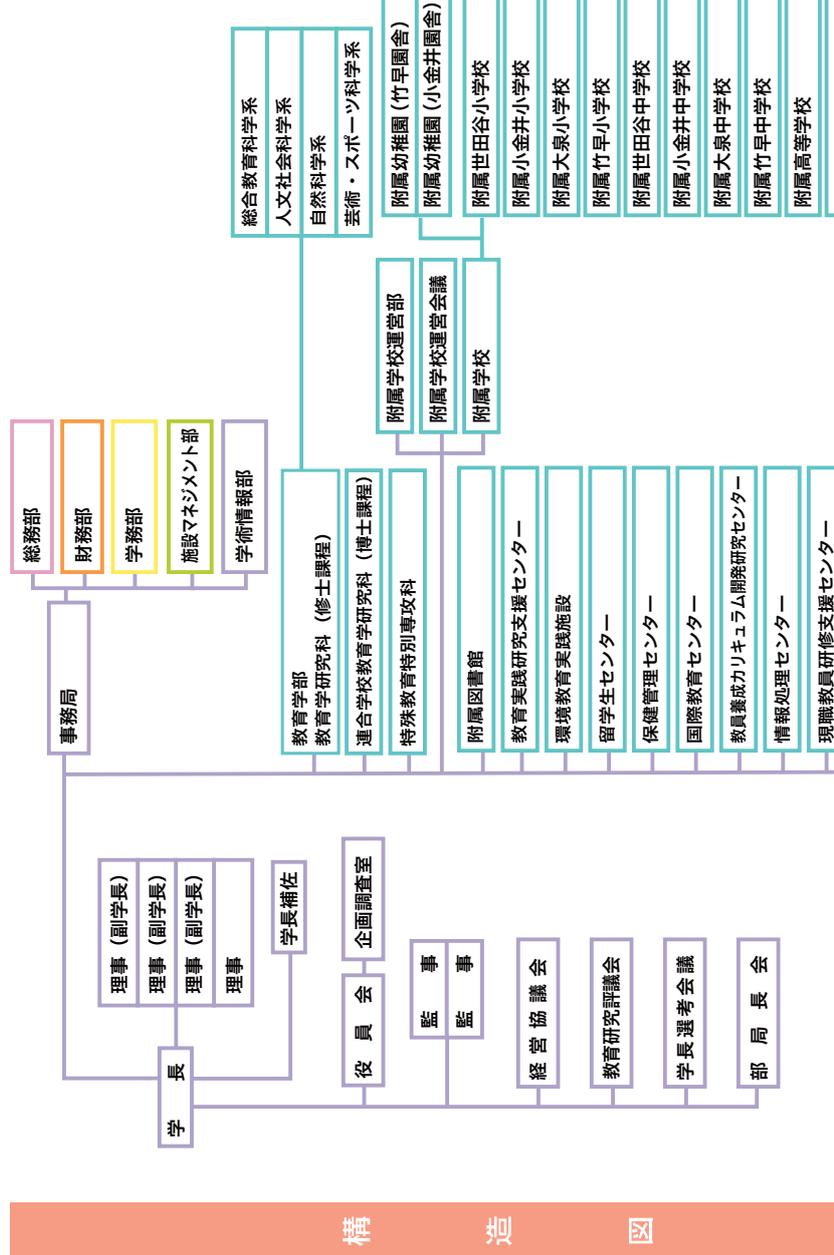
国立大学法人東京学芸大学へ

法人化後の機構

法人となった後も大きな変化は運営組織である。最高審議機関は教授会に代わって6名の外部委員と学長、3名の副学長、事務局長で構成される「経営協議会委員会」となった。ここでは経営面に関して審議され、教育・研究面に関しては学長、副学長および4人の学系長（人文社会科学系、総合教育科学系、自然科学系、芸術・スポーツ科学系）、附属図書館長、大学院連合学校教育学研究所長、学内の教員8名、附属学校教員の2名、事務局長で構成される「教育研

究評議会」で審議されるようになった。さらに中期目標・計画や予算・決算などの重要事項は「役員会」（学長、理事、監事）で審議され、最終的には学長が意志決定をするようになった。教授会は各学系ごとに月1回開催し、人事、教育等に関する審議が行われるようになった。教員組織の単位である「学科」、「研究室」も「講座」、「分野」に名称変更された。

平成16年5月時点での職員数は、大学教員が367名（男306名 女61名）、附属学校教諭が346名（男244名 女102名）、事務・技術系職員232名（男159名 女73名）である。



<学部の組織>

教育学部		専攻・選修
教 育 系	初等教育教員養成課程 (A類)	選修 国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、家庭、学校教育、幼稚園
	中等教育教員養成課程 (B類)	専攻 国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、家庭、技術、英語、書道
	障害児教育教員養成課程 (C類)	専攻 聴覚障害児教育、養護学校教育、言語障害児教育
	生涯学習課程 (L類)	専攻 学習社会文化、生涯スポーツ
教 養 系	人間福祉課程 (N類)	専攻 カウンセリング、総合社会システム
	国際理解教育課程 (K類)	専攻 国際教育、多言語多文化、日本語教育、日本研究、アジア研究、欧米研究
	環境教育課程 (F類)	専攻 環境教育、自然環境科学、文化財科学
	情報教育課程 (J類)	専攻 情報教育
	芸術文化課程 (G類)	専攻 音楽、美術、書道、表現コミュニケーション

<教育学研究科（修士課程）の構造>

修士課程は現職教員等の便宜をはかって、多様な履修方法が整備されている。総合教育開発専攻を除く14専攻では昼間と夜間、双方に授業を開講し、総合教育開発専攻の授業はすべて夜間および土曜日に開講し、現職者を中心に教育している。学部卒の学生にとっても現職者とともに学ぶことは、実践的、多面的な情報が得られるなど有意義であり、今後ますます現職者の入学を期待したいところであるが、いざとなると時間的負担、能力面での不安なども多いようである。大卒では毎年6月初めに大学院説明会を開催し、個別に相談が受けられる機会も設けている。

専 攻	専 攻
学校教育専攻	理科教育専攻
学校心理専攻	技術教育専攻
特別支援教育専攻	音楽教育専攻
家政教育専攻	美術教育専攻
国語教育専攻	保健体育専攻
英語教育専攻	養護教育専攻（注）
社会科学教育専攻	総合教育開発専攻
数学教育専攻	

（注）平成17年度設置に向けて計画

主な就職先 (学部)

業種	主な就職先企業名等
新聞・出版・印刷	朝日新聞社 学習研究社 光文書院 ベネッセコーポレーション 光村図書出版 東京書籍 ぎょうせい 中央出版
情報・ソフトウェア	富士通 KDDIテレマーケティング ソニー NEC情報システムズ NTTコミュニケーションズ 日本情報産業 日立INSソフトウェア NTTデータシステム ダイクボウ情報システム
旅行・サービス	エイチ・アイ・エス 近畿日本ツーリスト ワーナー・ミュージック リクルート オリエンタルランド 吉本興業 クラブツーリズム 鹿島アントラーズFC (選手) 東京ドーム
製造	サントリー 資生堂 ちふれ化粧品 大鵬薬品 大塚製薬 中外製薬 田辺製薬 明屋外食事業 不二家 ビック東海 大塚商会 アデダスジャパン エーザイ ハイモ ファンケル 日東紡 日本メナード化粧品 西川産業 本田技研工業 片倉工業 内田洋行 積本興業 日立製作所 日本ビクター クボタ
卸・小売業	セブンイレブンジャパン イトーキ 高島屋 松坂屋 日本ケンタッキーフライドチキン ローソン
金融・保険	メリリンチ日本証券 大和証券 住友信託銀行 日本政策投資銀行 明治生命
教育	市進学院 河合塾 早稲田アカデミー ヤマハ音楽教室 カワイ音楽教室 コナミスポーツ メガロス 東進 日本公文教育研究会 ベネッセコーポレーション
放送・広告	電通 テレビ東京 愛媛朝日テレビ 佐賀テレビ 広島テレビ放送 北海道文化放送 アド・エヌ
運輸・通信	日本航空 日本通運 東日本旅客鉄道 西日本旅客鉄道 ヤマト運輸 ジャルスカイサービス 小田急電鉄 JALプラザ 新東京旅客サービス 佐川急便
建設・不動産	積水ハウス コスモスライフ 日建設計 三井のリハウス 住友倉庫 大東建託 東急リバブル
団体・特殊法人	横浜芸術文化振興会 ヤマハ音楽振興会 国土地理協会 杉並区スポーツ振興財団 小平文化振興財団 日本郵政公社 明治安田厚生事業団 中小企業基盤整備機構
公務員	経済産業省 厚生労働省 仙台家庭裁判所 横浜市役所 世田谷区役所 愛媛県警 小平市役所 埼玉県庁 岡山県庁 広島市役所 山形県庁 栃木県庁 さいたま市 東村山市役所

部・サークル活動

<文化系>

サークル名	人数
NEPTUNE	65
旅行クラブ	30
キャッチボールサークルCats	18
盲検探検部	11
山岳サークルアンナブルナ	5
熱気球サークルむくむく	4
音楽友の会	80
アカベラサークルInfini	78
管弦楽団	70
混声合唱団	61
ウィンドアンサンブル	57
モダンフォークソングクラブ	51
ギタークラブ	29
軽音楽部	27
フォークソング愛好会	26
和太鼓サークル絛	25
管弦楽研究団体オストリア	21
雅楽サークル東州	15
さだまさし研究会	5
邦楽サークル白菊会	5
人間教育研究会	29
平和を守る会	6
写真研究部	24
漫画研究部	24
美術研究部	16
創作植栽覚醒研究部	4
ESS	21
SCENT	15
ラテンアメリカ研究会	30
キャンパスクルセードフォークライスト	26
CROSS ROAD (旧ヘアライ文化研究会)	16
料理研究会エスニック料理研究部	10
星空サークルシリウス	25
環境サークルEKO	20
ClubWeathts	12
デジタル創作サークルSSET (旧教工研究会)	7
実験教室実践サークル天球儀	6
地域子ども会活動サークルむぎのこ	66
障害児と楽しく遊ぶ会おこりんぼ	62
手話サークルおやゆび姫	42
造形教室たけとんぼ	29
Let's	19
絵本サークルきつねのしっぽ	18



入学式など大学行事でも活躍する和太鼓サークル



浅草サンバカーニバルにも出場
ラテンアメリカ研究会



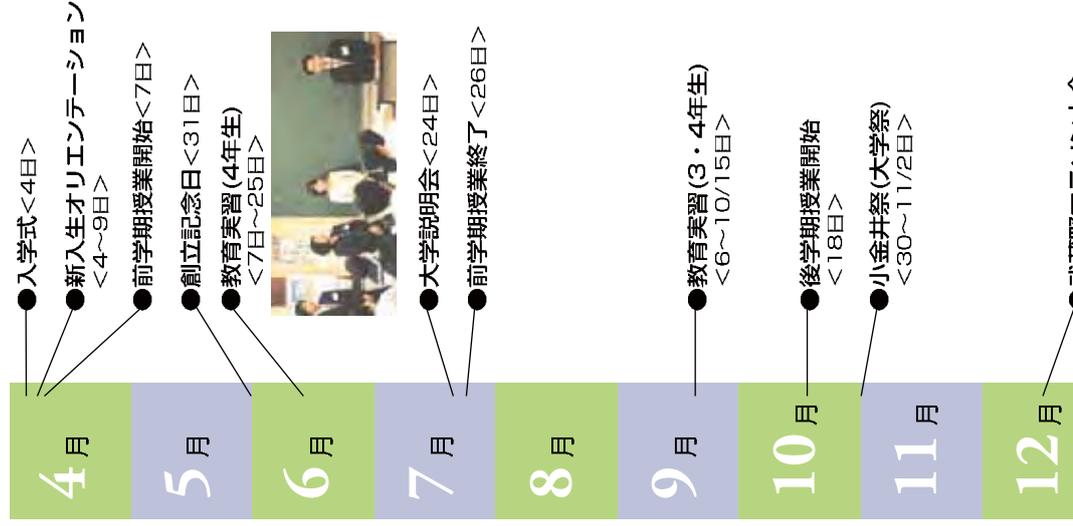
天皇杯にも出場したサッカー部



<体育系>

サークル名	人数
陸上競技部 (男子)	62
陸上競技部 (女子)	47
男子水泳部	12
女子水泳部	5
体操競技部	5
柔道部	20
剣道部	30
弓道部	36
ボクシング部	10
大東流合気武道部	16
琉球古武道本部御殿手研究会	8
空手道部空心会	17
フォークダンス研究部	24
ダンスサークル@fter Beer	91
モダンダンス研究会	5
競技スキー部	4
ワンダーフォーゲル部	19
トライアスロン同好会	11
アルティメットサークルBigApple	29
硬式野球部	36
軟式野球部	33
軟式野球サークルアランドーナツ	28
野球サークル平成ガンネンズ	13
男子ソフトボール部	16
女子ソフトボール部	13
男子硬式野球部	16
女子硬式野球部	13
男女ソフトテニス部	18
硬式テニスサークルダブルフォルト	59
硬式テニスサークルシトロ	19
硬式テニスサークルelf	46
留学生硬式テニス同好会	10
硬式テニスサークルT-CRUISE	73
なかよしテニス愛好会	55
硬式テニス同好会ワンダーランド	48
ソフトテニスサークルなんてね	20
男子バスケ部	16
女子バスケ部	25
バスケットボール愛好会レグルス	60
バスケットボールサークルS.B.C	16
男子バレーボール部	19
女子バレーボール部	8
バレーボールサークルBRAVO!	30
蹴球部	110

キャンパスカレンダー（平成16年度）



小金井祭

大学の学園祭はアカデミックな雰囲気、などということとは既に遠い昔からなくなり、今や模擬店とイベント会場化している感があるが、本学の学園祭は多くの子ども達の来訪と市民との融合が特徴だろう。毎年、11月初旬に開催されているが、平成16年度で52回を迎える。30数名の学部学生で構成される小金井祭実行委員会が中心となって企画・運営がされ、著名人の講演、芸能人のイベント、部・サークルの恒例の催しを初めとして、学生有志の企画のほか、教員を主体とした研究室単位の企画など、全参加団体は180にのぼる。



講義棟前の芝生の周りがメイン会場



野外ステージではダンスやバンド演奏の発表

北から南から

「マスコミOB会」のOBとは？

西村康朗

(1985年技術卒 博報堂)

もう10年ほど前になるだろうか。かつて所属した会社の先輩から突然電話をいただいた。「東京学芸大学マスコミOB会」というものを発足するというのだ。その先輩も東京学芸大学出身者であった。

なんとか時間をやりくりし、銀座の某レストランに行ってみると、約10名ほどの先輩たちがいた。下っ端なのにいきなり遅刻である。しかもほとんどごきれいなスーツを着た紳士たちが待っていた。こちらはフォーマルとは程遠い汚いシャツを着ている。気まずい。うーん、しかし、若い人が少ない。たしかに就職してから、出身大学の話になっても東京学芸大学出身者にはほとんど出会うことはない。

何を話したかあまり覚えていないのだが、要は会食であった。マスコミOB会のOBとは、本来のOLD BOYのほか、「教師にならなかった」という「本道を外れた者」という意味でゴルフのOB（つまりOUT OF BOUNDS）の意味もあるということを知っていた。頻繁にこういう会合があるのかと聞けば、正式な（何か正式かはいまだに不明だが）発足は今日だという。そんな歴史的な現場に私は参加したのだ。

とはいえ、別に何かあるわけではない。公式行事といえば年に一度の集いだけである。その集いもいまだに会食のみである。社会的な貢献も、校歌を歌うような者もない（校歌を知らないし）。ただ食事をして、飲むだけである。つまり、ものすごくゆるい学閥のようなものだ。たしかに何か特別な活動をしようものなら、皆OB会から逃げていくような雰囲気もある。ただひとつの活動とは「マスコミ業に携わる東京学芸大学出身者を発見するように努める」ということだけである。

OUT OF BOUNDSにしても、学芸大出身者探しにしてもやはり東京学芸大学出身者でマスコミ業に身をおく者は少ないことを意味している。しかも、その大半はマスコミを生業としていることをやはり「邪道」だと思っているのだ。たしかに今でこそいろいろなコースが出来たらしいが、少なくとも私が通っていた時代は全員が教員免許を取得し、卒業する教員養成大学であった。教員にならないこと自体がOBだったのだ。まっとうな卒業生ではないという意識が強い。

ところが別にそれが劣等感を生んでいるわけでもない。むしろ自分がやっている仕事を楽しんでいる人はかりである。皆、自分の仕事の話を始めると止まらない。邪道を楽しんでいるようだ。また、ひとたび所属している（もしくは経営している）会社に目をむけると、そこでもやはり学芸大卒という極めて少数の「変わり者」として扱われる。

そんな邪道人生を歩む集団なのだが、このところ東京学芸大学からもマスコミ業に就きたいという学生が非常に増えている。もう42歳になる私のもとにもいまだに多くの学生が「OB訪問したい」と言ってくる。

自分の場合を振り返ると、たまたま大学時代にアルバイトしていた会社が広告制作会社で、広告づくりの楽しさに夢中になっただけなのだが、そんなことでもなければ、マスコミには興味も抱かなかった気がする。それなのに、マスコミ志願者は年々増加している気がする。

では、マスコミOB会は巨大な組織になったか？実はなっていない。多くのマスコミ志願者は実際にはマスコミ業に就くことは少ないようだ。マスコミは狭き門だから、と言われそうだが実際そうだろうか？たしかに倍率が高い会社は少ない。しかし、その会社でやりたいことが明確で、そのための努力をしている人は入社できる。実際私のもとに来た学生の方々の大半はやりたいことが不明確で、そのためだろうか特別な努力をしている人は少ない。はっきりしているのは「会社に入りたい」というスタンスだけである。

邪道には邪道である明快な理由が必要である。やりたいことが不明確な人間には冷たい道である。マスコミOB会は仕事を楽しんでいる人の集まりである。自分にやりたいことがあって、それを楽しんでいる人の集まりである。会社や組織への所属感に満足している集団ではないのである。

日本の仕事感はまだまだペインフルだ。どれだけ苦しんだかが評価されることが多い。苦痛の量をお金に変える社会。我慢を自慢したり、プライベートの犠牲をした数だけ誉められるような風潮。これは日本企業がクリエイティブ力不足で他国に先を越された大きな原因となっていると思う。今求められているのは、ペインフルな会話を笑ってしまう仕事を楽しむ人々なのではないかと思う。「頭は悪いけれど体力だけには自信があります」という人はダメだと思う。

事実、この数年マスコミOB会に入ってきた人たちの学生時代を思い出すと、しつこく私たちを追いかけ、いつも笑顔で、何度も作品を見せに来てくれた人ばかりだ。私の厳しい言葉にも全然めげなかった。それがただのつらい作業であつたら、きっと数回であきらめただろう。彼ら、彼女らはあきらめずに続けた。

マスコミOB会はゆるい。大して得することもないが、面倒なこともない。しかし、困ったことがあれば、すぐに協力してくれる強さだけはある。ともに仕事を楽しむためにである。こういう居心地のいい会も考えてみれば少数派の東京学芸大学だからこそなのだ。仕事を楽しまない人を私たちは待っている。

青森県支部のあゆみ

青森県支部

支部長 葛西 守人

(昭和39年 甲類社会科卒)

私ども青森県支部の発足となりますと、話は昭和61年にさかのぼります。

当時、私は青森県教育委員会の学務課に勤務していましたが、同委員会の社会教育課に三浦敬二郎先輩（昭和28年乙類英語科卒で青森県最初の学大生）、そして保健体育課に種市哲さん（昭和45年B類保健体育科卒）と、偶然にも同じ教育委員会の中に3人の同窓生がおりまして、この3人を中心に県内の卒業生同士の集まりを持ちたいと意気投合しましたのが、そもそもの始まりであります。

早速、名簿の整理からということで取り掛かりましたところ、50名程の同窓生が県内各地で活躍していることがわかりましたので、三浦先輩に会長をお願いするとともに、「とにかく集まりを持とう。課題は歩きながら一つ一つ解決していこう。」と仲間達に声を掛け、翌昭和62年の7月に最初の同窓会を開催する運びとなった訳であります。

その後も、年に1回程度ではあります同窓会の開催を継続しております。

同窓のよしみで卒業生同士が交流を深めることができればそれで良いということで、今春の支部設立までは、規約無し、会費無し、会員資格は東京学芸大学の卒業生であることのみといったスタンスでやってまいりました。

全国同窓会の設立に伴い、規約を整備し、支部として再スタートをきったところでありますが、会設立当初の思いは忘れずにいたいと思っております。

最初の同窓会から17年程がたった訳ですが、青森県内で頑張っている後輩達も年々増え、会員は150名を超えるほどになりました。

毎年の同窓会で恒例となっておりますのが、参加者の近況報告です。当然、ほとんどのメンバーが教員でありますことから、そこでの話題は、やはり、教育現場を取り巻く様々な問題が中心となっております。若手の先生方が、日々、現場で直面している課題などについて、経験豊富な先輩方に聞いてもらい、解決とまではいなくても、何かしらの解決の糸口を得て帰っていく、そんな有意義な交流の場となっております。

また、最近では、同窓会としての新しい企画（例えば、大学から講師を招いての講演会や研修会をなどの開催）を考えてみてはどうかなどといった積極的な意見も出されておまして、まさに、丁度その矢先に辟雍会が設立されたということで、県内の同窓生ともども大きな期待を寄せている次第であります。

最後になりますが、辟雍会の設立にご尽力された方々の

ご苦労に対し、心より感謝を申し上げますとともに、微力ではありますが、青森県の会員ともども辟雍会の発展に向けての協力を惜しまない所存でありますことを申し上げまして、青森県支部からの報告とさせていただきます。

青森県同窓会に参加して

青森県支部

里村 輝

(平成10年N類スポーツ科卒)

大学卒業後、故郷の青森で教職に就いておりますが、同窓会の案内は1年目から頂いていたと記憶しております。

大学の同窓会がどういったものかと興味を持ちながらも、学校行事や研修などと日程が重なってしまい、残念な思いをしていましたが、3年目になってようやく出席のチャンスに恵まれました。

期待半分、不安半分で会場に入ってみると、ベテランの先生方はもちろん、現役の校長や教頭、また、社会教育の分野で活躍なさっている方々と、また駆け出しの私にとっては大の付く先輩ばかり。

そんな中での、自己紹介と近況報告の緊張たるや大変なものであったことを記憶しております。

しかし、(初参加の私に対する、先輩方のお気遣いもあったに違いないのですが…) 会が進むにつれ、学生時代の思い出などを、大先輩達と何の抵抗も無く自然にできたことは不思議な感覚として私の中に残っております。年齢の差や職業の違いはあれど、同じ大学を卒業した仲間という安心感と一体感を感じることができたひと時でありました。

閉会後は、学芸大学を卒業して本当に良かったと改めて思うとともに、国分寺の街並みを懐かしく思い出しながら、帰路に着きました。

2回目以降はさほどの緊張も無く、職場での悩みを聞いてもらったり、一緒に学生歌を歌ったりと、大変楽しく有意義な時間を過ごさせてもらっています。

昨年は、辟雍会青森県支部のスタートにも立ち会うことができました。

まだまだ未熟な私ではありますが、今後は、後輩達にも積極的に声を掛けるなどして、この会の発展に貢献できればと思っております。



学校大好き・勉強大好き

岡山県倉敷市琴浦東小学校

金子 廣志

(1974年保健体育卒)

我が校は瀬戸大橋の児島～坂出ルートの子島側に位置する。鷺羽山から望む瀬戸内海は絶景である。本校は今年で創立130年を迎えるが、1昨年新築され、倉敷市内で唯一オープンスペースを持つ学校に生まれ変わった。児童数は423人。教職員数31人。校舎の一部に民俗資料館も併設されていて自動が地域学習に活用するほか、地域にも開放されている。

職員室からは運動場やプールが一望できる。また職員四つ前には南北に通路が延びている。ここを「ふれあい通り」と呼んでいる。南側に幼稚園、保育園が隣接しているので朝夕の送り迎え時にはちょっとした人通りになる。

大阪の池田小事件の後、学校の危機管理体制の強化が図られた。本校も例外ではないが、正門に鍵はかけなかった。なぜなら東西南北に走る通路は地域の生活道路として生きていたからである。ここを通る人々は挨拶を交わす。開かれた学校と安全管理は必ずしも相反しない。地域の実態を踏まえ学校を開いていく必要がある、学校の安全は地域の人々とともに守っていくという姿勢が重要だと考える。

毎年5月には地域とコミュニティや連合子供会が主催して運動会が行われる。また夏休みには夏祭りが行なわれ、1000人を超える参加がある。各団体から模擬店も出され、教職員も模擬店を出して参加する。2月には児島地区12校が集まったの文化祭や岡山県重要文化財の祭囃子「しゃぎり」を子供たちが継承し、その発表などもある。

平成15年と16年、本校は総合的学習の研究指定を受けた。子供にどんな力をつけさせるかの原点に立って、地域の人材の活用や地域性を考えながら、生の人間とのかかわりを重視した研究を進めて意向と思っている。

今年初めて「東京学芸大学岡山県人会」の案内が届いた。8人が集まったがほとんど高校教師で運動部の顧問をしていた。名簿には昭和29年から平成8年までの保健体育科卒40人の名前があった。

(社団法人・東京学芸大学同窓会機関誌「学藝」89号＝2003年3月＝から)

富山県学芸大OB・OG「獅子の会」

富山市立三成(さんじょう)中学校

石上 正純

(1974年保健体育科卒)

私が生まれ育った富山県に教員として戻ったのは昭和49年4月。当時、周囲にいる教員は富山大学出身者がほとんどであった。「東京学芸大学出身者と情報交換がしたい」と思い始めたころ、小学校教育研究会の会合で3人の学芸大学出身の先輩方と出会った。懐かしい母校の話題や教育に関する話に花を咲かせることができた。「この会は大切にしていこう」という思いが強まった。それからは機械あるごとに集まり、赤提灯のおでん屋でのミニOB会が始まった。

飲むうちに「富山県全体のOB会を立ち上げよう。名簿を作ろう」ということになり、さっそく活動が始まった。ところか県内の教員名簿には出身大学までは載っておらず、口コミで調べ、やっとの思いでOB会発足の日を迎えることができた。このときの会員数は15名であった。

その後、年に1回開催している会を、ただ飲むだけの会ではなく、さらにパワーアップした会にしようとスキーツアーを組んでみたり、学芸大学出身の先輩から学ぶ講演会を開いたりしてきた。

普段は同じ職場の仲間との会話に終始しがちな教員の世界にいる私たちであるため、こうした異なる職種や違う学校の方との話題に盛り上がることも多く、大変意義深いものになっている。最近では地元のラジオ局に勤務している学芸大OGのパーソナリティーや富山大学教育学部長の話を伺う機会を持った。

昭和49年、4人からスタートした学芸大学出身者の会は、今では281人の大所帯になった。名称も時代とともに変わり、現在では学生歌にあわせ「獅子の会」と称している。

獅子の星座の旗の下 希望輝く我が母校みんなでこの歌を歌うのが夢である。

(社団法人・東京学芸大学同窓会機関誌「学藝」88号＝2002年12月＝から)

新潟県・県北のそれぞれの学校で

村上市岩船郡荒川町立保内小学校

磯部 正明

(昭和44年卒)

新潟県は5つの県と接しています。そのもっとも北の山形県と接するのが私の勤務する学校のある村上市であり、岩船郡です。岩船郡山北町は頼三樹三郎（幕末期の志士。頼山陽の3男）が「松島、此美麗は有れども此奇抜無し。雄鹿、此奇抜は有れども此美麗無し」と言った「笹川流れ」の景勝を楽しむことができます。

村上市、荒川町、山北町、関川村、神林村、朝日村、粟島浦町の1市2町4村からなるこの地域は、ずっと以前から一体となって様々なことに取り組んできました（合併推進に向けた研究も行なわれているようです）。特に教育関係では小・中の校種を問わず、校長会や教頭会、教育研究協議会、体育連盟などみんな「村上市岩船郡」（単に「郡市」と呼ぶことが多い）という冠をかぶっています。

この「郡市」には34の小学校があり、東京学芸大卒業生6人が勤務しています。この6人のうち離島の粟島浦村立粟島浦小学校に勤務する大滝和子さんを除く方々にそれぞれの学校を紹介していただきます。

荒川町立保内小学校

浮田 清俊

(昭和57年卒)

江戸川区で教員生活のスタートを切った後、故郷の新潟に戻って20年になる。この間、文部省海外派遣団の一員としてドイツの教育視察に行かせていただいたこともある。

初任者だったころ「10年後の学校」という本を読んだ。「1日の学習プランを子供たちが作る」「コンピューターによる学習、ネットワーク化」など夢のようなことが書いてあった。10年後には実現しなかったが、20年たった今、現実になりつつある。今、学校は大きく変わろうとしている。新しい教育課程の編成に苦心している。大変だがおもしろい。

朝日村立三面小学校

大勝 直行

(昭和51年卒)

私の勤務する学校は児童数88人の小規模校です。三面川の中流に位置する素敵な環境の中にあります。「わかあゆ三面」という太鼓の課外活動が3～6年生の希望者によって編成され、庚無い行事の折に演奏したり、村内の行事に参加したりして好評を得ています。演奏はかなり難しいものですが、毎年新メンバーに引き継がれていきます。

「レインボーファンタジー三面」というコーラスの課外活動もあります。構内での演奏だけではなく、村民合唱祭にも

参加します。

村営の「ぶどうスキー場」を使ってスキー教室も行なっています。1年生から全校参加です。6年生になるころにはパラレルターンも上達します。

村上市立岩船小学校

小林 淳英

(平成元年卒)

公開授業を含むにどの実践を試みました。一つは社会科の歴史学習です。「現在とのつながり」「前に時代との関わり」「他の国との関わり」の三つの点から設定した視点を与え、その時代のネーミングを検討していく学習活動を小単元の終わりに取り入れました。

もう一つは総合的な学習の国際理解の実践です。外国人と交流する機会も二度設定しました。子供たちは「もっと外国人とふれあい、外国のことを知りたい。日本のことを伝えたい」という意思や願いを持ち、交流会を企画、運営しました。

朝日村立朝日みどり小学校

鈴木 淳

(平成6年卒)

算数の力が低いという問題がありました。①基礎的な計算能力が弱い②既習の事項を学習に生かしていない③問題解決の手立てを考える力が弱い、という三つの問題点が顕著でした。そこで①定期的な計算テストで個々の計算力を見取り、放課後個別に指導する②新しい単元に入る前に関連する既習事項について振り返る時間をとる③課題を見直し、子供に身近でわかりやすいものにする、と言う具体的方策を立て、1年間継続して取り組んでいった。その結果、苦手意識が少なくなり、「わかるようになった」という声が多くなった。

(社団法人・東京学芸大学同窓会機関誌「學藝」86号＝2002年8月＝から)

「辟雍」に託された夢の実現をめざして

辟雍会幹事長 池田 義人

今からおよそ3千年前の中国で、どのような人たちがどのような話し合いをして、「辟雍（へきよう）」という名前の大学を作ったのか。知識がないから余計に興味も増すのであるが、中国文学の研究者である佐藤正光先生の命名には絶妙のものがあると思う。時代は一足飛びに現代であり、21世紀の日本である。大学の名前ではないにしても、大学と不即不離の関係にある全国同窓会の名前を「辟雍」と提案されたのは慧眼と言わざるを得ない。まさに温故知新であり、新しい時代の同窓会のあり方を示唆するものではないか。

個人的な感想から述べると、同窓会という言葉の響きには、過ぎた昔をひたすら偲ぶような刹那さや甘さがあり、後ろ向きであり、決して嫌いではないのだけれども、これにのめり込むような魅力は実はあまり感じていなかった。しかし、母校とか先輩という言葉にはいまも琴線に触れる響きがあり、小学校や中学校の同窓会の案内が来ると、どんな遠方であれ万難を排し出席するようにはしていた。

出席すればいつも必ず楽しい。昔に机をならべた仲間というのは不思議なもので、お互いかなりの年輪を重ねていても、往時そのままの印象で話ができる。知らない場所であえどこのおじいさんかと思うようなひとが、同窓会で会うと、若々しく蘇えてくる。楽しくないはずはない。しかし、この楽しさも刹那的である。時間が来て、また再びの再会を約して家路につくとき、何ともいえない寂しさや虚脱感のような気持ちに襲われる。同窓会はいつも夢の時間であり、この夢は醒める夢であって、現実の生活のなかではあまり意味を持たない、と思っていたのである。

しかし、どうであろうか。何か新しいこと、面白いことは、いつも人が集まるところに始まる。それは同窓会

といえども例外でなく、これまで自分が意識的にならなかつただけで、実はたくさんの可能性がそこにはあったのではないか。旧友であればこそ忌憚なく話ができる。夢や希望を語れる。そこで共感が得られれば、すでに1人の同志の誕生となるではないか。

世紀末の日本で起きた地下鉄サリン事件は様々な意味で社会の構造を変えるものであった、と思う。人はひとりでは生きていけない。何かいいことをしようとしても仲間が要る。自分を高め、高潔な人格を得るために「修行」すること、あるいは「世直し」とか、「人助け」という尊い気持ちに殉じようとする、若い人たちがこうした気持ちを抱くことは社会にとっても重要である。しかし、若い人たちのこの尊い気持ちを悪用するような組織があって、優秀で志も高いはずの人が、とんでもない犯罪に加担してしまっており、逮捕され、死刑判決を受けるような境遇に立たされている。社会のために役立つとして、いつの間にか社会の敵として糾弾されてしまうことがあり得る。人を救うべきはずの宗教が、悪の温床のような役割を演じてしまっている。

同じようなことは政治の世界でも展開されており、ただひたすら偉い先生の言うとおりのことをして、いつか破滅に導かれてしまった人の例はたくさんある。政治も本来は人の幸せを願う試みのはずで、最高道徳の発現であるべきものと考えているが、昨今の政治状況や政治家たちの言動や振る舞いのなかからは、あまりそうした高尚な志は感じられない。

政治も宗教も信じられない。電子メールの架空請求やインターネットトラブルの例を挙げるまでもなく、不信任と警戒感に満ちてしまった現代社会において、人と人とが信に結びつくことのできる機会と場所は急速に失われてしまっている。そうした状況と文脈のなかに身を置

き、しかも教育を標榜する大学のなかに在るとき、改めて同窓会の持つ大きな価値と可能性について考えるのである。

人が集まる。それだけでも素晴らしいが、この集まりには邪心がなく、党派も宗教もない。しかも協調的であって、信が置け、和があり、懐かしさがある。それはある意味で失われた価値そのものといえはしないか。そこはもう人間の「ふるさと」であり、「生きがい」の生まれる場所となってきた。

東京学芸大学だけのことではない。全国にあるたくさんの学校のたくさんの同窓会のあり方がいま、数少ない希望の鼎として、その軽重を問われている、と思うのである。そして東京学芸大学は、日本の教育系大学の中核として、全国の、たくさんの同窓会のお手本となるような活動を、積極的に展開していかなければならない、と考える。

そこで「辟雍」である。「明達諧和」というこの言葉の意味は、前向きであり、明るくて開放的である。東京学芸大学全国同窓会としての辟雍会は、決して過去を偲ぶだけの会であってはならない。それどころか、いま日本の社会、特に教育の場を覆っている暗雲を吹き払うような気概を持たねばならない。それこそが希望であり、東京学芸大学の卒業生、在校生、附属学校も含めた全教職員とそのOB・OGの叡智を結集すれば、必ず達成できる希望と確信するのである。「辟雍」に託された夢は大きい。しかし醒めることのない夢は必ず実現するものと信ずる。この大きな夢の実現に向けて、たくさんの仲間たちと、これから一步一步と歩んでいけることを生涯の喜びとしたい。



設立総会後の懇親会で「若草もゆる」を歌う同窓生たち（2003.11.3）

設立

「辟雍会」の設立総会が、小金井祭開催中、ホームカミングデーの2003年11月3日午後2時から芸術館ホールで開催され、同会は正式に発足した。設立総会には全国から約200人の同窓生が出席、岡本靖正学長の「東京学芸大学は約6万人の同窓生が集い、一丸となって新しい歴史を築いていく時代が来た」という挨拶に続いて、議事に入った。

選出された東原昌郎議長（健康スポーツ科学科）が議案書を基に議事を進行、設立趣意書、会則の承認、会長および理事の選任などが提案され、満場の拍手で承認された。初代会長には副学長の荒尾禎秀氏が選出され、副会長には吉野尚也氏（社団法人・東京学芸大学同窓会副理事長）、東原昌郎氏、種市哲氏（青森県同窓会幹事長）の3人が、また加藤正克氏（社団法人東京学芸大学同窓会総務部長）ら15人が理事に選出された（うち5人が未定）。荒尾初代会長は「早い時期の法人化に向けて、卒業生、在校生、教職員が一体となって努力して行きたい」と挨拶。続いて遠藤満雄理事（毎日新聞社）から事業計画、池田義人幹事長（数学・情報科学科）から資金計画の説明があり、約1時間の議事は終了した。

続いて、設立総会記念のパネルディスカッション「これからの大学と教育～卒業生はどう考えるか」、および清水和孝氏（フルート）、小林大作氏（テノール）、石橋史生氏（ピアノ）と学芸大の誇る3人のアーティストによる記念演奏会が行なわれた。午後6時半からは会場を国分寺駅ビル内のLホールに移して「懇親会」が行なわれ、約100人が出席。全員が肩を組んで「若草もゆる」を熱唱し、辟雍会の発展を誓い合った。



■ ■ ■ 岡本靖正（前学長）のご挨拶

本日は東京学芸大学第5回ホームカミングデーに日本全国から同窓生の方々、在学中の学生の皆さん、現在あるいはかつての教職員の方々がお集まりくださいました。大変うれしいことです。心から歓迎申し上げます。

ご承知の通り、東京学芸大学には、「社団法人東京学芸大学同窓会」と言う立派な同窓会がありまして、大学がこれまで陰に陽にさまざまにご支援をいただけてまいりました。ただ、これもご承知の通り、東京学芸大学は昭和24年、1949年に新制国立大学として創立された時、その母体は東京第一、第二、第三師範学校と東京青年師範学校でありましたし、先程伺っても「七杉会」という師範学校時代の同窓会組織を継承されたこともありました。

そして義務教育が中学校まで延長されて、教員需要が一挙に拡大された時期でもありましたから、卒業生の方々は圧倒的に東京で教鞭を執られた方が多かったと思います。そういうこともありまして社団法人東京学芸大学同窓会は、主として、東京都の公立学校の先生とされた方々を会員とする同窓会でありました。

その後、東京学芸大学は、名実共に全国区の教員養成大学となると同時に、卒業生の方々が学校だけではなく、非常に多様な領域で活躍されるようになり、更に昭和63年、1988年には少子化を背景として、教員免許状の取得を卒業要件としない教養系課程が教育学部の中に設置されて、本年15年目を迎えております。

教養系の1回生の皆さんが卒業されるころから、「地域・職域を超えた全国規模の同窓会組織が必要である」という声が大きくなっておりましたが、同窓会は正式には大学の外の組織でありますので、大学が音頭を取って立ち上げるわけには参りませんで、種々の難しさがありました。

平成11年、1999年に大学が創立50周年を迎えたのを機に卒業生名簿が作られ、その年の11月3日、本日もそうではありますが、小金井祭のさなかの文化の日を第1回ホームカミングデーとして、多くの方々がこの間、全国組織立ち上げに尽力をされ、一昨年第3回のホームカミングデーには東京学芸大学出版会を立ち上げ、第5回のホームカミングデーに当たる本日は、めでたく辟雍会の設立を迎えることができました。

歴代の理事長の方々をはじめとする社団法人東京学芸大学同窓会のこれまでのご支援、並びに、全国同窓会設立に対するご理解とご協力、そしてその立ち上げに尽力をされたすべての関係者の方々に深く敬意を表すると共



に、大学を代表して厚くお礼申し上げます。

また本日は、創立50周年事業の一つとして計画をし、実施が遅れておりました東京学芸大学教育文化賞の第1回授賞式が予定されております。

わが国の教育は、初等・中等教育から高等教育まで今大きな転換期を迎えております。戦後の学制改革により、昭和24年5月31日に国立学校設置法に基づき創設された国立大学は、55年目となる来年、平成16年4月1日から法人化されて、本学は国立大学法人東京学芸大学となります。

この半世紀の間には、大学の歴史においても実にさまざまなことがありましたが、昭和41年、1966年に大学院教育学研究科修士課程、昭和48年、1973年には特殊教育特別専攻科、また平成8年、1996年には連合学校教育学研究科博士課程が設置されて、本年度までに学部において49,135名、大学院修士課程において5,543名、博士課程50名、特別専攻科で673名の卒業生、修了生を送り出しております。博士課程の方々は学位をお受けになられた数であります。これら約55,000人の方々、及び学部、大学院修士・博士・特別専攻科を含む約6,000人の在学生の方々、200名余りの名誉教授の方々、そして、現在及びかつての教職員の方々が辟雍会の会員の資格をお持ちの方々ということになります。

辟雍会というのは一見難しい名前ではありますが、その出典は礼記等にあって、古代中国、周代の大学で学芸が教えてられていたということに由来するとのことであります。由緒正しき立派な名前であります。

最後に個人的なことを申し述べさせていただきますと、私は今週末で6年間の学長の任期が満了になります。教養系課程の第1回生の方々が卒業されるころに教養系学部主事を務めていた私にとって、今の学長の任期のうちに辟雍会が設立されましたことは、格別の喜びと感慨を伴うものがあります。

設立までの経緯

- | | | | |
|-------------|--|-------------|---|
| 1988年4月 | これまで教員養成課程のみで編成されていた東京学芸大学に、国際文化教育課程など4つの教養課程が設置され、1992年3月、こうした教養課程の最初の卒業生が生まれる。大学のこのような変貌を受け、大学内において、また、社団法人東京学芸大学同窓会のなかにおいても、地域・職域を越えた全国的な同窓会組織を構築する必要性を述べる声が高じて来ることとなる。 | 2002年11月3日 | 第四回東京学芸大学ホームカミングデーが開かれ、主に教育問題を専門とするNHK解説委員の早川信夫氏を招いての特別記念講演会「新しい時代の教育を創り出すために」が開催される。 |
| 1994年 | 東京学芸大学50周年記念行事を準備するための会合において「基金」の募集、卒業生の全国組織をつくること、ホームカミングデーのこと等が話し合われる。 | 同日 | 社団法人東京学芸大学同窓会理事長の佐藤倫則氏と同窓会検討会との茶話会が開催され、同窓会協議会を設けて、そこに社団法人東京学芸大学同窓会から代表者3名が出席することとなった。 |
| 1994年12月 | 東京学芸大学50周年記念会が組織される。 | 2002年11月29日 | 同窓会検討会が開催され、「東京学芸大学の全卒業生、修了生、在学生、教職員、退官者のための全国組織の同窓会を平成15年11月に設立し、平成16年4月より具体的運営を開始する」という基本方針を決議する。 |
| 1996年 | 東京学芸大学50周年記念会総務会に準備小委員会が組織され、ロゴマークの募集、校歌・校章等制定に関するアンケート調査等が行われる。 | 2003年2月18日 | 社団法人東京学芸大学同窓会代表者と同窓会検討会との第一回同窓会協議会が開催され、同窓会の現状や今後の進め方などについて議論する。 |
| 1996年10月29日 | 東京学芸大学卒業生名簿が発行される。 | 2003年3月17日 | 第二回同窓会協議会が開催され、全国同窓会の通称を公募することが決定し、公募要項が発表される。 |
| 1997年 | 準備小委員会において、ホームカミングデーの企画を議論するなかで、この企画の柱は卒業生の全国組織をつくることにあるという共通認識を確認する。 | 2003年4月14日 | 第三回同窓会協議会が開催され、全国同窓会の設立趣意書(案)、会則(案)、組織構成(案)が提示され、議論される。 |
| 1998年4月17日 | 東京学芸大学出版会設立を願う有志の会が開かれ、東京学芸大学出版会設立準備会が発足する。 | 2003年5月14日 | 全国同窓会の設立のための、東京学芸大学の全教職員、在学生を対象とした説明会が開催され、大学構成員に対して全国同窓会の設立趣意書(案)、会則(案)、組織構成(案)が提示され、議論される。 |
| 1999年7月22日 | 第二回東京学芸大学出版会設立準備会総会が開かれ、出版会と全国同窓会とは別な組織であるべきこと、しかし大学も含めて、3者の連携は重要となること等が確認される。 | 2003年5月31日 | 全国卒業生代表者会議が開催され、本年11月3日に東京学芸大学全国同窓会(仮称)の設立総会を行うことを決議し、全国各地より参集した卒業生の代表と、大学構成員に対して全国同窓会の設立趣意書(案)、会則(案)、組織構成(案)が提示され、議論される。また、設立準備のため、東京学芸大学全国同窓会の設立に先行して、幹事会および同窓生会館建設委員会の発足を決議する。 |
| 1999年11月3日 | 第一回東京学芸大学ホームカミングデーが開かれ、記念シンポジウム「日本の教育と東京学芸大学の明日～生きる力を育てる教育～」、「東京学芸大学創立50周年記念・留学生スピーチコンテスト」などが行なわれる。 | 2003年6月14日 | 社団法人東京学芸大学同窓会総会が開催され、同窓会検討会のメンバーも参加する。理事長挨拶のなかで全国同窓会設立の賛意が示される。 |
| 2000年11月3日 | 第二回東京学芸大学ホームカミングデーが開かれ、2000年全米最優秀教員に選ばれたアメリカ・カリフォルニア州の教師マリリン・ジャシエッティ・ウィリー博士を招いての特別記念講演会「教えることと学ぶこと」が開催される。 | 2003年7月4日 | 第四回同窓会協議会が開催され、幹事会の立ち上げと協議会の幹事会への合流、今後の手続きなどが議論される。 |
| 2001年4月16日 | 社団法人東京学芸大学同窓会より50万円の寄付金が東京学芸大学出版会設立準備会に納入される。 | 2003年8月6日 | 全国卒業生代表者会議の決定に基づき、第一回東京学芸大学全国同窓会幹事会が開催され、今後の進め方について議論する。 |
| 2001年9月18日 | 東京学芸大学部局長会の決定に基づき、東京学芸大学学長のもとに「同窓会検討会」が設置され、その第一回委員会が召集される。 | 2003年9月12日 | 第二回東京学芸大学全国同窓会幹事会が開催され、趣意書(案)、会則(案)、理事構成(案)について議論し、設立総会日程および設立総会終了後の記念懇親会の開催要領について了解を得る。 |
| 2001年11月3日 | 第三回東京学芸大学ホームカミングデーが開かれ、特別記念行事として東京学芸大学出版会設立総会が開催され、北海道教育大学長の村山紀昭氏による記念講演「新たななる教育学研究の発信を期待して」が行なわれる。また、この日に、東京学芸大学出版会第1回記念刊行本「これからの教育と大学」が出版される。 | 2003年10月2日 | 第三回東京学芸大学全国同窓会幹事会が開催され、会長を含めた役員候補を決定し、全国同窓会の名称を辟雍会とすることが決議される。 |
| 2002年9月20日 | 第四回ホームカミングデー実施に向けて、同窓会検討会が召集される。この会議において、ホームカミングデー設立当初の目的にあった同窓会の全国化について、本格的な検討に着手する。 | | |

会 則

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）と称する。

(事務所)

第2条 本会の事務所は、東京学芸大学内（東京都小金井市）に置く。

(目的)

第3条 本会は、会員相互の親睦を図るとともに、広く教育及び文化の振興・発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 会員名簿及び会報の発行
- (2) 教育又は文化に関する事業の主催及び助成
- (3) その他必要と認められる事業

(支部)

第5条 本会は、必要に応じ、支部を設置することができる。
2 支部に関し必要な事項は、別に定める。

第2章 会員及び特別会員

(会員)

第6条 本会の会員は、次の資格を有するものとする。
(1) 本学の学部、特別専攻科又は大学院（以下「学部等」という。）に在籍している者
(2) 学部等を卒業又は修了した者
(3) 学部等に在籍したことがある者
(4) 本学の教職員
(5) 本学に勤務したことがある者
(6) 前各号以外の者で、理事会の推薦により総会の承認を得たもの

2 前項第2号、第3号及び第5号には、本学に包括された師範学校を含むものとする。

第7条 本会は、本会の名誉を著しく損なうような反社会的行為を行った会員を除名することができる。

(特別会員)

第8条 東京学芸大学長を本会の特別会員とする。

第3章 役員、顧問及び幹事

(役員)

第9条 本会に、次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 3名程度
- (3) 理事 15名程度
- (4) 監事 2名
- (5) 幹事長 1名

(役員の選出)

第10条 会長は、理事会が選考し、総会の承認を得て委嘱する。

2 副会長、理事、監事及び幹事長は、理事会の議を経て、会長が委嘱する。

3 幹事長は理事を兼務する。

(役員任期)

第11条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、役員に欠員が生じた場合の後任役員任期は、前任者の残任期間とする。

(役員職務)

第12条 会長は、本会を代表し、本会の業務を総理する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。

3 理事は、本会の業務を企画し執行する。

4 監事は、本会の会計を監査する。

5 幹事長は、本会の業務を円滑に行うための職務を行う。

(顧問)

第13条 会の運営の継続性を確保するため、本会に次の顧問を置く。

- (1) 前東京学芸大学長
- (2) 本会の前会長

(幹事)

第14条 会の運営を円滑にするため、本会に幹事を置く。幹事は、必要に応じて会長が任命し、人数の制限は設けない。

第4章 会議

(会議)

第15条 本会に次の会議を置く。

- (1) 総会
- (2) 全国代表者会議
- (3) 理事会
- (4) 幹事会

(総会)

第16条 総会は、会員をもって組織する。

2 総会は、次の事項を審議承認する。

- (1) 理事会の審議・決定事項
- (2) その他本会の運営に関する重要事項

3 総会は、理事会が必要と認めたときに開催し、会長が招集する。

(全国代表者会議)

第17条 全国代表者会議（以下「代表者会議」という。）は、別に定めるところにより組織する。

2 代表者会議は、原則として、年1回開催する。ただし、必要に応じて別途開催することができる。

第18条 第16条第2項に規定する事項は、代表者会議の審議承認事項とすることができる。

2 前項の規定により審議承認した事項は、速やかに会員に周知するものとする。

(理事会)

第19条 理事会は、会長、副会長、理事及び幹事長をもって組織する。

2 顧問及び特別会員は、理事会に出席し、審議に加わることができる。

3 理事会は、次の事項を審議・決定及び執行する。

- (1) 役員改選に関する事

(2) 予算及び決算に関する事

(3) 会則及び支部の規約に関する事

(4) 支部の設置及び廃止に関する事

(5) 会費に関する事

(6) 本会の事業に関する事

(7) 会員の資格等に関する事

(8) その他本会の運営に関する事項

4 理事会は、必要に応じて開催し、会長が招集する。

5 理事会は、会長が議長となる。

6 理事会は、構成員の2分の1以上の出席がなければ会議を開くことができない。委任状は出席とする。

7 理事会の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(幹事会)

第20条 幹事会は、理事会から委託を受けた業務を行う。

2 幹事会は、必要に応じて開催し、幹事長が招集する。

(周知の方法)

第21条 会議の開催通知、会議の審議承認事項の報告、会計監査の報告等については、本会ホームページへの掲載、電子メール等の方法により行うことができる。

第5章 会計

(経費)

第22条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって充てる。

(会費)

第23条 会員は、入会にあたって、別に定める終身会費を納付するものとする。

ただし、名簿の作成・発行、その他臨時に要する費用は、その都度徴収する。

(会計年度)

第24条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(会計監査)

第25条 監事は、毎年度ごとに会計を監査し、理事会の承認を得なければならない。

第6章 雑則

(会則の変更)

第26条 会則は、総会又は代表者会議において、出席者の3分の2以上の同意を得て変更することができる。

附 則

この会則は、平成16年10月30日から施行する。

■ 理事会

会 長	荒尾 秀	東京学芸大学日本語・ 日本文学研究講座教授 (S43国語卒)
副会長	種市 哲	青森県同窓会幹事長 (S45保体卒)
	束原昌郎	東京学芸大学 健康・スポーツ科学講座教授 (S45保体卒)
	吉野尚也	(社)東京学芸大学同窓会副理事長(S37保体卒)
理 事	五日市稔	岩手県立盛岡工業高校 (S46数学卒)
	遠藤満雄	ジャーナリスト・元毎日新聞社 (S43社会卒)
	加藤正克	(社)東京学芸大学同窓会総務部長(S44保体卒)
	菅野政徳	(社)東京学芸大学同窓会組織部長(S49保体卒)
	菊池俊昭	東京学芸大学 事務局長
	草野 剛	富山県同窓会事務局長 (H2国語卒)
	城間辰雄	沖縄県同窓会代表 (S47数学卒)
	玉林尚之	島根県金城町立今福小 (S59保体卒)
	丹伊田敏	多摩大学附属高校 (S40理科卒)
	馬淵貞利	東京学芸大学 副学長
	村上英興	東京学芸大学 大学院連合学校教育学研究科長
	山本一雄	清水建設株式会社 (S45保体卒)
監 事	金子義和	三井情報開発株式会社 (S46数学卒)
	中橋美智子	東京学芸大学名誉教授 (S31家庭卒)
幹事長	池田義人	東京学芸大学 数学講座教授 (S46数学卒)
顧 問	岡本靖正	東京学芸大学前学長
	佐藤倫則	(社)東京学芸大学同窓会前理事長(S35保体卒)
特別会員	鷺山恭彦	東京学芸大学学長

■ 幹事会

幹 事 長	池田義人	数学講座教授 (S46数学卒)
幹事長代理	鳴海多恵子	生活科学講座教授 (S46家庭卒)
幹 事	岩瀬泰子	障害児教育同窓会代表 (S39聾教卒)
	赤堀美奈子	家庭科同窓会代表 (H1家庭卒)
	中農朋子	IT教育コンサルタント (H1数学卒)
	井口 太	教育学講座教授 (S46音楽卒)
	小池敏英	特別支援科学講座教授 (S51養教卒)
	濱田豊彦	特別支援科学講座助教授 (S61特教卒)
	池田栄一	外国語・外国文学研究講座教授
	大澤克美	人文科学講座助教授 (S57社会卒)
	黒石陽子	日本語・日本文学研究講座助教授 (S55国語卒)
	金沢育三	基礎自然科学講座教授
	長谷川正	基礎自然科学講座教授 (S46理科卒)
	松川正樹	広域自然科学講座教授 (S49理科卒)
	真山茂樹	広域自然科学講座助教授 (S53理科卒)
	筒石賢昭	音楽・演劇講座教授
	古瀬政弘	美術・書道講座講師 (S63美術卒)
	室屋隆吾	健康・スポーツ科学講座教授 (S49保体卒)
	井上録郎	経理課
	田村典男	総務課
	八木澤弘子	契約課
	山本晴信	社会連携課
	大澤一美	辟雍会事務局
	林 静代	辟雍会事務局



- 1 1968年10月。むさしのマラソン。
- 2 1960年代後半の美術科。
- 3 1965年ごろの附属図書館内。
- 4 1968年ごろの体育館内。
- 5 1965年ごろの特殊教育学科。聴覚障害児の聴力検査。
- 6 1965年ごろの美術科。





7



8

9



10



- 7 1965年前後の附属高等学校玄関。
- 8 1965年ごろ。図書館内ロビー。
- 9 1965年ごろの大泉寮。
- 10 1968年夏。旧兵舎を利用した特殊教育研究棟。
- 11 1968年春。



11



12



13



14

12 1960年代後半の附属学校部。

13 1968年冬。

14 1954年ごろの世田谷。



1963年秋



- 15 1953年ごろ。富士山がこんなにくっきり。
旧陸軍技術研究所の給水塔。
（「写真で見るわたしたちのまち小金井」より）
- 16 開学当時のキャンパス敷地。
（「写真で見るわたしたちのまち小金井」より）
- 17 旧陸軍技術研究所に接収された住民たちが建てた碑。





